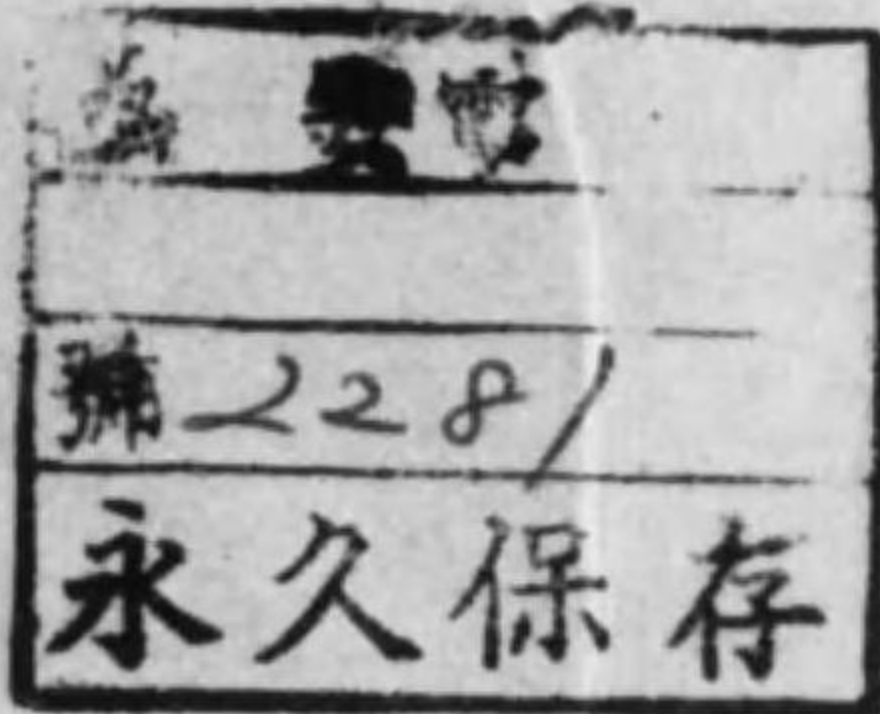


始



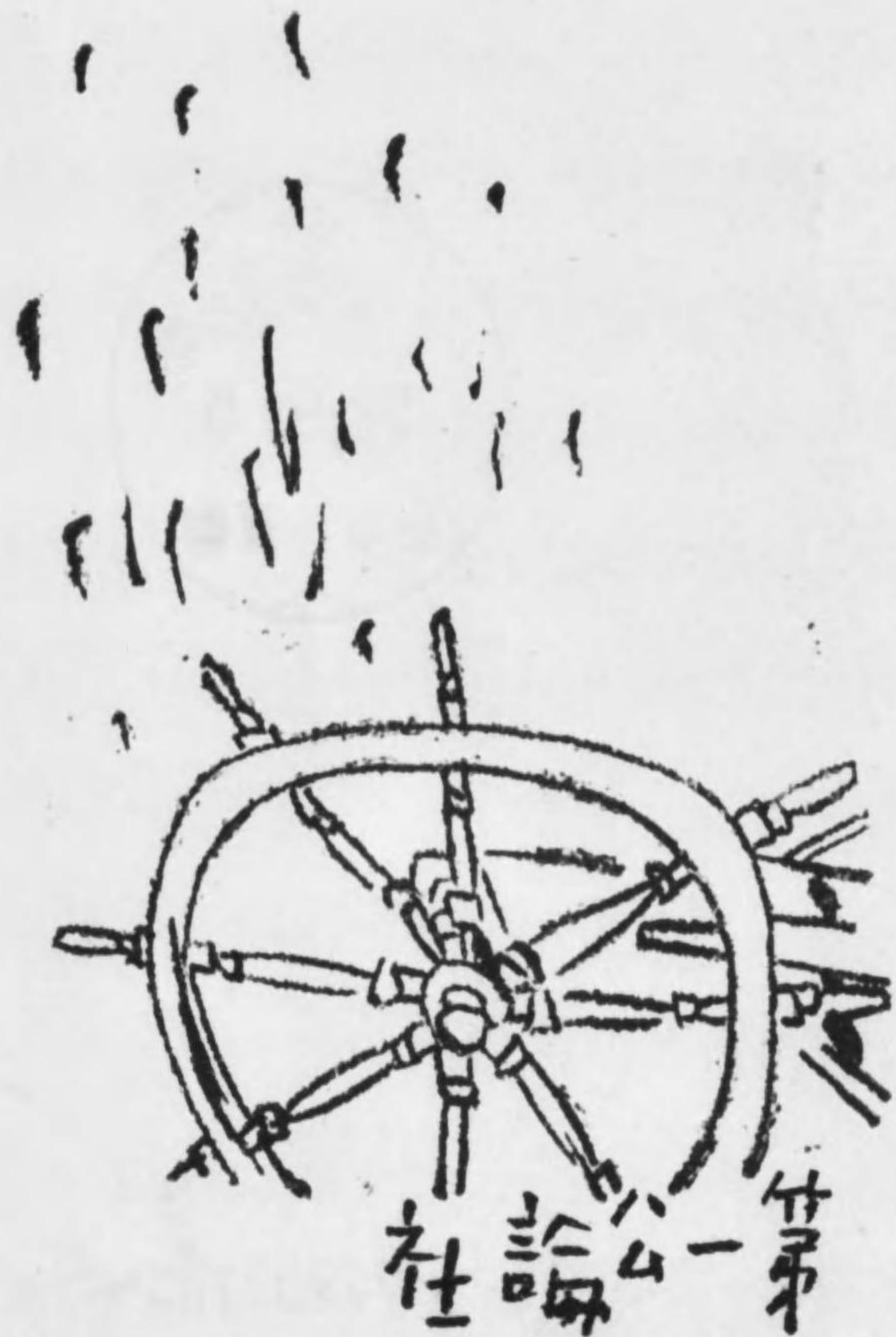
277

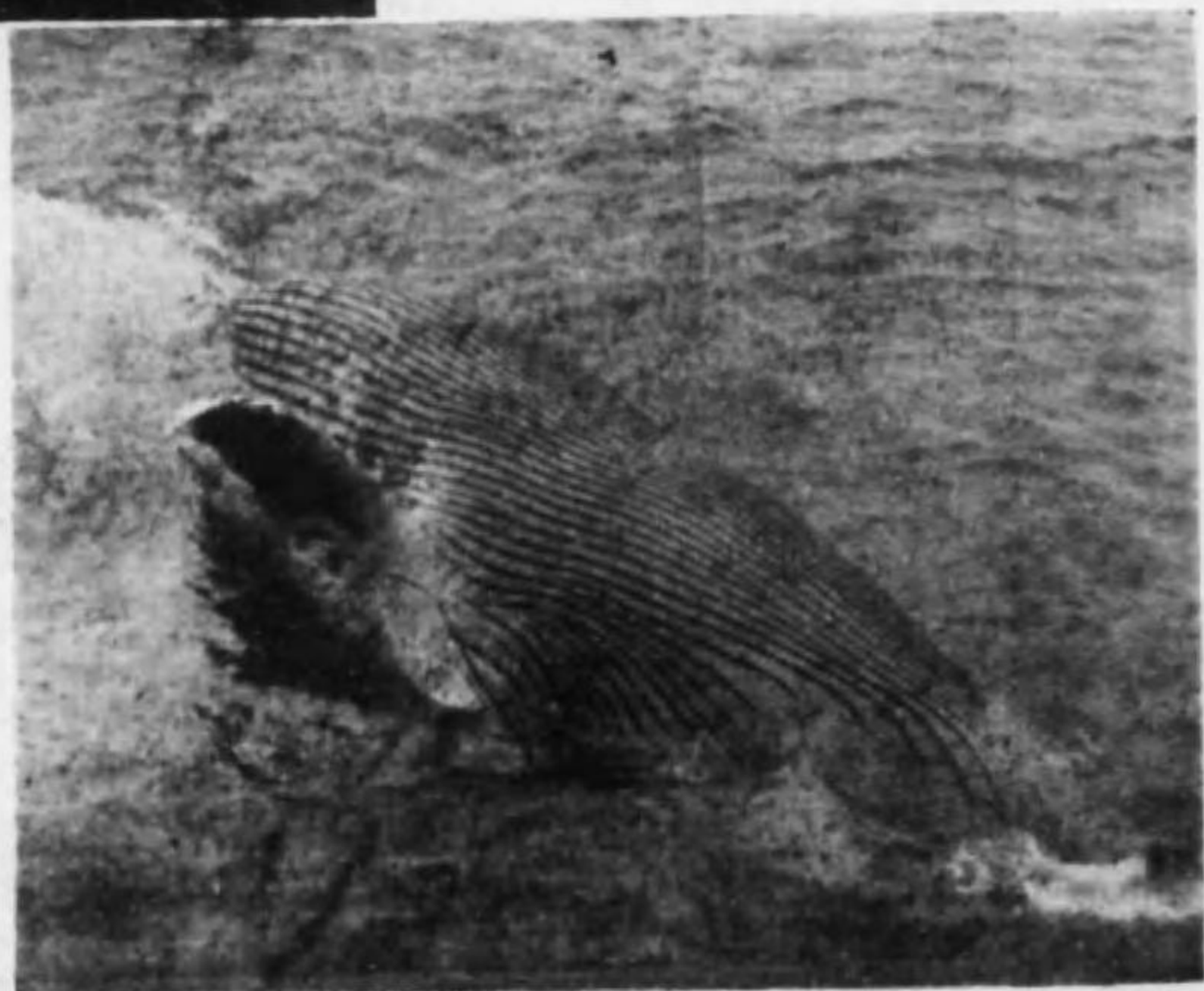


16.8.30 案禁

鯨を遡る

米窪満亮著





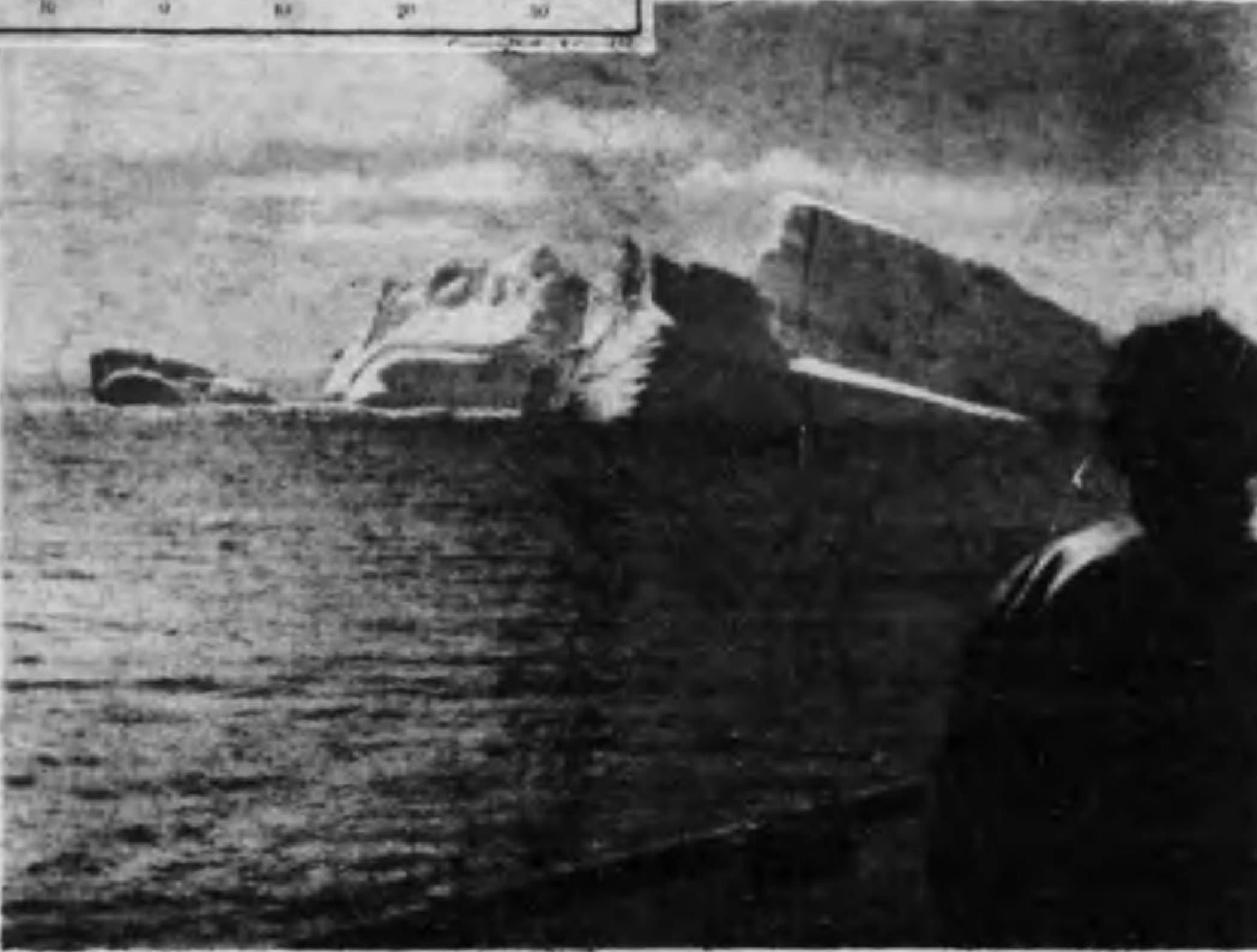
特501
507



77W33785



南極圏圖と捕鯨船上の著者

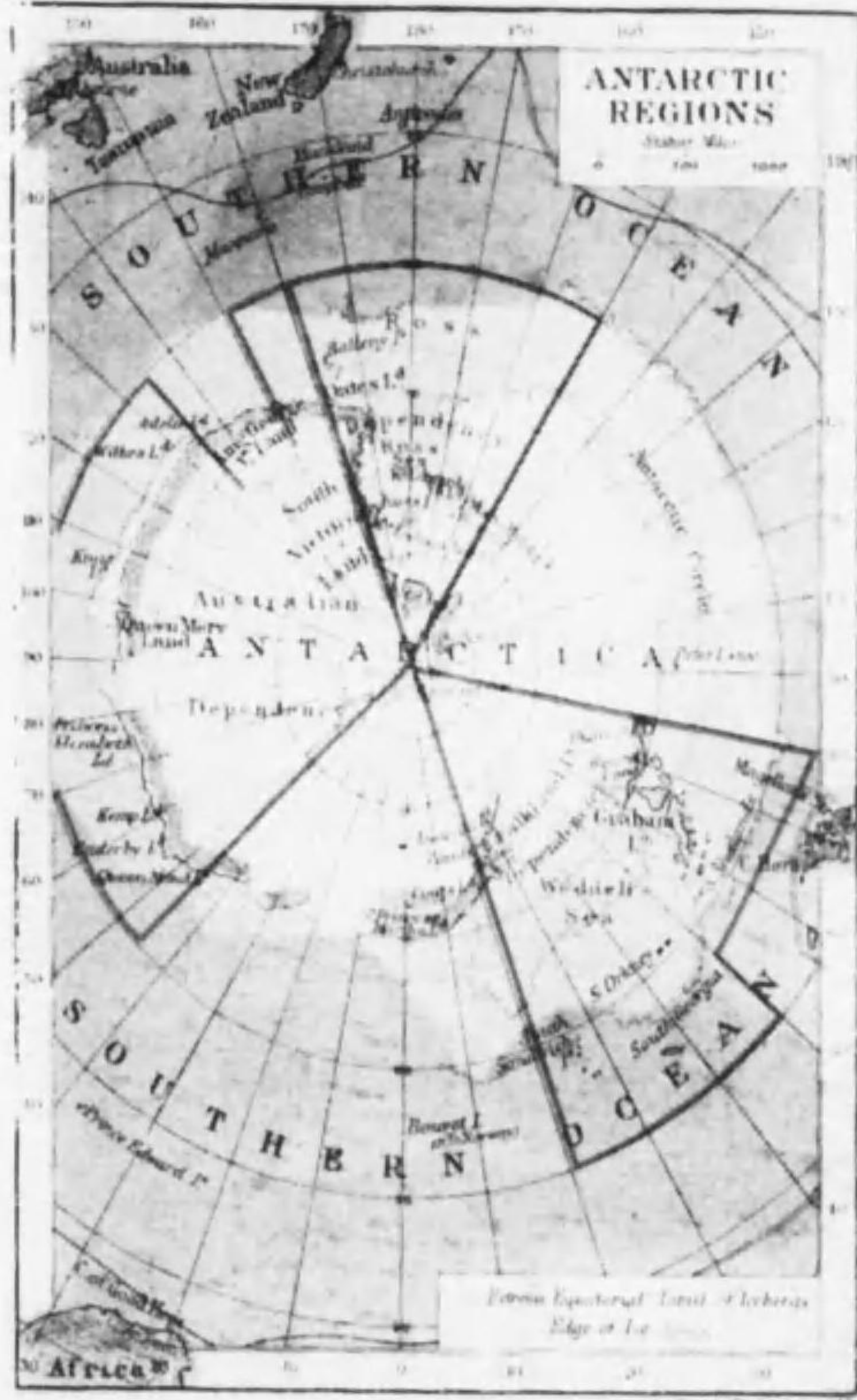


自序

私は信州の山國に生を享けた。それだけ海に對する憧憬は強く且つ深かつたともいへる。高等小學一年のとき隣國新潟縣直江津の濱へ修學旅行に行つて、生れて始めて海を見たときの、心は躍り身體は慄へた異常なる感銘は今も昨日のやうにまざ／＼と記憶に残つて居る。初めて鯨の話聞いたのもその頃の事だと考へて居る。陸では象のやうな長鼻類、海では鯨族が、世界の動物界で一番巨きな存在だと聞かされたとき、何故地球上で鯨だけが——即ち鯨といふ哺乳動物だけが——水の中で生存しなければならぬのか？といふ質問をして小學校の先生を困らした事も、昨日の事のやうに記憶してゐる。



南極圏回遊
捕鯨船上の著者



自序

私は信州の山國に生を享けた。それだけ海に對する憧憬は強く且つ深かつたともいへる。高等小學一年のとき隣國新潟縣直江津の濱へ修學旅行に行つて、生れて始めて海を見たとき、心は躍り身體は慄へた異常なる感銘は今も昨日のやうにまさ／＼と記憶に残つて居る。

初めて鯨の話聞いたのもその頃の事だと考へて居る。陸では象のやうな長鼻類、海では鯨族が、世界の動物界で一番巨きな存在だと聞かされたとき、何故地球上で鯨だけが——即ち鯨といふ哺乳動物だけが——水の中で生存しなければならぬのか？といふ質問をして小學校の先生を困らした事も、昨日の事のやうに記憶してゐる。

このとき先生はたしか、マンモウスといふ前世紀の巨獣の事を引例して、鯨も元は陸上に住んで居つたが、何かの関係で海へ追はれたのだといふやうな説明をしたやうに憶えて居る。

この「何かの関係」は今日でも自分に分らない事の一つである。鯨のやうに大きな、そして鯨のやうに温順しい、そして又鯨のやうに人間の爲めになつて居る獣が、何故哺乳動物のくせに海に追はれて行かなければならないのか？何故マンモウスのやうに、近い將來に於て死絶しなければならぬのか？

この子供らしい疑問は、齡五十を超へた今日に於ても依然として解けない偉大なる謎となつて私の頭の中にこびりついて居る。これは鯨にとつて、あの巨きな圖體を以つてしても背負ひ切れない、悲しい悲劇的宿命でなくてはならない。

私は半世紀に亘つて、憐れなる鯨の動物的宿命に同情し、何故造物主は、この温順しい動物に、こんな怖ろしい宿命を負はせたかの謎を解かうと試みたが、結局それは、何故地球は

出来て、何故人間がその地球の上に繁殖するに到つたか？そして何故何時かはその人間も死滅しなければならぬか？といふ事と共に、未來永久に亘つて解けざる謎だと分つたので、無益な詮議はしない事にした。

詮議はやめたが、現に人間が鯨を捕つて居る以上、否人間と鯨が一つ緒にこの地球上に住むやうになつた、そのそもくゝのときから、人間が鯨の肉を喰ひ、鯨の油を使つて來て居る事は否定する事は出来ない事實である以上、鯨の事を研究することは、人間のことを研究することと同様に、緊急且つ適切な事だと、年久しく考へた事であつた。

しかも毎年澤山の捕鯨船や工船が、捕鯨の新漁場南氷洋に遠征に行くやうになつた茲五六年間、私は是等の船に乗つて行く人たちの代表者となつて、捕鯨會社との間にこの勞務條件に關する協定調印を毎年やつてきた責任者の一人として、是非一度は南氷洋の新漁場に親しく行つて見て、音に聞く氷山と暴風と濃霧といつた、一寸日本近海では味はふ事の出來ない壯嚴雄大なる自然の間に、いかに鯨族はその生を樂んで居るか。いかに捕鯨船は國家の爲め

に、會社の爲めに、そして自分等の爲めに、最も男性的事業といはるゝその大活躍を展開して居るかを實現したいと希望したのであつた。この私の宿願はとう／＼本年實現し、日本水産株式會社の好意により、私は十二月三日神戸を出帆した同社仲積船嚴島丸で、目ざす南氷洋の漁場へ行き、往復一萬二千五百哩、漁場に於ける距離二千六百哩、計約一萬五千哩を航走し、南溟の極海を究める事南緯六十六度に達し、充分に宿年の念願を果して、本年二月二日に神戸に歸帆したのであつた。

本書には嚴島丸による航海記事、鯨族に關する物語り、捕鯨の歴史、捕鯨事業の經濟的考察、捕鯨の國際協定、同事業今後のプロスペクト、東亞共榮圈と南極圈の關係等について、若干の考察と意見を記述したつもりである。

たゞ恨むらくは捕鯨事業が現下我國に於ける唯一の外貨獲得を對象とする點に於て、幾多資源的又軍事的機密を包藏する關係上、捕獲量、漁場位置等を明記するを得ず、折角の南極行も、その内容の重要部分はこのを發表するの自由を持たない事は、著者としても心残りである。

あり、讀者としてもまさに隔靴搔痒の觀があるであらうが、それは時局柄止むを得ない事であるとして諒恕せられたい。

尙この小著が上梓されるに當り、僅か二ヶ月間の視察旅行の自分に種々の學說、經驗談、意見等を提供された、「南氷洋の鯨男」として自他俱に許す大西廉作氏（日本水産捕鯨船隊總指揮）及び嚴島丸船長原種道氏、並びに嚴島丸便乗を快諾された日本水産株式會社重役、植木、窪井兩氏に對して、この機會を利用して心よりの感謝を捧ぐる次第である。

昭和十六年三月

著 者

鯨を追ふて 目次

序……………一

南方航路の新意義……………二

變化に富める航路……………一七

南氷洋の正月……………三五

南溟の寶庫を探る……………四一

鯨の話……………六五

ペンギン鳥の話……………一〇三

ヤング島をみる……………一二三

捕鯨の歴史……………一二五

國際捕鯨條約及び捕鯨取締協定……………一五九

鯨が油となるまで……………二二三

南氷洋捕鯨の將來……………二六三

『鯨男』の横顔……………二八二

鯨
を
追
つ
て

南方航路の新意義

所在ない餘り何思ふともなく、壁間の世界地圖をジーツと見て居ると、おやと思ふ事が一つ心頭に浮んできた。ニュートンが引力を發見したのも、かういつたインスピレーションの所産じゃないかなどと、柄にない事を大袈裟に連想してみる。

各國間を縦横に朱線で結んで居る航路を見ると、大概の航路は東から西へ、西から東へと地球を横に走つて居る。たまには北から南へ行つて居るやつもあるが、赤道を越へて北半球から南半球まで貫いて居るものは、まさに曉天の星の如く少ない。これを東半球から西半球をつなぐやつに比べると斷然少ない。

その理由はいふまでもなく、資源關係からであり、文化關係からである。(東西文化の交錯とか融合とかいふ事はよくいはれるが、南北文化の……なんていふ事はきいた事がない) 従つて旅客も貨物も東西には動くが、南北には餘り動かないといつてよろしい。

いま日本を中心として考へて見ても、歐洲航路、北米航路、南米航路、アフリカ航路、紐育航路、印度航路、エト・セトラ、みな、東へ、或は西へと走つて居る。東から、或は西から、世界を一周して居る航路でさへ三つや四つ位はある。赤道を横切つて南北兩半球を結んで居るものは僅かに濠洲航路だけである。他の海運國、たとへば英國の例をとつて見ても、こういった航路は極めて少ない。せいぜい南米航路、南阿航路、濠洲航路ぐらひのものであらう。況んや南北を貫いて世界を一周する航路などといふものはあり得ない。

そこでこういふ事を考へる。人間といふものは先蹤者の足あとをふんでゆく事は餘り好きでない動物である。誰もまだやつて居ない事をやつてのけやうといふところに、發明があり發見がある。北極及び南極の探險に、後からくと英雄豪傑が雲の如くに出て來て、遂々そ

の極點を究めた心理はまさにこれである。

ソビエツト・ロシアの民族的新英雄が、スターリンに鼓舞激勵されて、白海からベーリング海峡に至る北氷洋航路を拓かふと、茲數年間決死の努力を捧げて居るのも又この心理からである。一九一一年英國のスコット、諾威のアムンゼン兩大佐が南極一番乗りを争つた心理も、また一九一四年シャツクルトン中尉が、兩大佐の南極到達とちがつた趣向から、大西洋側のグラハム・ランドから極地を通過して、太平洋側のロス海に出やうとして、遂にその乗船エンジュランス號を氷山に押し潰され、自分も壯圖半ばにしてサウス・ジョージア島に骨を埋めた悲劇のそもくの動機も、又この心理に出發したのであつた。

一九一二年練習船大成丸で世界を東西に一周した自分は、この次ぎは世界を南北に一周したいものだといふ、夢のやうな野望を心ひそかに懐いて居つた。しかしこれは勿論私の一生のうちに到底成しとげられない困難な欲望である事にはちがいない。ところが今度日本水産株式會社の好意により、同社所屬の最新式の優秀油船船殿島丸に便乗を許されて、南氷洋に

於ける捕鯨事業を視察に行く事が出来たので、廿八年間の僕のこの子供らしい野望も、その半ばを果す事が出来たともいへるのである。残るところは南氷洋を反対側に通過して、サウス・ジョージア島からフォークランド沖に出て、大西洋を北上し、グリーンランドの東側から北氷洋に入り、ベーリング海峡から日本へでも歸つてきたら、これで満點であるが、さうは問屋がなか／＼卸さしてはくれまい。

私が今度南氷洋へ行くのには、實はもつと外にリアリスチックな目的があるのである。それはこのごろ日本人によつて、合言葉のやうにいはれて居る東亞の新秩序建設と、東亞共榮圈の確立といふ、雄大なる大和民族の大理想と密接なる關係があるのである。

日本は海國である。海によつて國を撃め、海によつて生き、海によつて發展してきた國柄である。東亞に新秩序を建設し、東亞共榮圈を確立せんとする爲めには、何よりもまづ東亞の海上權と漁業權を日本が一手で掌握しなければならぬ。この際この「東亞」の意味は、支那海より、スル海、ボルネオ海等セレベス海、等を越へて、西太平洋と南太平洋とを包含

し濠洲の南、南氷洋の海面にまで及ぶ一帯の地域であるといふのが、僕の持論である。

しかるにいま私の便乗しつゝある巖島丸は是等の海を横切り、現下問題となつて居る蘭印の一島ボルネオのパリキババンに寄港して、目下日蘭交渉の對象案件となつて居る原油を積載し、既に南氷洋に到達して、日夜を分たず、現時我國に於ける唯一の外貨獲得の資源たる鯨群を追ひつゝある捕鯨工船及び捕鯨船と出會すべく、六千二百浬の波濤を蹴つて南下するのである。東亞南方共榮圈の開拓に留意るもの、何條この好機を逸し去るべきやは……である。

變化に富める航路

この航路は人文的、地誌的、氣象的等いろいろの觀點から、誠に變化極まりなき航路である。強いて他に類例を求むるなら、僅かに「ジェイソンの遠征」として希臘神話に出てくる巨船アーゴアの航路に比すべきであらう。「ジェイソンの遠征」は、ホーマーの麗筆になると傳へられるものであるが、船長ジェイソン麾下のアーゴノートは、イオルカス——現在のアルバニア——を出帆し、ボスフホルス及びダーネルスの兩海峡を通過し、遠征の目的地コルキス——現在のコーカサス——に到り、金毛の羊を奪ひ返した後、クリミア半島よりアゾフ海に入り、ドン河を遡り、河水が浅くなつたので、全乗組員でこれを擔ぎ上げて——

レポートみたやうに——（この邊が傳説の傳説たる所以）バルチック海に注ぐ河に移しかへて、バルチック海から北海に入り、ビスケー湾から、當時「ハーキユールスの石柱」といはれたいまのジナラルターを通り、地中海に入り、橄欖の木茂るサルジニア島や、芳花咲き香ふアンソン島をすぎ、その間にはサイリーンズ島で三人の妖姫に誘惑されたり、種々の冒険と危難を経て、故國に歸つたといふ筋である。

いま僕の便乗して居る鷲島丸の航路、所謂南方航路も、考へやうによつては、アーゴアの航路と比して優るとも劣らない變化と、バラエチーと、怪異とを持つて居る。勿論ボスフォラス海峡に於て、通航する船といふ船の全部を夾み潰すやうに廻轉する二つの石柱とか、サイリーンズ島の魔女などといったやうな怪談めいた冒険は期待出来ないが、三池を出帆してから、海から見た琉球群島の風物、東北の季候風、サン・ベルナルデイオ海峡の絶景、映畫に出て来るフランケンシュタインが、たて籠つて居る魔城その儘のかつこうをした奇峰怪岩が、そそりたつ比律賓群島のセブやネグロス等の荒涼たる島々の景色、熱帯特有の龍卷や陣風、

油を流したやうなセレベス海の無風帯、ロンボック海峡の兩岸に火を噴くロンボック、バリ兩島の活火山、僅かに椰子の樹だけが群生して居る珊瑚礁が、點々と連なるアラフラ海、ゴビの砂漠を一氣に駆けぬぐる韃靼の鐵騎のごとく、颯々と風速五十海里の強い西風が、疲るゝ事知らぬやうに年がら年中吹いて居る一咆哮緯度、時には海豹やペンギン鳥がその頂上に住んで居る氷山や氷塊が、つき／＼に流れてくる合間／＼には、長鬚、白長鬚、抹香等の鯨が悠々と潮を吹いて遊んで居る南氷洋の海と數へたてれば、外にちよつと是に比べる事の出来る面白い航路はないやうである。

昭和十五年十一月二十七日外務省アメリカ局は、三十七萬三千八百七十號といふ外國旅券を發行した。

これだけだつたら別に茲に特筆する程のことからでもないが、その第一頁を開けてみると

米 窪 滿 亮

右者帝國臣民ニシテ視察ノタメ南水洋へ（蘭領東印度經由）

赴クニ付通路故障ナク旅行セシメ且必要ナル保護ヲ其筋ノ諸官ニ要請ス

大日本帝國外務大臣 從三位勳一等 松岡 洋 右

と書いてある。

これまた所謂紋切型で、敢て異とするに足らない。たゞ問題とする點は、その渡航終點を「南水洋」とした外國旅券を發行するといふことが、さうざらにある事ではないといふ事である。

明治四十三年十一月廿八日品川沖を解纜した、白瀬中尉以下開南丸乗組の南極探險隊員はこういつた旅券の下附を申請するといつた手續をとつたかどうか、この邊の事は不案内であるが、何れにせよ珍らしい事であらふ。實際この私の旅券下附の申請を受けつけた兵庫縣の旅券係の役人は、こういふ旅券は兵庫縣始まつてまだない事ですといつて居つた。

それじや何だつてこんな妙な旅券まで申請をして、正月を見越して南水洋くんだりまで、視察なんかに行くのだ？と友だちは誰でも不思議がる、ところもあらうに、氷點下何度といふ地球の果、南溟の極地——峨々たる氷山の外、海豹、ペンギン鳥、鯨位の外には動物さへも居らない——に出かけるとは、誠に御苦勞千萬、まさに年よりの冷水だと笑ふものさへある。

しかし僕にはこれは笑ひごとではない。この旅行は一生一代の大壯途である……といふと、きつと、なあーんだ、まるで南極探險の、白瀬中尉、スコット大佐、さてはバード少將みたやうないゝぐさではないかと、友だちはまた笑ふだらう。笑ふやつには笑はしてをく……が俺には考があると、茲で少し我が輩の抱負……つてやつをいはさして貰ふ。

このごろ我が國では「東亞新秩序の建設」「東亞共榮圈の確立」といふ事が、合言葉のやうにいはれて居る。猫も杓子も口を開けば、東亞新秩序の建設を叫び、東亞共榮圈の確立を謳ふ。だから、ゼークト將軍ではないが、「標語の魔術」に陥るといふやうなレアクションすら

懸念されて居る。

しかしそれじやどうして東亞の新秩序を建設するんだ？どうして東亞共榮圈の確保を期するんだ？ときかれたとき、すぐそれはこうするんだと答へられる人は何人あるだらうか？！それじやお前はどうか？と反問する人があるだらう。僕は實はさういふ反問を待つて居るのである。

日本は海國である。日本は海によつて發展し、海によつて國防の完きを得てきた事は、日本歴史を一瞥するとき、誰でもすぐ氣のつく事である。日本はこの點大にその地理的條件に恵まれて居つたのであるが、今日の國際情勢乃至は東亞の相關々係は、日本が東亞の海上權を掌握する事によつて、問題の新秩序は建設され、問題の共榮圈は確保される事を示唆して居る。

これもこの頃人口に膾炙されて居る高度國防國家の建設といふ國家的大理想も、林子平の所謂「海防」を基底とせるものでなくてはならぬといふのが、僕の持論である。

以上述べた海上權の絶對把握といふ、「海防」の徹底的充實といふ大理想を實現する方策はどうすればよいかといふに、それは海軍の擴充と、海運の強化と、水産の發展といふ三要素が互ひに相連絡し相協力して、各々その最大限度の發達を完成する事ではなくてはならないこれを換言すれば、海軍を樞軸として、これを輔翼するものに、商船隊と漁船隊の活躍ある事を要するのである。

商船隊の新體制的活躍としては、既に事業的方面に於て中央輸送統制組合の結成あり、海運協會の改組がある。又人事的方面に於ては、最近所謂軍官民一體の組織下に生れて來た海運報國團がある。

然るに是等の新經營體制と、新人事組織を賦與された商船隊と、その中央に海軍を挟んで最も緊密なる有機的提携をなすべき漁船隊に就ては、一般國民は大なる關心と、深き智識をもつて居らないのである。否このことは單に漁船隊してのみいゝうる事ではなく、海事一般について、海國日本に對する無關心と無知識は誠に驚くべきものがある。そして更に驚くべき

事は、この無關心と無知識は、單に一般國民だけでなく、爲政者有識者の間に於て尙且つそれが指摘されるのである。

僕がいささかながら海事思想の普及に今日その微力を盡しつゝある所以は實にこれが爲めであり、今回日本水産株式會社の好意によりその所屬の油船船嚴島丸に便乗して、南氷洋に於ける捕鯨事業視察に赴く事とした所以も、又茲にあるのである。是で大體こんど僕が何故南氷洋に行くかといふ譯が分つたことと思ふ。

四年振りで日本の船に乗つて見て自分は全く驚いた。設備の點に於て客船は贅澤なもの、これに反して貨物船は、運貨といふことの爲めには、乗組員の保健衛生は勿論のこと、航海に關する船内設備に就てすら、或る程度迄犠牲を偲ばせる……といふよりは、むしろ第二義的考慮を拂ふものであるといふ、從來の概念は全く古くさい昔の考へかたであつて、今日では上述せる各點に就ては、客船の方が（勿論最近竣工した優秀船などは論外であるが……）遅れて居つて、新造の貨物船の方がはるかに優れて居るといふ事實を發見したからである。

この一點だけでも本船に便乗した價値は充分にあるといふものである。國民に對して海事思想の普及を説かんとする僕自身が既に斯くの如き次第であるから、關係者以外の一般國民が海のこと、船の事をてんからお存しないのはいか計りかとおつくづく感に堪ふると同時に、この事業の如何に重大であり、如何に困難なるものであるかを、今更ながら痛感させられた次第である。

といふ譯は、この嚴島丸に乗つて見て、僕は船の各部に最新の船舶科學が適用されて居るのを發見して、驚異と感嘆を久しくするのみであつたが……飽極め、そんなことあたふきだ、總噸數一萬噸、速力十七節、船齡僅か三年の、日本水産の御自慢の祕藏優秀タンカーじやないかと唖呵を切られればそれまでであるが……僕が一番吃驚したのは、スベリー式ジャイロ・コンパスのからくりで舵が自動的にとれるといふ事と、普通船員の居室に至るまで、暖房設備は勿論のこと、電氣扇までちやんとついで居るといふ事であつた。

重油及鯨油を運ぶ油船としての最新式設備、假令ば自動的に船艙内の油量を示すフロ

チング・ゲイジだとか、槽内の油より發生する瓦斯に引火する危険を防ぐ爲めのフリーユ・ガス・システムなどは、僕にははせるなら、油船船としてはむしろ當然の事であつて驚くに足らない。

しかし前述せる航海運用に關する最新式設備と、船員の保健衛生に留意せる船内施設とは、從來我國船舶の代表と一般に目せられて居つた歐洲航路船にも餘り多く見ない點であつて、今日の船員を昔のマドロスに比するとき、科學の天恵に浴して居る事誠に羨ましい位であるといはなくてはならない。

本船の如きは神戸を出て三池に向ふときも、又三池を出てバリックババンに向ふときも、港口を出るとすぐジャイロによる自動操舵に切りかへるので、舵手は何か外の用事をして居つて、舵輪にはついて居らないのである。舵そのものは靈あるものの如く、獨りで右に廻り左に轉じ、船首を與へられたる針路の上にはちやんと乗せてゆく。針路の左右へ最大一度以上逸脱する事はない。餘程頭のよい、長い經驗をもつ熟練舵手でもこうは旨くゆかないと思ふ。

時代遅れの僕がこれを見て感に堪へて居ると、原船長がいろ／＼の面白い事を話してくれだ。其の内にこういふ事があつた。

ジャイロによる操舵が行はれるやうになつてから、今迄にない不思議な衝突がちよい／＼……といつたつてそんなに屢々はないが……ある。それは太平洋の真中でジャイロ操舵の二つの優秀船が衝突したといふ事である。一寸聞くと面妖であるが、それにはそれに相當する譯がある……といふのは、東から行くものも、西から来るものも、太平洋を渡る船は大體に於て、日米間の最短距離である。大圈航路グレートサークルをとる。従つて潮流や風などによつて影響さる事がなければ、針路が正確である限り、二つの船はこの大圈航路上のどこかで出會ふべきである。從來は人間がお互ひに舵をとつて居るから、さう物指で計つたやうに針路の上へ載つて來ない。ところがジャイロは人間よりも正直であり、人間よりも精巧であるから、茫漠たる大洋の或る特定の一處に於て、どうしてもぶつつかるやうに船を進めてくる。従つて當直の士官がぼんやりして居れば、速力はあるし、アツといふ間にガチャンと來るといふ譯であ

る。すばらな、或は不精巧なる人間では衝突しないのだが、懈怠も知らなければ、不注意もない、又妥協など考へた事もないといった機械では却つて一大事を惹起する。これは文明や科學の中毒であり、笑ふ事の出来ない皮肉である。

さてこの最新科學を應用した優秀油船船である本船は、三池を出帆した後、右舷船首に沖繩列島を望みつゝ、南に航過したのを最後として、日本領海を出で、東北の季候風に駕して只管に南下し、サン・ペルナルディオ海峡によつて比律賓群島を南北に突つ切り、奇峰怪岩のそそりたつセブ島や、今でも相當の数の蠻人が棲んで居るといふネグロス島や、熱帯特有の七彩目も綾なる虹を生み出す陣風等に迎へられたり、送られたりして、十二月十二日午前九時十五分赤道を横斷した。

南氷洋行きの本船にとつて唯一の寄港地である蘭領ボルネオの東岸バリキババン港に就いたのは十二月十三日であるが、蘭印政府が同港の内外に對する警備は實にもものしき限りで、前夜から港外遙かの地點に假泊せしめられた本船に對し、スループが一隻出てきて水路

を嚮導するといつて騒ぐやら（嘘か本當か知らぬが機械水雷が一面に沈設してあるといふのである）注油棧橋に繋留中は、高級船員の一部を除いては全部上陸を禁止したり（棧橋の入口には武装嚴めしい土民兵が數名屯してゐるなど、今にも占領軍（即ち日本軍）が蘭印にやつてくるではないかといふ強迫觀念に脅やかされて居るやうである）。

この戦々競々ぶりは最近頓みに甚しくなつたとかで、丁度小林使節が會議場ばで日本に引き揚げた頃と期を同じうするとの事である。甚だ迷惑至極の次第であつて、折角松岡外務大臣が「通路故障なく旅行せしめ、且つ必要なる保護扶助を與へられん事を其筋の諸官に要請す」と、僕の旅券に書きこんでくれたが、とう／＼僕も船員同様上陸禁止となつて了つた。尤もバリキババンの役人にいはせれば、渡航目的地南氷洋への「通路は故障なく旅行せしめ」ること又は「必要なる保護扶助を與へる」ことと、バリキババンに上陸させる事とは、全然別なことだと空嘯くかも知れない。

大谷光瑞師著はすところの「蘭領東印度地誌」によると、昨年度に於ける蘭領東印度諸島

産出の原油總額は、七百三十九萬八千桶に達し、(本年度は多分八百萬桶に達するだらうとのこと) 其内二割三分はボルネオ産であるから、百七十萬桶は、タラカン島及びバリキババンを輸出港とする油井地サンガサンガより産出さるゝ事となるのである。

百七十萬桶のうち幾何がバリキババンから輸出さるるのか、精確な事は勿論分らないが、背後の丘陵地から港埠地に亘つて築設されて居る夥だしいタンクの數(約五十に達すべし) 積み出し用の棧橋の數(一萬噸級の巨船を繫留し、一時間約五百桶の割合にて給油しうるもの約八個あり) 等より推測して年額約百萬桶に達する事は疑を挾さむ餘地はないであらう。

バリキババンは上述の如く、約二十哩計りの奥地にあるサンガサンガ油井地から鐵管にて運び出される油の輸出港であるが、港内水深く、港域また廣大にして眞に天然の良港である。

本船は十三日午後四時ごろより翌日正午までの間に、南氷洋に於て○隻の捕鯨工船、○十隻の捕鯨船に補給すべき汽罐用○○○○○噸の原油、並びに自船のディゼルエンジン用燃料重○油○○○噸を満載し、十四日午後三時バリキババンを出帆したのであつた。

バリキババンを出帆した本船は、晝は船先にたつて本船と競走する海の飄飄者の飛魚や海豚を伴信とし、夜は我等を南溟のはてに招きよするかの如く、紺色の蒼穹に輝く南十字星や戦士星を眺めつゝ、やがて音に聞くロンボックの海峡にましかつた。

ロンボック海峡の有名な譯は、その深い海流とか、海峡の兩岸に聳ゆるロンボック、パル兩島の火を噴く高嶺等にも原因するが、更に大なる要因は例のウォーレス線(亞細亞系と澳洲系の動植物分佈界線)がこの海峡を通過して居るのである。ウォーレス線の發見者ウォーレス博士は、彼のダーウキンと共に、世界の二大博物學者で、一八五四年にマレー群島に渡航し、前後八年に亘つて七十五に餘る土人の研究から、人種學上の關係を推理し、猩々や極樂島の習性から、兩大陸の動物分類を爲した結果、遂に一八五八年彼の有名なる「東洋型より永久に分類さるべき種類の傾向に就て」を上梓したのであつた。

ロンボック海峡を通過した後は、本船は捕鯨工船の活躍しつゝある漁場に向つて一路急ぎに急ぎ、走りに走る。「咆哮緯度」に於て吹きつゝある強西風の餘波と覺しき長溝に

ユラリガラリと、その一萬噸の巨軀を右に左に鞅鞅ゴロゴロの如くローリングしつゝ……
 「咆哮緯度」とは、強勁なる偏西風が南緯四十度緯と五十度緯との間を七壁セツの砂漠を十氣は
 軀け抜くる鞅鞅の鐵騎の如く、夜といはず、晝といはず、白い波頭をたてゝ咆哮し連吹す
 る恒久風帯である。

南氷洋乃至南極圏に進入するものに下さるゝ最初の洗禮であり試練であるのである。この
 強い西風が、長濤と濃霧とを伴なつてくるときは相當厄介であり、捕鯨船隊、殊に二三百噸
 せいゝの小捕鯨船を惱ます惡戯いたづらものはこやつである。しかしこの風帯を南に通り返ると
 海洋は大體に平穩であつて、所謂捕鯨條件なるものを具有してくるのである。

本船も暮の某日目ざす漁場に到着し、積んできた原油を各船に配給し、既に捕獲し、解剖
 し、製油した後、各工船の船艙内に貯藏して居つた鯨油を移しとる爲めの操作を開始したの
 であるが、この作業こそ本船にとつて唯一の使命であると同時に、七分三分のかね合ひとも
 いふべき、極めて困難なる難事業である。

平穩とはいつても大洋の眞中である。常に相當の長濤ながうしはあり、風も吹き、潮も流れる。其
 の間に於て一萬噸の本船を一萬八千噸の工船に横附けにするといふのである。陸には多數の
 綱とり人夫などが待ちかまへて居り、船側には曳き船の二三隻も居る突堤や棧橋に横附けに
 する作業などとは同日の談ではない。

しかしむづかしからうが、困難だらうが、これはどうしてもやり遂げなくてはならない。
 白長鬚其他の鯨を二疋乃至三疋緩衝材代りに使用しつゝ、決死の作業を南溟の海上に遂行す
 る船長以下船員の勞苦には自ら頭の下る敬意を感ずるのである。

南氷洋の正月

南氷洋の正月

本船が漁場につくと、各工船各捕鯨船からまつさきに受けとりにくるものは、日本からの手紙のは入った行囊である。日本を出て三ヶ月、なつかしい妻子からの手紙を受けとつた船員、漁夫、雑夫、事務員たちの眼は血走つて居る。彼等は部屋に歸つてよむ時間をも惜しむやうに甲板の片隅で封を切るのもどかしさうに貪り讀んで居る。うれしい便りににや／＼笑つて居るもの、悲しい便りに薄ら涙を目に溜めて居るもの……南極圏の漁場ならでは一寸見られぬ圖である。長い航海と、長い漁場生活で少なからず氣の荒くなつてきた従業員たちも手紙を通じて、祖國の香を嗅ぎ、日本の空氣を吸ひ、日本人特有の愛國的ノスタルジアの感

傷に彩られた望郷の思ひを、氷山水塊の漂ふ南氷洋の海から、赤道を越へ、東亞南方共榮國を越へて、六千二百哩の雲煙波濤の彼方に馳するのであつた。

やがて暮の廿八日となれば、各船ごとに餅搗きが始まる。今年是新體制下の緊縮節約が利いたのか、今迄のやうな大袈裟な餅搗きが行はれなかつたが、それでも十俵近い餅米が用意された。前夜のうちに綺麗に洗はれた餅米は、どん／＼ライスポイラーでふかされ、それが中甲板中央部廣場に据へられた臼のところへ運ばれる。

搗き方として船員より何人、漁夫から何人と、各部から選ばれた者や、自分から志願したものが大部集まつて來て居る。みな何となく心うれしげにこ／＼して居る。矢張り正月が近づくと、みな失ないかけた童心を取り戻して、子供時代の記憶に甦へるやうである。

賄部員がポツポと湯氣のたつ餅米を臼へ投りこんでゆく。それつと、ロープで鍛へ、鋸で赤黒くなつた太い二本の手が杵を搦んで、エイ／＼と激しい懸け聲をしながら、空を切つて上下に動く。

「ハハツまるで下手な撃劍使ひといふかたちだね」

と冷やかされるものがあるかと思ふと、

「遠藤、貴様の手附はなか／＼旨いぞ、その水をつけた手で、チョイ／＼と餅の顔を撫でるところは……」

と褒められて居るこゝれもある。

「そりや、その筈さ、遠藤は三年も餅菓子屋に奉公して居つただもの……」

「さうか、そりやエキスバートだな」

と船長まで飛び出してくるといふさはぎで、船内の空氣は一度に平和的な、陽氣なものとなる。

半固形體の餅を介して、軟かく杵が臼に當る音は、船に、海に、雲に、そして五六哩向ふに小さくその頭を青い水平線の上に出して、燦々と輝く南極國の太陽をキラ／＼と銀白色に撥ね返して居る氷山に反響して、天下泰平、南方共榮國確立と、伸びゆく日本の、進みゆく日

本の洋々たる將來を暗示するやうに聞へる。頗る御目出たい。無暗に快活になり、何となく勇ましい氣持になる。歴史的に意義ある二千六百年は二三日のうちにすぎ行く。しかしもつと意義あり、更に大に爲すべき二千六百年を、二三日後に迎へんとする我等の脈絡には勃然として清新なるバイタル・フホース、新時代に目覺め、新體制に備へんとするバイタル・フホースが、強く赤く駆けめぐるのを意識するのではないか？

新しき理念と、力強き新組織が、燃ゆるが如き希望を孕みつゝも、前途ます／＼多事なる事を暗示するが如き、紀元二千六百年の元旦は、新しき國家意識に甦りたる祖國若き日本に來るであらう。平素に於ては世界に比肩するものなき勤勉なる日本國民と雖も、こゝ正月の三日間は屠蘇機嫌にしばしの休息を爲すであらう。

しかし東經〇〇〇度〇〇分南緯〇〇度〇〇分、南極に近き溟海に鯨を追ひつゝある我等、否東亞南方共榮國確立の第一線に奮闘しつゝある漁船隊の我等、東亞新秩序建設の爲めの基礎工作たる東亞海上權の掌握のために活躍しつゝある商船隊の我等には、大晦日もなければ

元日もない。元日と雖も太陽は輝く、奮闘せよ、活躍せよと……否茲南極國の太陽自身が忙しい。祖國日本の正月の太陽のやうな、暢氣にして懶惰な太陽ではない。大晦日の夜の十一時に水平線に没した太陽は、元日の午前一時半にはもうパツチリと爛々たる大きな眼をあけて、青い海の上に出て來るのである。鯨は走る、西に東に。屠蘇に酔ひ、餅腹でゲツブをついて居る閑はない。

午前八時までに一仕事をした我等は、八時に全員後甲板に集まつて、希望に満てる紀元二千六百年に於ける最初の國旗掲揚式をすました後、午前九時船長、事業主任以下上甲板中央に整列してはるか北の方祖國日本に向ひ、皇居の遙拜、國歌の合唱、皇軍將兵に對する感謝及び戦歿勇士に對する默禱を終りたる後、船長及事業主任の祝賀の挨拶、相互の祝辭交換ありたる後、叡山の僧兵達がもつて歩いたといふ長柄ながえに似た解剖刀を携へて整列した解剖夫の仕事始め式があつて、工船の元旦は再び戦場の如き活動圖繪を展開する。祝賀式に参加した各捕鯨船はいざやと計り、直ちに煙筒から濛々たる黒煙を揚げて、目ざす漁場に突進して

ゆく。嚙壯たるかな、嚙多忙にして活氣横溢せる元旦なるかな!!

南氷洋の寶庫を探る

南極探險には失敗したが、南氷洋の捕鯨事業に不朽の名を残した、これを換言すれば、「花より團子」、名譽は得られなかつたが利益を得た諸威の船長シー・エー・ラーセンが、母船式捕鯨といふ獨創的考案を南氷洋の漁場に實施したのが一九〇四年であるから、今日世界的大資源の一といはれて居る該事業も約四十年の歴史を數へて居る。

今年第二次世界大戦の影響で、世界の二大捕鯨國である諸威、英國は勿論、獨逸も、米國も、巴奈馬も、アルゼンチンも捕鯨船隊を派遣して居らないやうであり、従つて南氷洋は我が日本の六船隊（日本水産三船隊、大洋捕鯨二船隊、極洋捕鯨一船隊）の獨占の觀がある

が、昨年までは英國、諾威ともそれぞれ、總噸數二萬噸に達するものを筆頭として十三隻乃至十四隻の母船（その總噸數五ひに十六萬噸位い）八十隻乃至百隻の捕鯨船を南氷洋へ送つて居る（以上何れも一九三七年度統計を基準とす）

日本と並んで新興の意氣に燃ゆる獨逸も又二萬一千八百噸に達する優秀船ユニタス號を始め五隻の捕鯨工船、並びに三十一隻のキャッチャーを送つて居る。

然らば世界各國が毎年莫大の出費をなし、夥たしい工船と捕鯨船を南氷洋に送つて、命がけの荒仕事の結果、毎年うるところの三萬三千頭の鯨、それより採取する鯨油二百七十萬バレル（何れも一九三七年の統計を基準とす其以後は未發表であるが、捕獲鯨數は年々五萬頭を下らない）は何の用途に用ひらるるかといふと、牛酪の代用品たるマーガリン・バター（その成分鯨油四割、豆油等の植物性食用油四割、牛乳二割）の製造を主とし、其の外食用（肉）皮革、織物、セラチン、潤滑油、強精劑其他の薬用品、飼料、肥料等の材料に用いらるるのであつて、その利用範圍、その文化的價值、その生産數量等から論じて、眞に最近發

見されたる大新資源たるの名に相應しいといはなくてはならない。

いま假りに鯨油のみについて論ずるも、最近のロンドン油肪市價は今次の大戦の影響をうけて、相場は勿論成りたゝないので、世界的鯨油價はこれを知るに由ないが、日本船隊が採取したるものを硬化油として某方面に賣却しつゝある價格は（これ又極秘であるが）推定噸當り八百圓を下らない事はたしかである。

日本船隊の採油總噸數もこれもまた國策的秘術事項であるが、約十萬噸といふ算定は過大でないであらう。これを假りに全部硬化油として賣却し得たりとして（即ち翌年まで手持ちになるストックなしとして）總額八千萬圓の外貨を收得しうるのである。捕鯨事業が我國にとつて國策的新産業であり、國富を増す重大産業であることはこれを以ても分るのである。

いまこれを當該經營者の立場より見るとき、總噸數一萬九千噸の母船（第一、第三圖南丸型）を南氷洋に派遣し（所要月數、往復の航海期間を含めて七ヶ月半として）二萬噸の鯨油ぬらるとせば、その賣價五百八十萬圓（現時の國際時局に於ては困難であるが、假りに液體

のま、ロンドンで賣るものとして、過去數十年に亘るロンドン鯨油市場の平均取引價格十六磅を標準として計算す。乃至千六百萬圓、硬化油として或る筋に賣却せる昨年度本邦鯨油相場を基準とす)は當然捕鯨會社の収入となる。

この収入に對し、ランニング・エクスペントはどの位いかと計算すると、母船及び捕鯨船(八隻として)用燃料油代金約百二十萬圓、船隊乗組員及従業員の給料、食料、手當、歩合金等合計約八十四萬圓、消耗品代金概算五十萬圓、船體及積荷保険料約七十萬圓、店費二十萬圓、雜費三十萬圓、合計三百七十四萬圓となり、差引前者の場合に於て約二百萬圓、後者の場合に於ては實に千二百二十六萬圓の利益を見る事となるのである。(尤も後者の場合はこの外に推定約百萬圓の硬化油處理費賣主分擔額を控除しなければならぬが)

若しこの利益金より、半年分の法定積立金、船價償却金(十年間として)船舶建造資金の金(利年六朱として)等の合計概算、二百萬圓を控除するときは、前者の場合は、出す入らずといふ事になるのであるが、後者の場合は優に千萬圓以上の純利益を擧げうるのである。

以上は極めて大雑把、且つ著者の主觀的推定に基づく勘定であるが、これは大體に於て捕鯨事業の經濟的目安を示したものであり、何れにせよ「一攫千金」「濡れ手に粟」とはいへなくとも、他の産業に比し極めて歩のよい、採算のとり易き事業である事は勿論である。

しからばこの大利益をうる方法は、採算と同様極めて平易に、且つ順調に、樂に行くかといふに、どつこい、さうは問屋で卸さないのである。否それどころが、正に虎穴に入らずんば虎兎を得ずていの危険と困難と不自由とを耐へ忍ばねばならないのである。従つてこの事業に従事するものは、最近の流行語である「敢闘」的精神の所有者でなくてはならないといふ事になるのである。

毎年十一月終りから翌年三月の初めにかけて、南水洋には、所々に半鹹水と稱するものが出来る。これは氷堤または浮氷原乃至は氷塊の附近に出来るもので鯨の集來を馴致する特種の條件をもつて居る海水である。その特種の條件とは鯨の好餌である小蝦の、そのまた好餌である動物性浮游生物の發生に最適である温度と、濃度と、鹹度を指すのである。

常闇の天地を貫いて、絶へ間なく降り降り、積りにつもつた雪は、たゞ皚々と、たゞ重疊と只管に雪嶺を高め、雪原を深めてゆく。しかし漸く九月となり、十月ともなれば、いままですつかり愛憎をつかして居つた太陽も、いや／＼ながらもお義理らしく顔を見せてくれる。初めのうちは不機嫌らしく、仕方がないやといはん計りに顔を出して居つた太陽も、だん／＼とその顔を綻ばして、微笑さへ送つてくるやうになる。半年の間消へてなくなつた太陽に對する面當のやうに、やけにふりつもり、頑固に凍てついた山や谷や原の氷や雪も、笑いかける太陽の態度に口説き落されて、しまいには遂にうち融けざるを得ない。

融けて軟かくなつた雪や氷は、徐々に、しかし偉大なるモメンタムを以て、ベアドモア氷河とかハイベルグ氷河とかいふ各所の氷河に迂り落ちる。この氷河及びこの氷河に落ちた雪や氷は、更に加重された運動量を以て下へ／＼、海へ／＼と迂り落ちる。そして或るものは轟然たる大音響と、天に冲する大飛沫を上げて、海に落ち、海に浮んで、大氷塊や大氷塊となるものもあれば、又或る者は有無をいはず、その儘する／＼と海上遠く沖合へ押し出し

て、半島や岬角のやうになるものもある。誠に千差萬別である。この後者のやつを氷礁とか氷舌とかいふ。東經九十度あたりにシヤツクルトン・タングと稱するやつがある。全長百五十哩乃至百八十哩ある。或る年百八十哩あつたと思ふと、翌年は百五十哩になつたりする。三十哩は切れて冰山となつたり、氷塊となつて流れ漂ふ。誠に厄介至極である。一九〇八年の第一回探險にシヤツクルトンはこいつを岬と間違へて、かくは命名したのであるが、それは上述のごとく單なる一つの根無し氷礁にすぎなかつたのである。しかもその百八十哩もつき出た先端の水深は一一七〇尋に達するといふのであるからいやになつちまふ。

又東經八十七度附近にターミネイション・タングといふやつがある。一九一二年濠洲探險船「オーロラ」號によつて発見されたのであるが、こいつは一八四〇年米國の探險家ウィルクスの西進を阻止し、一八七四年「チャレンジャー」號の東進を阻止したと水路誌にかいてある。三十四年間その場所に頑迷つて居つた事になる。いまでも頑迷つて居るかも知らない。根無し氷礁といへども馬鹿にはならない。こういった氷礁も、或る時期に達すると、

途中から切れて、前述した氷塊や氷堤同様、海上に浮ぶのである。是等の氷塊や氷堤は夏期の南極圏の温度と、海水風の作用によつて更に小さく裂け砕けて、茲に無数の流水塊の群状又は帯状を形成する。これが所謂浮氷原とか流水帯と譯せらるるバック・アイスと稱するやつである。

以上によつて讀者は既に、この流水帯のあるところ、又は流水帯の出来るまでの過程に於て、その附近の海水はブラッキッシュになるといふ事が會得されたことと思ふ。この半鹹水即ち海水が氷塊の融解によつてその鹹度を薄められたところこそ、ブランクトンの發生する場所なのであり、鯨の集來する漁場なのである。

鯨は鯛や鰹と同じやうに回游性をもつて居ると信ぜられて居る。即ち同じ鯨は前年と同じ場所に歸つてくるのである。彼等の動物的本能はそこへ行けば、お前の好餌の小蝦は澤山居るぞと教へるのである。ところがその場所こそ人間にとつては厄介な場所である。冰山や氷塊が流れ、妖魔の呼吸の如き濃霧が、天地を灰黒色に埋むるかと思へば、七一〇耗といつたや

うに、内地では到底想像出来ない位の示度に晴雨計は降下して、暴風や大吹雪がくるのである。しかも困難や危険は、かくの如く漁場に於ける計りでなく、この南の寶庫に達する入口に於て「咆哮緯度」と稱する暴風圏があるのである。ちやうどそれは海底の寶玉を獲る爲めには、この玉を守護して居る海蛇と闘はねばならぬやうに、或は寶の山に入る爲めにはその途を扼する妖鬼や怪物と闘はねばならぬといふ、童話や傳説のストーリーを現實に地でゆかうといふのである。従つてこの一點だけでもこの事業が、人類の好奇心と射倖心と名譽慾とを煽りたつるに充分の魅力を有つて居るのである。

北極とか南極の探險は、極地に達せんとする名譽慾と、人智未開の處女地を學術的に調査しやうとする探究心の衝動に基づくものであるが、南氷洋に於ける捕鯨事業は、是等の欲望以外に、更にこれによつて大に——或は國家的に、或は個人的に——利益を獲得しやうといふのである。しかもその利益たるや、同じ人間同志を向ふに廻して、或は策略を用ひ、或は心にもないお世辭を使ふといふやうな事ではなく、堂々と大自然と、鯨といふ世紀的動物に挑

戦するといふのであるから、男子一生の快心事これにすぎるものはないといはなくてはならない。それだけ勞苦、危險、艱難も並大抵のものでなく、前述せる種々の氣象上の脅威の外、絶対に暗夜のない一日二十四時間を通ずる連続的勞働とか、五ヶ月餘りの間といふものは、見渡す限り白皚々たる天地の間に於て、夜もすがら又日ねもす巨鯨を相手に血飛沫あげての死の闘争の外、何等の享樂も慰安もない。非人間的生活を暮らさねばならないのである。

以下少しく南氷洋の氣象並びに、この南漢の極地に於て、日夜を通じて殆んど休息する事なく、東亞共榮圈確立の先鋒を承つて、國策的事業に従つて居る人々の七ヶ月半に亘る敢闘的生活の一端を紹介する事にする。

南氷洋に入らんとする航海者、又は南極圈に於て捕鯨に従事して居るものを惱ます氣象的困難は澤山あるが、「咆哮緯度」(一名暴風圈)濃霧、氷塊の三つはそのうちの優たるものであろう。

「咆哮緯度」については屢々述べたやうに、南緯四十度線を中心として、その緯度線と五

十度線との間を、風力七乃至九位いの雄勁なる偏西風が連吹して居るものであつて、「咆ゆる四十度線」といふ名の起つたのもそこから來て居る。誠に船乗泣かせの厄介な風である。この風帯は濠洲の東南から南米大陸の南端ケイブホルン沖、フホークランド島附近にまで及んで居るのであるが、喜望峯沖とケイブホルン沖は最も猛烈である。帆船時代に西間航船が喜望峯沖やケイブホルン沖で、これを廻り込むのに一ヶ月以上を費した記録のあるのは、皆こやつのが爲めである。喜望峯沖やケイブホルン沖が「海上の墓場」として船乗に怖ろしがられた理由は、妖霧だとか悪海流だとかいふ、別の原因もあるが、主としてこやつのが爲めである。「咆ゆる四十度線」といふから南緯四十度線と五十度線の間だけかと思ふと、意知惡の氣紛れ者の事であるから、なか／＼さう簡單に一筋縄でゆかない。時には三十度線位ひから吹き出して六十度線まで吹き放して居る事がある。濠洲とか南米とか大陸が南に出ばつて居るところでは、「咆哮緯度」も南に下るやうである。巖島丸の往航の時などはロンゴッツク海峡(南緯十度)を通過して暫らくすると、こやつの影響らしい長濤と南南西の強風をうけ、そいつ

がやまないうちに遂々本格的の「咆哮緯度」に入り、そして六十度線の少し手前まで、朝晩ひつきりなしに吹き通されてしまった。小山のやうな大波はのべつ幕なしに前甲板、後甲板の見さかひなしに飛び込む。その度毎に船は氣味わるく、各部の節々、ジョイント／＼がギ／＼とひしめき軋む。船もまた「おい痛いぞ」「おい苦しいぞ」といつておるやうな氣がする。建造後僅かに三年しかたゝない血氣盛んな鷲島丸ですらこれであるから、建造後三十何年といふ圖南丸や、總噸數僅か二百噸や三百噸の捕鯨船が、この「咆哮緯度」を、しかも氣象的にだん／＼悪い條件の重なつて來る復航時（三月末）に、こゝを通過する時の困難さは、想像するだに慄然たるものがある。本當に形容的でなく、よう沈まずに南に入り、北に歸るものだとほと／＼その勇氣と、その技術と、その經驗に對して、肅然として頭を垂れて敬意を表するのである。*

次は南氷洋獨得の濃霧である。そのエゲツない執拗さは「マクベス」に現はるる妖魔の吐く毒氣か、蝦蟇仙人の妖術中に出てくる濃氣もかくやと疑はるゝ程である。

元來南氷洋の限界については、諸説紛々であるが、大體南緯五十五度より七十五度間の極地を圍繞する約三百万平方哩の海洋であつて、これに英、米、獨、佛、諸、瑞、白、丁、濠、日、露等の諸國の探險家によつて發見されたグラハム、コーツ、エンダービー、ケンブ、クニン・メリーサブリーナ、ウイルクス、キング・ジョージ五世、アデリー、オーツ、キング・エドワード七世、ビクトリア、ペーター一世、シャルコット等の諸ランド（たゞし是等のランドと稱するものは、みな一つにつながつて居る大陸の一部であると信じられて居る）即ち、極地を加へた約六百萬平方哩の地域を南極圏といふのである。

是等の海洋中捕鯨船の馳駈する水域即ち漁場は、主として西經七十度のグラハムランドの西側から、南氷洋最古の漁場であるサウス・ジョージア島を経てウエツデル海、エンダービー・ランド沖から東經九十度のシヤツクルトン・タングの西側までの間大西洋側に、英國、獨逸、アメリカ、巴奈馬、アルゼンチン諸國の母船及び捕鯨船が活躍し、シヤツクルトン・タングの東側からクレーン・メリー、サブリーナ、ウイルクス、キング・ジョージ五世

アデリー等の諸ランド、パレニー、スコット等の諸島を経て、ロス海を含む東經百八十度線に至る廣茫たる太平洋側は日本船隊の活躍場所と（別に協定したわけではないが）なつて居るやうである。従つて東經百八十度線からグラハム・ランドまでは漁場としては、今日尙處女地であるやうである。

しかしそれかといつて是等の海洋と雖も完全に調査されたものではなく、未調査の部分が斷然多く、南氷洋一萬四千哩の海岸線中僅かに四千哩が漸く探險され、更に其内二千五百哩だけが海圖に載せられて居る現状である。一八二二年ペーリング・ジョウゼンによつて南極圈最初の探險が着手されてから、一八九四年エッチ・ジェー・ブルによつて最初の上陸が爲されてから、或は一世紀、或は半世紀を閲して居るに拘らず、南極圈の大部分は人智と人力に對して、無言にして且つ頑強なる鎖國を續けて居り、科學と資源に關する秘密境を形成して居るといつてよろし。

以上はランド乃至は海岸線についてであるが、海洋についても同様の事がいへるのであつ

て、今日僅かにグラハム・ランド附近、ウエツデル海、クキーン・メリー・ランド沖、キング・ジョージ五世ランド沖、パレニー諸島附近、ロス海附近を除いては、大體重疊たる浮氷原によつて固く閉ざされたる永久不開の海である。従つて航海者も、捕鯨業者も南氷洋に於ける行動は極めて慎重を要するのである。

嚴島丸はこの危険極まりなき南氷洋に於て、十八晝夜の間、西は東經百一度より東は東經百六十二度（パレニー群島の一島ヤング島四哩の沖）まで、北は南緯五十五度より南は六十六度に亘る區域を東西に一往復約二千五百哩を航走したのであるが、南氷洋に於て氣象的に一番好條件であるといふ夏期に於て、或は吹雪に針路を阻げられ、或は例の濃霧の爲めストップまたストップの難航を重ね、殊に日本船隊漁場中の最難所、東經百二十五度より百三十五度の間に於ては、風力六、七の大時化を食つて、とうとう船首に積み上げてあつた横障用の八吋マニチローブを一枚をこすり（重量約三百貫）大波の爲めに掠はれるといつたさわざであつた。

この間母船及びキャッチャー乃至川崎船に横附けすること前後七回に及び、三池またはリキバハンより積載してきた石炭または重油を供給し、それと同時に各母船より鯨油を積みとるのであるが、豫定の時日に制限があるので、多少の風波と長濤を冒して長鯨三頭を、緩衝材代りにして、公海中にピツタリと兩舷をよりそふやうに横附けする離れ業を演ずるその勞苦と困難は勿論のこと、一つの横附作業が終ると、次の横附までの間には、いままで重油を積んで居つた大きな船艙を、蒸気でふかし苛性加里で洗つて、何時でも鯨油を積めるやうに綺麗に掃除しなければならぬ困難なる作業を、全く文字通り不眠不休、晝夜兼行でしなければならず、しかも同時に時化に耐へ濃霧と戦はねばならぬその生活は、全く超人的のものであつて、精神的にも肉體的にも眞に乗組全員の協力と調和と犠牲と献身とを要するのである。日本國民の一人／＼がみなこの南氷洋に於ける船員又は捕鯨従業員の心を心とし、生活を生活とするならば、所謂新體制理念とか翼賛理念など、今更笛太鼓で宣傳し唱導する必要はないだろう。この意味に於て新體制は一足さきに既に南氷洋に於て實踐されて居ると私

は感じたのであつた。

却説南氷洋の氣象の話であるが、この海洋に於ては低氣壓は毎日のやうに發生して居る。晴雨計の標準示度は南緯六十度に於て七三・六・五耗である。これが日本だつたら超記録的な示度である。こいつが時によると七二〇に下がり更に七一〇に下る事がある。そして大體一日三百哩の速力を以て東に進んで居る。従つて日本船隊の漁場では、東より乃至南東よりの風が多い。こいつが南よりに偏向すると極地よりの寒冷を御土産にもつてくるので、痛いやうな寒さを感じ、防寒具なしでは甲板に立つて居れなくなる。こいつの強いやつが二、三月ごろ吹雪となるやつをブリツザードといふ。一九一二年一月十七日南極に達したスコット大佐以下五名が、その歸途全滅したのはこれにやられたのである。

ところが風が北西から北よりにまはると比較的暖かくなるが、例の船乗に禁物の「マクベスの妖婆の毒氣」がやつてきて、そこら一面灰色に濁つた空氣の幕がたれこめて咫尺も辨じなくなる。この無氣味な煙幕は氷山を匿まひ、浮氷原を伏さず、怖るべき悪戯者で、船乗に

とつて此上ない辛手である。

さて氷山とか氷塊とかいふやつであるが、こやつのは危険は、きまつて霧とか濃氣とか吹雪とか猛雨とかいふ「煙幕」とタイアップしてやつてくるのである。咫尺を辨じない、是等の煙幕が、何かの拍子でバツと少しばかり晴れると、そこにニューツと白つぽいお化けのやうな大氷山が忽然と前觸れなしの物凄さで出現してくるときは、相當場かづをふんで危険に對する多分の免疫性を有つて居る船乗でも、シューツと心臓が縮み上るのである。

南氷洋といへば誰でもすぐ連想するのは、北極や北氷洋方面のやつとは全然その形態を異にした、——巨大な切餅のやうな平らな頭をした、——南氷洋獨得の氷塊がユラリ／＼と漂流する光景である。僕が生れて初めて見た最初の南氷洋の氷山は、嚴島丸の往航時に南緯六十度半東經百二十四度附近で見たやつである。

當時「咆哮緯度」にひきつづき、猛烈な南東風に吹きまくられて、船は左右兩舷に二十度以上物すこくローリングをなし、空はかきくもり風物うたゝ暗澹として視界一漚位ひに狭め

られた南の深の海上に於て、本船左舷二三點位の處に周圍約四分の三漚、高さ約百尺ぐらひの削り立つたやうな斷崖絶壁をもつた、例の切餅式大氷塊が、本船から半漚ぐらひのところへ、遠路よくこそ御出でなさいましたといはん計りにニョキリと出てきたのには、粟肌のとつやうな一種異様の悽愴感を與へられたものである。

しかし其内に餘り多くの氷山や氷塊を見るので、すつかり馴れつ子になつて、最初の好奇的心理も麻痺した計りか、太陽の光燦然と輝く好天氣の日など見渡す限り、本船を圍んで、近くは半漚ほどのところに、遠くは水平線上に、無數の氷山が、或るものは日本の城のごとく、或るものは古代羅馬のコロシウムのごとく、或は橋のごとく、或は塔のごとく、或は馬のごとく、犬のごとく、船のごとく、千差萬別種々さまざまの形態を以て押し並んで居るのを見ると、何だかお伽噺の國へでも行つたやうな錯覺を起すのであつた。

かく形態こそ愛嬌がありユーモアを感じるが、依然として物凄さを感じる一點が氷山にあるといふのはその色である。氷山は所謂氷である。勿論白い。しかしその白さが尋常一様の白

さではない。白墨を塗つたやうな白さである。觸らば落ちるであろうやうな厚い白粉をユテく／＼と塗りあげた娼婦の顔のその白さである。氣味悪からざらんとするも又得べけんやである。しかもところ／＼の絶壁の皺や、陰影になつて居るところや、海水につかつて居る部分はその凄いプロシアン・ブルーの青さである。何れにせよ餘り親める代物でない事だけは間違いない事實である。尙この氷塊の形態によつて、これは今年のやつか、昨年か、又はそれよりも尙古いやつかの區別がつくといふ事である。有體をいへば頂上が切餅式のやつは比較的新しい時代に海上に浮び出したものに相違なく、多分今年位ひだらうとその年齢を推定する事が出来るが、頂上が凸凹になつて居つたり、側面の皺や龜裂が深くなつたりして居るやつは、十中の八九まで相當多くの年齢をとつて居る奴だとの事である。何となれば一年以上乃至は二三年海上を漂流して居るうちに、海流や風波の影響により、又は夏の南氷洋の水温の上昇によつて、水面下の部分（水上部分の約三倍か四倍）が急速に溶解して、上下の比重がそのバランスを失ない、顛倒して上下の位置を變へたやつだらうとの事である。

夏期の南氷洋にいくると「夜を創る」といふ話を聞く。
一寸面妖な話であるが、南氷洋の特殊の生活ならではの到底その實感を觀取し得ない、尊とい體驗談でもある。

捕鯨漁場になつて居るこの邊の海洋では……勿論時期と場所によつていろ／＼違ふのであるが……太陽は毎日午後十一時半ぐらひに水平線下に没するが、翌日——といつたつて僅か二時間位ひの間つきりない——の午前一時半にはもう水平線に又出て来て居る。この二時間といへども黄昏時に黎明時と踵を接してつゞくのであるから、太陽の丸い姿は見えないといふだけで、世間は全く晝間のやうに明るいのである。これを換言すれば、この頃この邊の海には夜がないのである。

太陽は眞方位（この邊は、南緯七十二度二十五分、東經百五十五度十六分にある磁極に接近して居るため、磁氣羅針盤による方位は全然出たらめで、眞方位との間に十點即ち百十六度の偏差がある。これによつても南氷洋にくる船はジャイロ・コンパスを備へつけなくてはな

らない事が分る)太陽は南南西に沈み、二時間後に南々東から出てくるので(其間僅か四點)一寸仕事に夢中になつて居ると、何時太陽が沈んだのか分らないで、いま見える太陽は登つてきたのか、沈みつゝあるのか、之を要するに晝夜の觀念が倒錯して了ふ。沈んじやいけないと、太陽を扇で呼び歸さうとした平相國を南氷洋に連れてきたら、これこそ正に我が世の春(いや夏)だと、鼻毛を伸ばした事だろうと、詰らない連想さへ起つてくる位に長い晝間である。太陽は方位にして二十八點、時間にして廿二時間我等の頭上を廻つて常に燦然と輝いて居るのである。これがもつと南へ、南緯七十二三度あたりへ行くと太陽は午前一時ごろ水平線上一尺ぐらひのところまで降りて來るが、また思ひ返したやうに、上へ登つて行く。いよゝ清盛式お天とう様だといはなくてはならない。こういつた太陽の下、一日廿四時間暗くなるといふ事のない船の上で捕鯨作業又は鯨體の解剖作業をして居ると、妙な現象が起つてくる。

捕鯨工船では、船員も漁夫も雜夫も製油夫も二當直に分れて十二時間働き、十二時間休む

といふ仕組みになつて居る。しかし非番になつて休まうとしても明るいのである。明るい夜である。寝やうと思つても明るい具合がわるい。時計は夜の十二時を示し、午前の一時を教へるが、室外は勿論部屋の中でも煌々と明るいのでは始末が悪い。そこで「夜を創る」工作が行はれる。ちやうど寫眞の暗室を作るやうに、窓硝子も戸のすき間も黒い布で蔽ふて人造闇夜を創り、劇しい労働の休息をとるのである。

しかし南氷洋ではこういつた「夜を創る」などは贅澤の方で捕鯨船の乗組員たちは、午後十一時から翌日の午前の三時まで、つまり四時間船を「流して」一日の休息をとる事になつて居るのであるが、午後十一時少し前ごろに鯨を見つけたとなると、これを追尾捕獲する爲めに、場合によつては二時間も三時間もかゝり、そしてこれを二十哩或は三十哩も母船に曳いて歸るとなると、いつの間にか午前の五時ごろになり、結局一日中寝られない日がある事は珍らしくないといふ譯である。

鯨の話

一口に鯨といったとて其種類も多く(二十餘種)又北極鬚や日本近海で見らるゝものが、南極圏には全然居なかつたりするので、動物學的にいふ場合と、營業的にいふ場合とは大分ちがうやうである。

鯨は大體 有鬚鯨 有齒鯨 有嘴鯨に三大別される。有鬚鯨とは長鬚とか白長鬚とか、其他、脊美鯨、鯨、坐頭鯨等の如く、口の中に所謂鬚、長さ約五尺に達す)を有つて居る種類で齒はない。即ち是等の鯨は、彼等の大好物である小蝦(學名はEuphausia Superba、西洋の捕鯨業者はKrieといふ)を、胃が一杯になるまでは勿論の事、口のところまで溢れる

位に食食するのであるが、(捕獲された白長鬚を解剖するとき、時には四斗樽四五丁分の小鯨を發見する事もある)彼等は口を一杯に開けてこの小鯨を水といつ緒に吸ひこみ、小鯨だけを残して海水は再びその器を透して體外に排き出すのである。漁場で或は鯨油を、或は肉を、或は尾羽とか立羽等を漁獲するのは、主として此種類の鯨である。長鬚、白長鬚にはその咽喉から胸部、腹部にかけて、白く波つう縦囊がある。

「坐頭」の名の起原は面白い。この種の鯨は、恐ろしく不恰好な頭部と、比較的にな大きな立羽(胸鰭)をもつて居るので、それが游いで居る様は、ちやうど杖をつき袖を広げた盲人が歩くやうであるといふところから命名したとの事、面白い日本人の連想觀念である。

有齒鯨といふやつは、この鯨鬚がない代りに、大きな齒がある。此種の代表的のやつは抹香鯨、一角鯨(長い大きな齒が一本ある)黒鯨、白鯨等である。

「抹香」の起原についてはこれまた面白い。この鯨の肉は何處となく線香くさいといふのである。どうも餘り當にはならない。又一説には例の龍涎香 抹香鯨に限られ腸痛の一種なり

ともいふ)が寺僧によつて使はれたのが今日の抹香であるともいふ。しかしこの鯨の油は、長鬚や白長鬚のやうに、マーガリン・バターの材料ともならず、其肉も又食用には全然ならない事は事實である。ところが一長一短で、この鯨の油、殊に腦油は潤滑油として用ゆれば極めて良質であつて、獨逸ではこれに礦油を混ぜて或る種の化學的處置を加へる事によつて飛行機の潤滑油を作り出すといふ事である。

有嘴鯨とは屠殺鯨、鯨、海豚、ポーポイズ、ミンク等をさすもので、捕鯨事業の目的物とはならない。このうち屠殺鯨とか鯨とかいふやつは誠に獍猛で、その強靱な長い嘴で他の種類の鯨や、氷上に居る海豹を攻撃したりする。南極探險記を見るとシヤックルトン一行などは氷上に居る間、この屠殺鯨の爲めに、氷に穴を開けられたり、或は氷塊を顛覆させられたり、終始攻撃されて居る。

話の鯨
ミンクについては面白い話がある。先年ある人が、僕同様、本船で南氷洋に視察に來たときこのミンクが船側を泳いで居るのを見て、捕鯨船に「鯨が居る」と無線をうつたものである。

早くくればよい、逃げないうちにくればよいと、首を長くして待つて居つたところ、二溼ばかりさきまでやつて来た捕鯨船は、望遠鏡で見るとまさしくミンクであるから、なあーんだのミンクかと計りさつさとどこかへ行つてしまつた。憤慨したのは御本人、折角俺がみつめて知らしたのに、傍へもよらずに行つてしまふとはけしからんと大に熱を上げたが、後であれはミンクといふやつで、鯨は鯨でも、油はとれませんと説明されて、大笑ひになつたとの事である。しかしこれは素人としては無理もないかも知らぬ。

この話でも分るやうに、捕鯨船は五溼か三十溼さきから、あいつは何鯨だといふ事がすぐ分るのである。流石餅屋は餅屋、どうして分るか聞いてみると、潮の吹き加減、即ち鯨の呼吸のしかたで、あれは白長鬚、こいつは抹香といふ具合に分るとの事である。即ち白長鬚は體軀が最も長大であり（九十何尺に達するやつもある）重量も重く、油も一番餘計にとれるので、捕鯨業者にとつて最良目的物であるが、従つて呼吸も最も強いので、潮（鯨の呼吸排氣）も一番高く且つ眞直に上り、しかも鼻口からすぐ出たところは潮が切れたやうに見え

るとの事である。長鬚はそれ程高く上らず、潮も切れて見えない。抹香は鼻が頭の中心部より一方に偏位して居り、鼻口が少し前方に傾いて居るので、潮も斜めに上る。坐頭は二つの鼻口が他の種類のやうにくつついて居らずに、離れて居るので、潮も二つに別れてパツツと散るといつたやうに、それ／＼特徴があるといふ事である。

だから先年現場を視察にいつた日本水産の顧問齋藤半六中將は「潮吹かぬ鯨が居れば一大事」といふ狂句をものした。成程捕鯨業者にとつては、鯨を發見する唯一の手がかりである潮を吹く事を、鯨がみな止めてしまつたら、それこそ一大事であらう。しかし雉も啼かずばうたれまいで、鯨も潮を吹くからこそ、うたれるので、水の中に住んで居りながら、哺乳動物として呼吸しなければならぬやうに、運命づけられた彼等は、造化の神様を恨むであらう。そこで鯨の爲めに一句あり。「潮吹きが鯨にとつて一大事」

それでは今日世界中に於ける各種の鯨は一體どの位ひ總數あるだらう？又その中春から夏にかけて南氷洋に集まつてくるものは何頭位あるだらう？鯨は鯛や鰹のやうに回游性をも

つて居るだろうか？鯨の壽命（天壽）は平均何年であるか？一年のうち何時交尾するか？一年に何頭生むか？それとも隔年に生むものであるか？胎兒は何ヶ月位で生れるか？生れた仔鯨は全部育つか？雄と雌の比率はどうか？等等については、所謂鯨の腹から生れて来たやうな博識ぶりを發揮する人たちの意見といへども、それは要するに過去數年間乃至は十數年間に於て、彼等の得たる限られたる捕鯨經驗より推測したるものに、かくあるべしといふ假説を組み合せた結論であつて、何等科學的に乃至は學說的に考究されたものではない。従つて鯨に關する自然科學は、他の動物の場合に比して、未開拓の領域、所謂バージン・ソイルが可なり多いといふ事になる。しかもおぼろげながらこの程度の事はいへる。即ち鯨は北半球は北半球、南半球は南半球で、大體赤道と極地との間を一年間に一度の割合で回游するものらしい。何となれば十一月のはじめ頃南氷洋の北部で捕獲した鯨を解剖してみると、まだその年の南氷洋の小蝦を喰べて居らないこと、そして脂肪も少なく非常に痩せて居る事に徴するとき、前年の夏極地に近い「ブラツキシユ・ウオーター」(氷礁や氷河が海に落ちこむ附近の

海水)は、プランクトン(動物性浮游生物)が発生する條件に適當する濕度と、鹹度と、溫度とを具有するに至るので、鯨はプランクトンを喰ひに集まつてきた小蝦を鱈腹喰べた後、極地を去り赤道方面に向ふのであるが、その間鯨は、ちやうど沙漠を彷徨する駱駝が食物をとらなくとも、背中の肉瘤から自分の生存と活動に要する營養素を攝取するやうに、極地でうんと厚くなつた皮下脂肪を自分で共喰ひをしながら、六月より九月までの交に於て、比較的暖かい場所に於て出産し、(鯨の胎兒は十二ヶ月胎内に居る故、鯨の交尾期は前年の六月より九月までの間と推測さる)雄雌仔の三鯨は仲よく再び極地に歸つてくるものといふのが、當らずと雖も遠からざる推測である。これについては英國の捕鯨業者は、銀の銛を鯨體にうちこんで、その回游性を調査して居る。

鯨の壽命は案外短かく二十年位だらうといふ説もあるが、何等の科學的根據はない。又鯨は一年に一頭づゝ、又は二年に一頭づゝ生むといふが、是も推定にすぎない。(經産であるか不産であるかは子宮の状態で分るといふ意見もある)又南氷洋の捕獲成績から類推する

事を前提として論ずると、雄と雌は略ぼ同数といふ事になる。

鯨の話

一昨年南氷洋に出動した各國の捕鯨工船の總數は三十餘隻、捕鯨船の總數二百數十隻、捕獲せる鯨の總數五萬餘頭、製油總噸數五十餘萬噸、賣上價格約一億七千五百餘萬圓（一噸邦貨三百五十圓として）であつたが、捕鯨船に發見され、捕獲されたるものの約十倍が、南氷洋に集まる鯨の總數とせば、約五十萬頭の鯨は居るだらうといふ事になる（心細い計算だが）

又捕獲された雌鯨は四頭のうち一頭の割合で妊娠して居る（鯨も人間と同様、なかには雙生兒を孕んで居るものもあり、子宮外妊娠や、畸型兒を發見することもある）ので、この割合でゆくと、五十萬頭の半分その又四分の一即ち八分の一、即ち六萬二千五百頭は新に生るゝ筈の數であるが、それから捕獲さるゝ五萬頭の八分の一、即ち六千二百五十頭をさし引いた五萬六千二百五十頭が、新に増加する數となる譯である。さうすると、いまのところ新たに生るゝ數と、年々捕獲さるゝ數とは略同數であるから、南氷洋の鯨は現状維持で殖へもしないし、減りもせんといふ事になりさうである。それでは今日以上に各國から出動する捕

鯨船が増せば、鯨の總數は減少するかといふに、今日比較的警戒性の少ないのんきな南氷洋の鯨もなかにはドンガラ（大砲をドンとうつても當らない場合、即ちカラ、鐵砲であるから、それでドンガラといふ）や何かでおどかされたものもあるし、年々脅威されてくるので、大部神經質になり、敏捷になつてゆくので、捕鯨船の捕獲率も、或は今日よりも低下するではないかと思はれる。さうすると現在の平準を保つてゆくのではないかと思はれる。しかし以上はみな假定であり、推定である。實際はもつと科學的に、そして經驗的に研究してみなくては分らない。

鯨は今日地球上に現存して居る動物のうちで、一番大きいものであるが、それがどんなに大きいかといふことを分り易く説明すると、長さ六十七呎胸圍り三十六呎・九吋、體高九呎、體幅十呎の白長鬚鯨の全重量は四八・八九噸、換言すれば四十八萬八千九百斤、一萬三千二百五十貫である。その中肉は全重量の五割三分、骨は一割九分、脂肪皮は一割八分といふやうな比率であるが、舌が二百九十貫、肺が百六十貫、心臟が八十九貫といふ重さである。一、

寸想像を絶した規格ではあるまいか!!

いざといふ時の鯨の速力は、大きいやつが一時間六節より七節、小さいのは是よりも早く九節より十二節を出す。しかし捕鯨船に狙はれて居る事を氣づかぬときは、ゆつくり遊いで居るので捕鯨船はすぐ追いつき、十五間位ひに迫つてドンとやるのである。

鯨は大體一夫一婦主義（殊に坐頭鯨の夫婦愛は有名である。人間はむしろ恥じなければならぬ）で、よく二頭つれ立つて遊いで居るが、最初雌がやられると、雄はどうしても逃げず、雌を助けやうとしてうろ／＼その周囲を遊いで居るので、結局雄もやられてしまふ。この反對に雄がさきにやられたときは、雌は薄情にも、あとも見ずに一目散に逃げてしまふ。これは男よりも女の方が薄情だといふ事になりさうである（一寸人間社會にもこういう傾向はありますかな）しかし雌には胎兒があるからとか、或は仔鯨があるからだといふ事を想像してやらなければならないかも知らん。

鯨の王者は何といつても背美鯨である。繪圖などを通じて「鯨の潮吹き」として子供の時

分から我々の目に親しい、あの代表的な呼吸——潮が吹きあげられて上へ行つて兩國の煙火のやうにパーツと二つに分れてゐる——は背美鯨だけの獨特のものである。南氷洋へきて實際見て分つた事であるが、長鬚鯨や白長鬚鯨の潮は、我々が繪や話などを通じて想像したものとは大分ちがふのである。パーツと煙のやうな、飛沫しぶきのやうなものが水平線の彼方にあがつたと思ふと、瞬時に消へてしまふ。それが彼等の呼吸なのである。

背美鯨が鯨族の王者たる資格はその潮吹きばかりでなく、實に悠然として迫らざるその態度である。捕鯨船が近づかうが「ドンガラ」をうれやたうが、彼の女はあはてず騒がず、水に潜り水に浮び、そして「兩國の煙火」を吹きあげる。だから捕鯨者からはあいつは馬鹿だといはれるが、同時に背美鯨以外の鯨は「くんすら」（肩鯨の意）だといはれて居るを見て、背美鯨の貫録は分るといふものである。

もう一つ背美鯨の人口に噂炙するに至つた原因は、彼の女が捕鯨史と常に終始して居る事である。日本及び世界の捕鯨史は別項にかいてあるが、捕鯨史の最初から背美鯨は捕獲の對

象となつて居る。我が國に於て捕鯨方法が、突取法とか、網取法とか「鼻通し」だとか、投げ網—だとかいふいろ／＼の時代を経て、今日の諾威式砲殺法に變遷するまで、その對象は背美鯨と鯨鯨であつた。この關係は世界の捕鯨史に於ても同様であつて、漁場が地中海からビスケー灣へ、北海からスピッツベルゲンへ、アイスランド、グリーンランド等の北大西洋から南大西洋、印度洋へ、そして今日世界の捕獲頭數の八割までを占むるに至つた南氷洋へと進出するまでの長い、そして種々入りくんだ経緯ある變遷史の中心をなすものは、主として背美鯨及び克鯨に對する濫獲がその原因を爲して居るのである。

然し、それ程有名なる背美鯨でも、體長を白長鬚や長鬚に比べると短少であつて（五十五尺から六十尺、體長と略ぼ同尺の胴廻りをもつて居る）鯨油の含有比率も少ないので、今日はその地位を長鬚や白長鬚に譲り、昔日の盛名も衰へた觀がある。尤も長年月の間濫獲の對象となつた關係上、非常にその數が少なくなつたので、今日は一九三八年ロンドン會議で決議された國際協定によりその捕獲を禁じられて居る。（しかし日本内地の沿岸乃至近海捕鯨は除外例）

いま昭和十三年を以て終る最近十年間の日本沿岸に於ける鯨種別捕獲年平均數を見ると、長鬚鯨三百二十頭、白長鬚鯨十九頭、坐頭鯨七十七頭、鯨鯨二百七十二頭、抹香鯨七百六十五頭に對し、背美鯨は僅かに五頭である。以ていかに背美鯨の數が激減しているかを、そして種族保護を爲さねばならぬかが分るであらう。

「背美」の名の起源は、その背中が眞黒で、艶々と光り輝いて居るところから來たものらしい。鯨體の色彩がとても綺麗事であると、體型は勿論、立羽（胸鰭）といふ、尾羽といふとても素晴らしい流線型を爲して居る事は、總ての鯨種に共通であるが、特に長鬚、白長鬚に於て著るしい。白長鬚も長鬚も鉛銀色のその背部から中腹部にかけて一面に一寸計りの粗毛が密生して居り、それが、保温の爲め鯨體から分泌する油と海水の作用によつて、ところ／＼濃淡とり／＼の灰白色の斑點を呈してゐるところは、美くしい織物模様のやうである。全體として冷めたい、滑つこい、金屬的視覚感を與へる。

この兩者のちがふところは、白長鬚は長鬚に比して、その背部と頭部が稍濃厚なる黒色を

呈して居る事と、體長は遙かに長く、國際協定による捕獲禁止定尺は前者が七〇呎であるに對し、後者は五五呎である。いままで南氷洋で捕獲した白長鬚の最大の記録は、一九二六年にサウス・シエツトランド沖で捕へたもので、體長百六呎、重量百噸、價格邦貨に換算して約一萬五千圓に達したといふ。白長鬚の鬚(齒葉)は漆黒であるに對し、長鬚は白い。一頭の齒葉は(上顎のみにあり下顎には無い)三百八十枚から四百二十枚ある。齒葉の長さは最長五呎に達する。

長鬚は白長鬚よりも稍細く小型である事は前述したが、彼の女は後者よりも食意地が張つて居り、終始小蝦を食べて居ないと承知出来ない性分らしく、従つて海岸や浮氷原よりも遙かに沖合を風に向つて游泳して居るのを常とする。「沖鯨」の稱呼は茲から出て來て居る。従つて游泳速度は一番早い。これに反し白長鬚は大體原則として一日に二回捕食するだけで、多くは浮氷原の中にのらりくらりと靜かに游泳して居るとされて居る。この習性の相違により捕鯨船乗組員は兩者の漁場の區別をするのである。もう一つ違ふ點は背鰭であつて、

長鬚のそれは白長鬚の其より大きい。立羽(胸鰭)の長さは體長の十二パーセントを占め、披針狀を爲して居るところは、兩者同一である。

白長鬚、長鬚の稱呼の起原は面白い。兩者とも長い鬚(齒葉)をもつて居る事は同じであるが、白長鬚のそれは上述したやうに黒く、長鬚は反對に白い。しかも面白い事には例のとたん屋根のやうな畝のある腹部は、前者の黒灰色に比し後者は灰白色を呈して居る。それであるから名前と實物とは正に反對である。それでは何故黒っぽい鯨を白長鬚といふに至つたかといふに、彼の女が水中に居るときは海水や光線の關係で長鬚よりも白つぽく見えるといふ事である。そんな馬鹿な事はないだらうといつたつて、長年捕鯨をして居る連中が名付親であるから、たしかにさうであるにちがひないだらう。

捕鯨者は長年の經驗から、二本長鬚(夫婦もの)——この夫婦のうちにも昔からの夫婦と、出來合ひ夫婦の相違があるが——は捕り易いが、一本長鬚は六づかしい。又浮氷原に附いて居る白長鬚は捕り易いと誓ひ傳へられて居る。成る程その通りで、一月二日筆者が第三圖南

丸船隊の第十二昭南丸（船長近藤勇吉君、砲手小野大次郎君）に乗り込んで、捕鯨状況を見學したときも、最初見つけた一本長鬚はこれを追尾する事二時間に及んだが、巧みに捕鯨船の追及を右にかはし左に避けて、漸く占めたと思つたら「ドンガラ」でとう／＼逃がして了つた。内地からやつてきた變な客が便乗したので縁起が悪いので取り逃したなどと、例によつて御幣をかつがれ、鹽でもまかれたら困つたものだ、僕も内心大に心配して居つたら、今度は五六漚さきの浮氷原のなかに「白」（白長鬚）が居るぞいふので、全員エライはりきり方で（尤も前日の元日の屠蘇の機嫌も手傳つて居つたらう）走り出した。僕が船橋から見つたつて分らない。ところが矢張り生業は生業である。とう／＼バツ、バツ、バツ、バツの白長鬚しかも八十尺以上の優物を仕とめたが、「こんな温順しいやつは餘りないね」と、乗組員が口々にいつて居つたのに徴するも、浮氷原で小蝦を腹一杯に喰べて晝寝でもして居つたにちがいない。（捕鯨船の活躍ぶりについては別項に書いてある）

尙此日第十二昭南丸は僕が乗る前に既に一本、僕が乗つてから上述せる如く二本、計三本

の大漁で二日の仕事始めに三本とは縁起がよい「これも貴方が乗つたからだ」と、何も知らないこの僕が、急に「大漁男」と奉られたのは愉快であつた。

因みに背美鯨のことを英國人は Right whale 白長鬚鯨を Blue whale 長鬚鯨を Fin back 坐頭鯨を Hump back 抹香鯨を Sperm whale 鯧鯨を Sei whaie 克鯨を Gray whale などと呼んで居る。大體色彩や恰好で命名して居るその心理は、日本語による名稱起原と同じであるが、彼等には白長鬚が白く見えずに青く見えるらしく、坐頭鯨は僂儂によく似た、猫背の恰好をした鯨と映るらしい。一番面白いのは抹香の名稱で、譯しやうによつては「精液」鯨ともなる。抹香と精液とはどんな関係があるか、この點は南氷洋捕鯨の第一人者、日本水産の「鯨男」の大西廉作君に聞いてみると、責任のある事はいへないが——といふ前提の下に、抹香鯨は臍臍みたまやうに精力旺盛な多淫のやつで、一夫多妻のやつだから、さういふ名前がついただらうとの事であつた。尤も抹香鯨は例の有名な龍涎香を有つて居る唯一の鯨種であるが、龍涎香は別項に説明する通り、精液とは關係ないやうである。

抹香鯨の名稱の起原については上述せるものと異つた解釋がある。それは前出の「鯨男」大西廉作君の意見であるが、地中海、ビスケー灣等に發祥した捕鯨業がスピッツベルゲン、グリーンランド、アイスランド等の大西洋側から、喜望峯を廻つてマダガスカル、スマトラジャワ等印度洋方面に進展して事だ中世紀の中葉に、印度の漁夫が或る日洋上で、異臭を發する、褐黑色の得體の知れない半固形體のものを拾つてきた。誰に見せても何者だか分らない。それで止むを得ず、村一番の知識である寺の住持のところへ持つていつた。流石の坊さんも分らないので納屋の中へ放り込んで居つたところが、暫らくたつて納屋から薪を取り出して庫裡で焚いて居ると、アーラ不思議、コリヤ玄妙、何ともいへない妙なる芳香馥郁として寺内一杯に漂ひ始めた。吃驚したのは坊さん、幾ら考へても合點がゆかない。そこで頭痛鉢巻で考へて見て、ハタと膝をうつた。いつか漁夫の持つてきて納屋においていつた、あの得體の知れない怪物が、何時の間にか薪に泌み込んだのが、この芳香の正體だといふ事を發見した。この得もいはれぬあへかなる芳香こそお經の文句のなかにある抹香といふものだらうといふ

事になつて、その出所をだん／＼穿鑿してみたところ、どうやら或る種の鯨の排泄物だと分つた。それでこの鯨を抹香を生む鯨、即ち抹香鯨だと命名したといふのである。誠に長々と御退屈さまの話であるが、何處まで本當であるか筆者勿論責任を負はない。

しかし龍涎香は火に燻べると芳香を放つ事は事實らしい、數年前の「漁業報告」にもその事が誌されて居る。それによると一九一二年の事、北米オレゴン洲アストリアの漁夫が、何日も／＼もしけ計りで、収入はなし、女房には喧ましくいはれるし、これでは轉業でもしたくてはなるまいと、すつかり悄乎きつてトボ／＼と家路を辿るとき、褐黑色をした固形體の變なものが、海岸に流れついて居るのを發見した。手にとつて見ると堅いし、さりとして何であるかさつぱり得體が分らない。貧すりや鈍するで、彼はこいつは何かコークスの一種だらうとばかりに、その一角をかいてストーブに放りこんだところ、ア、ラ不思議（又始まつたと讀者はいふだらう）忽ち得もいはれぬ妙香が煙突から出て、二三哩半徑内の遠方まで香ひ出した。ジエイムスの家からは妙な芳香がするぞといふ評判がたつやうになつて、これが香

水製造業者に聞へて、とう／＼この龍涎香が五萬弗に賣れたので、昨日の貧乏漁夫は、今日は一躍成金になつたと誠にやかに書いてある。こんなやうな龍涎香物語りは澤山ある。

其では一體龍涎香は何であるかといふと、從來日本では牝の抹香が妊娠すると、極く稀に腸に異状を呈し（一種の癌症状）それが海中に排泄されたものだといはれて居つた。ところが抹香鯨は前述せるごとく精力旺盛、一夫多妻のやつが多いので、菲力短才、女運については落伍者である獨身鯨は、日本方面から田舎まはりといふ譯で、南氷洋くんだりへ味氣なき漂泊の旅へ出發する事になる（これを俗に「放れ抹香」といふ）であるから南氷洋で捕れる抹香は牡計りであるといはれて居る。ところがこの牡抹香を解剖したところ、その大腸から龍涎香が出てきた。茲に於て龍涎香は牝鯨の排泄物なりといふ定義がひつくり返つて了つた。それでいろ／＼研究してみたところ、元來鯨にはいろ／＼の病氣があり、肺結核もあれば肝臓肥大症、乳癌、腸捻轉等の病氣もある位だから、この龍涎香も何かの腸故障の結果としての病氣（癌種）か、又は宿便の一種だらうといふ事になつて居る。それでは何故抹香鯨計

りにこういつた病氣又は宿便が出来るかといふに、外の鯨の餌は大體小蝦であるが、この抹香だけは、齒類（下顎に四十八本から五十六本の齒がある）であつて、烏賊を常食とするところから、充分に消化されない烏賊の頭などが腸内に残つて、それが原因になつて（現に宿便の中に現形の儘残つて居る由）それが龍涎香を發生する病的現象を構成するだらうとの事である。

以上の話によつて、火にでも燻べない限り龍涎香そのものだけでは、芳香を發する事は絶對にない計りか、むしろ紛々たる異臭鼻持ちがならないとの事である。これを香水に精製する爲めには、龍涎香二割、乳酸二割、精製ガソリン六割の比率で、龍涎香の溶液を作り、その溶液の少量を普通の香水に入れると、落ちついた上品の香が出てくる計りか、その香が何時までも消ゆる事がないといふ段取だといふ事である。

抹香鯨は食用としてはむしろ不向きであるが、その油、殊に腦油は上等の潤滑油となり、更に此の油に或る藥品を加へて特殊の化學的處置をなすと、航空用發動機等の高速度機械の

潤滑油となるといふので、最近著るしく斯界の注目をひいて居る。

元來鯨油は勿論水より軽いが、鯨種によつてその比重は多少の相違がある。即ち長鬚、白長鬚は〇・九二であるが、それよりも良質とされて居る抹香の油は〇・八七である。

鯨油の良否、積粗を決めるのには勿論比重の輕重も目安になるが、一番よい方法とされて居るのはその色の度合である。色は淡黄色を最上とし、これに赤味の加はるゝ度合が多くなると従つて粗悪なりとされる。それは製油の過程に於て蒸溜される熱度が、一定温度乃至は一定時間以上に加熱されたり、又は船艙に貯藏されて居るものを、赤道を越へて運搬する爲めとか、この鯨油を船艙より陸上のタンクに移すとき、底部に膠状態になつて居るものを溶解せしむる爲めに加熱することなどが原因になつて、國際協定で規格されて居る百分の二以上の遊離脂肪酸や、必要以上の抗素や、色素を發生せしむる事となるので、是等の夾雜物が多くなればなる程、鯨油の色は赤味を帯んだものとなる。この色彩によつて鯨油が、國際協定の規格以上であるか、以下であるかを検定する機械にチント・カラー・ミーター (Tint

Colour meter) としふものがある。

最近特に注目さるゝやうになつた抹香鯨の腦油はその堅牢無比の頭部(抹香の頭は氣をつける、やつと衝突すると、抹香の頭は破れないが、船の方がやられるぞと、よく捕鯨船の連中はいつて居る)にあり、堅い頭皮(最近靴底用に使はれる)の下に千筋及び千筋拂ひといふ纖維質(最近ゼラチンの材料となる)があり、更に其下に並床及び本床といふ筋肉質の隔壁によつて圍繞されて居るその中に、石油罐で三四杯分の、ドロリとした淡クリーム色の液体があるのが抹香腦油である。抹香を解剖して居ると、どろ／＼と出てくるが、南氷洋の外氣にふれて、すぐ固まつて了ふ。

抹香鯨はその巨きな頭部も背部も黒光りする位に漆黒であるが、腹部と鬚は眞白い。腹部の畝は長鬚や白長鬚に比すると、數は少ないが、一つ一つの畝はむしろ大きくて深い。其他の點で長鬚や白長鬚と異つてゐる點は、前者は背鰭が頭部から四分の三のところにあるが、抹香や坐頭は三分の二のところにあるのである。

さてお次ぎは坐頭鯨である。「坐頭」の名の起りは上述せる如く鯨體に對し不釣合と思はるゝ程の巨きな不恰好の頭部と、體長の四分の一にも達する巨大の鎌狀の立羽たつば（胸鰭）を動かして、ノロ／＼と游泳してゐるグロテスクな様子は正に僂僂男か、坐頭を髣髴せしむるといふところから來たものである。

坐頭鯨は頭部脊部は黒いか、腹部及び尾羽は目も覺むる位に眞白い。平均體長は抹香と略ぼ同じく四十五呎で、捕獲禁止定尺はこれまた抹香と同じく三十五呎である。

坐頭は其不恰好なる體型が示すやうに舉動も敏活でなく、ノロ／＼然、ブラブラ然と游泳して居り、従つて回游性などはないらしい。又沖合で游いで居る事は少なく海岸に近く居るので「磯鯨」ともいゝ又「岸鯨」ともいふ綽名がある。

嘉永年間ベルリが日本に來て通商條約の締結を迫つた當時（通商條約の締結といへば大きい、通商條約の實質的目的は、當時小笠原群島方面に出沒して居つたアメリカ捕鯨船に炭水、糧食、其他の消耗品の補給を與へるといふのが本音であつたといはれて居る）は小笠原方

面には随分坐頭鯨が澤山居つて、磯近いところでひつくり返つて甲螺を干しておつたのを、アメリカの捕鯨船が見たといふ（晝寢をしておつたとか、鼻歌を歌つておつたといはないところがまだしもである呵々）

そのせい、茲に滑稽な事がある。一寸エロつぽくなるが、坐頭鯨の下腹部、殊に牝鯨の例のもの、兩側には大概相當數の牡蠣がついて居る。今度圖南丸で解剖したやつにもついて居つたが、その理由はよく判らない。まさか磯に上がつて晝寢をするやつは牝計りに限られたわけでもあるまい。説を爲すものは坐頭は一つところにじーとして居るから牡蠣がつくといふのであるが、繋ぎ船の底じやあるまいし、そんな事はないだらう。そこで他の理由がつけられる。それによると牝鯨の乳首は生殖器の兩側について居る。その何れから出るのか判らないが、妊娠して居る牝は其邊から分泌物を出す。それを目當に牡蠣がつくといふのである。さりとは助平なる牡蠣なる哉といふ事になる。

坐頭は鯨族中でも一夫一婦の嚴守者で夫婦仲の濃厚なるは、人も羨む程であり、牝鯨をう

たれたときの牡鯨の悲嘆と哀愁は、流石の荒くれ砲手も見て居られない位で、何でこんな因果な生業しうばいをするんだらうといふ氣になるさうである。そして結局牡も牝に殉死する事になるといふ事である。坐頭鯨の愛情は單に夫婦間計りでなく、時には二三十尺に達する體長の仔鯨を仲に夾んで、夫婦の兩鯨が兩方から、あの大きな立羽たっぱを片方づゝ出して、其上に仔鯨を乗せて一家仲よく游いで居るのを見ると、どうしても射つ氣はせず見逃がす事がよくあるとの事である（勿論國際協定はかゝる場合、子連れの牝鯨を獲つてはいけなと規定して居が……）

坐頭鯨は克鯨と共にどちらかといへばいかもの食ひで、海鼠なまこを好んで食ふといふ。一寸磊流れたやつだといふ氣がする。

鯨といふのも日本の沿岸捕鯨としては馬鹿にならない種類に屬する。この名稱の起原はこの種の鯨が好餌とするものは、即ち鯨の好餌であつて共にアミ、即ち小蝦である。それから鯨といふ名稱が起つたといふ。そこで妙な錯覺が起るのである。即ち鯨と鯨とは共存共

榮の仲であるか？、或は互ひに相喰む仇同志であるか？と

この二つのものが仲が善いか悪いか知らないが、鯨捕りの漁夫と鯨の漁夫とは、何時の世でも、又何處の世界でも、宿敵關係にあるのは面白い。鯨とりの漁夫からいへせると、鯨のあるところ必ず鯨の大群がある。これを換言すれば鯨は鯨の先觸せんしゆくである。更にこれを換言すると、海上に見へる鯨の潮吹きが、そこには鯨が澤山居るぞといふ信號代りになる。その鯨を捕獲して了ふと鯨を捕る事が困難になる。捕鯨業者は俺たちの生業の妨害者だといふ事になる。

それで明治四十三年青森縣鯨の鯨漁夫が、處の捕鯨事業所（東洋捕鯨會社）を閉鎖してくれといふ事を、縣廳にも出願し、會社にも交渉した。尤も彼等の閉鎖陳情理由には、以上の外に事業場から流れ出る解剖した鯨の血が、生洲いけすに飼つてある鰹釣りの鯨を皆弊死さすといふ苦情もあつた。ところが縣では理由なしといふ事でこれを却下し、會社も又拒絶したので遂とうに暴動化し、多數の漁夫は獲物とらをもつて捕鯨會社の事業場へ亂入してきた。捕鯨會

社の方でも正當防衛だと計りに、例の解剖刀を振りまはして、是具に渡り合ふといふ、大亂戦になり、「鯨」の方も二三人重傷をうけて後日死んだものが出来たが「鯨」の方も切れ味すごい解剖刀の冴へで、三人一度に薙ぎ倒される（解剖刀の一振りですら最初の一人は兩脚を切りとられ、次のものはスバリと胴切りになり、餘勢餘つて三人目の胸に切り込んで、三人とも即死）といふ大騒動が惹起した事がある。

これとよく似たツラブルが一八八八年ごろ諾威にも起つた。この場合は鯨の代りに鯨（にんじん）であつたが、鯨と鯨の關係は、正に鯨と鯨の關係に於て見られると同じく、鯨漁業者は諾威沿岸に於て捕鯨業を禁止してくれといふのであつた。その結果は日本と正に反對であつて、諾威政府は鯨漁業者の肩をもち、捕鯨業者は沿岸からアイスランドやフアロー島沖に追はれて了つた。

最後に人間の利用にはならないが、鯨の一種（有嘴鯨）である鯨（しんじん）の事を一寸かいて見る。鯨は南氷洋では一名「さかまた鯨」とも「かみそり鯨」とも稱せられ、その勇猛なる性質

は、氷をつき破つたり、端艇を襲つたりしてスコット大佐、シヤツクルトン中尉の探險隊員を大に脅かして居る。

鯨は兩顎に二十四本づゝ四十八本の鋭い歯を有つて居る。そして體長は三十尺に達し、その脊鰭は大きく一間もある。兩顎に歯があるので餌も蝦や烏賊などでなく、鮑を常食として居る。

鯨と鯨の喧嘩はよく人口に膾炙して居るが、それを實見した人は少ない。大西廉作君は捕鯨船の上からこれを見たさうであるが、一疋と一疋では鯨は鯨の敵ではない。しかし鯨は時々友を呼び、數頭相呼應して鯨を取り巻くと鯨はやられるらしい。大西君は北海道の國後水道から樺提島の内保に至るまで前後實に十時間、四十裡に亘る大喧嘩を追尾しつゝ見物したそうであるが、鯨は交るゝ鯨に飛びついては、先づ腹部の敵の肉を喰ひちぎつては棄て、とう／＼終ひにはハア／＼いふ鯨が舌を出すところを、それに喰ひついて止めをさしたといふ事である。

鯨の牙は婦人が安産するときとか、危難を避ける爲めとかいふ場合に、呪禁まじないに用いて効ありといはれて居り、或は解毒劑として利目があるといふ事である。

鯨を解剖してゆくと、よく胎兒が出てくる事がある。現に今次の出漁で、圖南丸で牝の坐頭鯨を解剖して居ると子宮から二尺位の可愛い胎兒が出てきた。ちやんと眼もあり、立羽も尾羽もあり、一通り立派に鯨の恰好を備へて居る。それは多分受胎後約二ヶ月ぐらひの胎兒なるべく、其後毎月二尺位ひづゝ成長し、十二ヶ月経つて分娩するときは、約二十尺乃至三十尺となる。そして出生後一年目の仔鯨は體長約四十尺（但し白長鬚の場合）となり、二年後には六十尺に達し、三年後には一人前成鯨（八十尺から九十尺）となる。

鯨は毎年妊娠するといふ説もあるが、分娩と妊娠との間には哺乳時期があるので、事實分娩は隔年ごとであると推定する事が正しいやうである。尙鯨はどの種類でも牡は牝よりも平均二三尺短かく従つて體重も軽い。

鯨の壽命は、即ち自然死は何年であるか？これは今後捕鯨事業の經營に關し、極めて重要

なる影響を與ふる問題であるが、誰も確定的の推測を與ふるものがない。たゞ唯一の材料ともいふべきものは、牝鯨を解剖しその子宮の状態を研究して、其迄に何回妊娠したかを調査することと、英船ウイリアム・スコロスベリー號（デイゼル機關を有する總噸數約六百噸の船）及び同じく英船第二デイスカパリー號（大體スコロスベリーと同型）の二船（シヨルダールガンにより、年號と番號を記した銀の調査銘をうち込み、鯨の年齢とか、回游性其他の習性を調査して歩くもので、今日までに既に約四千本をうち込み居る由）の報告、並びにこの調査銘をうちこまれた鯨を捕獲せる捕鯨船の報告によれば、鯨の天壽を二十年と算定するは尙早の感あり、少なくとも四五十年は生きうるものであるといふのが妥當らしい。

それは海の鯨と並んで今日陸上に於ける最大動物の長鼻類について考へて見ても、二十年の壽命は餘りにも短かすぎると斷定しなくてはいけない。

又種々の調査により、前述せるごとく鯨には種々の病氣、しかも人間並みの（といふ形容も可笑しいが）内臓疾患を有つて居るが、老衰死といふものはなさうである、結局何かの

病気で倒れるのであるが、病死するまでは何十年でも發育し、體長も體重も大きくなる一方だと信ぜられて居る。

鯨が肺結核で倒れるといふのも可笑しいと思つたところ、昭和四年對州沖と、昭和九年擇捉島單冠で獲つた（東洋捕鯨會社の捕鯨船が）鯨を解剖して見たところ、一方の肺は上葉も中葉も下葉もすつかり石灰瘻で固まつて、肺としての機能を停止して居つた事實がある。

捕獲した鯨を始めて見たものは、こんな小さなものかとか、なあーんだこんな處にあるのかと、ちよつと驚くのは其眼と耳である。

何となれば、それは他の動物と比較して、普通あると想像する處よりもすつと後方に位して居り、しかもあの巨大なるづう體に似合はない、本當に可愛らしい程小さな眼が、飛んでもないところについて居るからである。耳に至つてはそれより更に後方にある。昔は相當のものがあつたやうであるが、今はその時を紀念して、痕跡だけ残つて居りますといはん計りについて居る。これが鯨の耳だと説明されないと誰でも見落してしまふ位に小さく、二吋位

ひの小さな皺が、創あとのやうなものがあるのが耳だといふのである。勿論耳朵や耳殻などはない。

捕獲した鯨が眼をつぶらずに開いて居ると、すぐ次の漁があるといつて、捕鯨船の連中は御幣をかつぐのであるが、一番銚をうち、それで引きよせておいて二番銚をうち、さて尾羽チェインで、尾羽を船首のブルワークに縛りつけ、母船に曳いて歸るのである。しかしその巨體が沈まないやうに管で壓搾空氣を入れるのであるが、時によるとまだ往生し切れないやつが、いきなりバタ／＼とあの反撥力の強い尾羽を振り動かして、斷末魔の抵抗を示す事がある。これが爲めに時々不測の災難が起る事がある。現に今年も一月五日に第三昭南丸の武隈といふ見習運轉士が、ちよつとこの尾羽にふれたと思つたその瞬間に、彼は甲板に叩き伏せられて、頭腦と心臓とが同時に破裂して即死した椿事が出来た。この人は昨年九月出帆直前に結婚した計りの、廿七才の青年だとの事である。誠に氣の毒な事である。こんな事が起ると、そら鯨の怨靈だなどと、捕鯨船の連中は一度に氣を滅入らせて了ふ。この壓搾空氣

を入れるといふ事は瀕死の鯨にとって随分苦しいと見え、あの小さな眼を白黒とグル／＼廻すといふ事である。おいあの眼は砲手を睨んでおるぞと、誰かが砲手を脅かすと、流石にいゝ氣 ちはしなとい見え、馬鹿いへ俺を恨んでりやせんわい、あれは痛む身體をグ／＼鉛網で捕鯨船にひきよせた、揚貨機^{ウインチ}使ひの機關長を恨んでる目附きだわいと、砲手は鯨の鼻を機關長のところへ廻す。機關長はさうじゃない、壓搾空氣を入れた水夫が一番恨まれるぞと、ぐる／＼と鹽廻しに廻すあたり、正直で、氣の好い捕鯨船乗り氣質を露骨に示して面白い。さて鯨の耳である。それは昔あつた耳殼の痕跡だけが外部にあるだけであるから、聴覺は水の傳ふる音波によるものでなく、所謂「骨傳導」によつて、波のさわぐ音、仲間の近づく音、捕鯨船の追つてくる事などを聞き分けるらしい。鯨の場合聴覺神經の末梢は上顎のところ／＼に出て居る一二寸ばかりの粗毛に連つて居り、音はそれから聴覺の中樞部である耳石の中の何とかいふ液體に導かれて來るといふのである。

因にこの耳石の中の液體といふやつが、聴覺神經の中樞部であると同時に、身體を常に平衡

に保つやうに、即ち身體に動搖や傾斜に對して常にバランスをとるやうに、運動神經に命令を下す役目をも司るのである。人間が酔ふといふ生理的現象は、身體のバランスをとるやうに命令を下すこの耳石の神經が餘りに鋭敏であるので、多分に腦髓を刺激するからである。醫學者は定義を下して居る。ところが船乗はこの神經が免疫になつて居る。即ち馬鹿になつて居るから、酔はないのだといふ。さういふ事になると船酔をするものは神經が鋭敏であり船酔をしないやつは神經が鈍くなつて居り、馬鹿になつて居るといつてもよい譯である。

捕鯨船から曳行してきた鯨を母船の船尾につないでおくのを見ると、時々鯨の口のあたりに直徑一間位の大きな球が浮んで居る事がある。これが鯨の舌で、體内に注入した壓搾空氣が、細胞や纖維を通つて舌に行き、爲めに體外に出るのである。壓搾空氣の爲め體外に出るものは舌計りでなく、牡の生殖器、大腸などもあるが、茲ではその詳細を記述する事を省略する。

水中を游泳して居る鯨の體温は、勿論人間よりは高く、長鬚や白長鬚等の有鬚鯨に於ては、

約攝氏の三十八度より三十九度、抹香に於ては三十九度より四十度といふ事である。之が捕獲された後は一二度位ひづゝ低下する事になるが、壓搾空気を注入すると体内に瓦斯が発生して、却つて一二度上昇するといふ事である。

鯨は風に向つて泳ぐといふ事が知られて居る外に、未だ科學的に氣象の變化との相關々係が研究されて居らない。しかも大概の動物は、人間よりも早く氣象の變化を知る本能をもつて居るのであるから、鯨にも風向や潮流の變化、氷塊の接近とか、吹雪や濃霧の發生などに對して、これを逸早く前知する本能があるに相違ない。これを研究したならば、鯨群の集散によつて天候の變化を豫知しうべく、或は其逆に天候の變化を豫知しうる事によつて、漁場に於ける鯨の異動を豫想しうるのである。

現に鯨には回游性がある事が大體に於て確證されて居り（第十二昭南丸の小野砲手の話によると、樺太亞庭灣で、毎年或るきまつた月になると、霧のなかなどで聞き憶へのある鯨の潮吹き音が聞へるとの事である。其の音を聞くと、あゝあの「オルガン鯨」がまた來て居

るよなどと、捕鯨船の乗組員達は話し合ふとの事である。この鯨は先年ドンガラをその鼻さきに喰つてから、奇妙に潮吹きるときフュー〜とオルガンのやうな音を出すといふのである。これは即ち同じ鯨はきつと同じ漁場に歸つてくる事を立證する一例であるといふのである。船を仲間の鯨と間ちがへて傍によつて來る「船附鯨」、海豚などと一緒に泳いで居る。「海豚つきの鯨」などは捕獲し易いといつたやうな事から考へても、もつところいつた方面から、鯨と外部の環境について考究検討する必要があるだらうと思ふ。

荒涼たる南極圏又は南氷洋に於て、捕鯨従業者又は探險者等を、その無聊と、神經衰弱と兇暴發作から救ふところの唯一のユーモリストはペンギン鳥である。あのヨチ／＼と、悠揚迫らず、大人顔して、すまして歩いて居る燕尾服姿を見ると、どんな疝癩もち、どんな短氣ものでも、思はず吹き出してしまふ。しかも彼等は音楽を好み、人なつこい善良なる紳士淑女である。何とほゝえまじき動物ではないか！ペンギンにもいろ／＼種類があつて、帝王ペンギン、國王ペンギン等をはじめ、アデリー、ゲンツィー、マカロニ、リンジド等、澤山の種類がある。

ペンギン鳥の話

シヤックルトンの探險隊とペンギン鳥とはいろ／＼の面白い交渉を残して居る。彼等が捕へて飼つて居いた二疋の帝王ペンギンを放してやると、隊員の方に向つて、人間のやうに三度御辭儀をして水の中へは入つていつたとか、バンジョウで、イツツア、ロングウエイ、チイペラリーをやつて居ると、澤山のペンギン鳥が集まつてきて、いかにも分つたやうな、また感に堪へたといつたやうな顔をして、何時までもすまして聞いて居つたとか、一九一五年シヤックルトンの乗船エンジュランス號が氷塊にとり圍まれて、ついにメキ／＼と締め潰されたとき、八疋の帝王ペンギンが氷の裂け目から上つてきて、船の方へむいていかにも悲しげに、悼歌のやうな聲を出して啼いたとか、いろ／＼の話がある。

我が白瀬探險隊員も、一九一二年一月大隈灣に上陸したとき、ペンギン鳥の迎接をうけておる。その記事を見ると「丈四尺五寸もある帝王ペンギンが六羽まで居た。隊員が近づいても、少しも恐るゝ様子が無い。試みにその一羽に拳骨を見舞つて見ると、人間が撲つたとは心附かず、隣のペンギンがつついたものと思つたであらう。その長い嘴で隣に居るペンギン

をつゝいた。するとそれが又隣のペンギンをつゝいた。かうして最後の六羽目に至るまで、順次に一つづつ、つき合つた。隊員は思はずふき出した」とかいて居る。人間の無禮と粗野思ふべし。ペンギンの無邪氣と純情知るべし。ところがペンギンはきつと「おい亂暴なやつがきたぜ、お互ひに氣をつけろよ」仲間同志が注意しあつたことであらう。「思はず吹き出した」隊員の方が、却つて心中ペンギンに笑はれて居つたかも知れない。

本船の往航は、十二月十六日午前三時ロンボック海峡通過後、廿七日圖南丸假泊地に到着するまで、ずつと時化つゞきであつた。即ちロンボックを南に出て一日計りすると、すぐ相當強い南の濠洲沿岸風が長濤を伴なつて吹いてきた。こいつが「咆哮緯度」には入るまで吹きつゞけに吹き、そしてバトンを南緯四十五度位のところで、後者にリレーしたものである。ところが偏西風のやつどう勘違へしたのか、それともリレーの責任を感じすぎたのか、四十度線どころか五十度線以南まで吹いて吹いて吹き捲つたから、乗組員は「こりや約束がちがふぞ」とか、乗組員やお客のうちに精進の悪いのが居るとか、日本を出るときに何か悪い事を

したものがあるとか、平素は笑談話ですむのが、この航海はいささか真剣な顔で、食事時のサルーンやメスルームを賑はしたものである。

「もう澤山、ローアリング・フーチスの威力は充分たんのう、いたしました」とい、たい位ひ吹き捲つた偏西風のやつ、有終の美をなすべきだと、妙なところに力瘤を入れて、今度は六十度少し前から、南氷洋の南東風に又々バトンをリレーしたものである。こういつた具合で、本船はずーつと吹きつゞけられた。

だから廿七日圖南丸の假泊地に辿りついたときは、みんなやれ／＼といふ氣持ちになつたところへ、こゝ數年間南氷洋ではこんなよい天氣はない（聞いて見ると本船のつくまで一週間といふものは南氷洋も強風につゞ強風、吹雪に次ぐに濃霧といつた具合で、好天氣など薬にしたくもなかつたとの事）太陽は廿七日から正月二日まで、連日廿一時間位づゝ頭上に燦然と輝くといふ譯であつたから、嚴島丸は忽ち「陽光持參者」精進のよいもの揃ひといふ事になつて了つた。

しかも廿七日圖南丸に横附けしてみると、圖南丸の半漕さきには縦深五漕、横巾十漕位の大浮氷原が、輝々たる南氷洋の陽光を眩しくも照り返して、きら／＼と浮いて居る。望遠鏡で見ると無数のペンギン鳥（アデレイ種）や海豹（北海道語でとつかり）が晝寝をして居るらしい。ペンギン狩りに行かふといふ機關長の驥尾に附して、圖南丸附屬の川崎船で行つてみる。

潮流の關係で流氷群が珊瑚礁のやうに大きな圓形をつくつて、その中の海はちやうど鹹湖のやうに波もたゞず、風濤を迸ぎつて恰好の港灣乃至錨泊地の役目をなして居る。走つて居る航海者にとつて物騒千萬なバツクアイスが、風強く浪高いときには、皮肉にも避難港の役を承はり、母船でも捕鯨船でもその蔭に假泊さしてくれるのである。

世の中には一から十までの悪人はない代りに、一から十までの善人もないといふが、バツク・アイス一つ見てもその眞理は合點出来る——などと妙な事を連想して居るうちに、「おつ居るぞ」といふ緊張した川崎船の船頭の聲である、成程五六百米前方の小さな流氷の上に甲

蝶を干して晝寝をして居るのはとつかり君である。川崎船が咫尺に近づいても平氣なものである。丸太棒をもつて飛び上つていつた二三人のものに忽ち叩き伏せられてしまった。鼻から赤い血を出し、ギヤーツとものすごい聲を出して、鋭い牙をむいて最後の抵抗をする身振をしたが、自由の利かない氷上の事とて勝負にはならない。六尺近い三四十貫の奴である。こういった残酷な修羅場が三度現出された。流石にいやな氣がする。よせばよいのと思ふ。ところが聞いてみると、日本を離れて六千裡、見るものは氷と海だけである。朝から晩までといたいだが、朝から朝まで甲板は鯨の解剖で血の海である。娯樂とか興味とかいつたものは一つもない。勿論異性の慰籍などは考へるだけ滑稽である。心理は殺伐になり、生理は變態になるのは當然である。であるからこの危険なる心的動向をちよつと傍にそらす事は、或る意味に於て必要であり、とつかりを撲殺したり、ペンギンを生けどりにするのもさういつた方面の精神緩和になるんだと同行の機關長は説明したが、今でも僕は分つたやうな分らないやうな心持ちである。

初めから目指してきたペンギンはどうも見當らない。歸路についたとき、とう／＼氷の上に二匹のペンギンがチヨコナンと並んで立つて居るのをみつけた。それつと計りで船を近づけると、水の中へ潜つて逃げて了つた。落膽して見ていると、又ノコ／＼と次の氷の上に這ひ上つて居る。こういった事が二三度くり返されて、とう／＼細い網でつくつた網の中に捕虜になつて了つた。

最初小さい方を捕へたところ、是が雌であつて、少し大きい雄の方はそれを心配して逃げないので是も難なくつかまへて了つた。どうも夫婦ものらしい。川崎船の底の方のストワーに入れると、二つとも目をみはり羽を廣げてキヨロ／＼して居る。雌の方は例の燕尾服だけであるが、雄の方は其外に黒い蝶々の襟飾をつけてすまして居る。頸の周圍に黒い環があるのである。ペンギンの世界でも雄の方が磊流者だと見へる。

本船に連れてきて船長バスに海水を注入して飼つて居る。はじめは鯨肉や魚肉を食べさせるのに、ギヤ／＼さわぐやつをつかまへて、口を割つて腹へ落し込んでやるので大さわぎ

だつたが、このごろでは箸で肉片を挟んでやると、口を開けてバクリと食ふまでに慣れたやうである。船長はマスコットのやうに可愛がつて居るが、赤道を越すまでもつかもたないか、こゝが難所である。しかし船長の飼育効を奏し、とう／＼無事赤道を通過して日本にもつてくる事に成功したが、その成功の原因としては、サニタリーボンブで絶へず鹽水をバスの中に入れ、彼等をして常に游泳せしめた事と、新鮮なる鯨肉を食餌として與へた事を挙げなければならぬ。

ペンギンについてはいろ／＼話がある。捕鯨船などが彼等の乗つて居る氷塊の近傍を通ると機關の音で海中に潜りかけるとき、ブーツと汽笛を鳴らすと、何と思ふのか一齊に足踏みをしてその儘氷上にとゞまるといふ事である。そのときの彼等の心理こそ聞きものである。

捕獲したペンギンを解剖して見ると、よく胃の腑の中から小さいのは小豆大、大きなのは隠元豆大の小石が出て来る事がある。僕も第十二昭南丸の連中から紀念として貰つてきたが赤味を帯びた火山岩のかけらである。何故ペンギンの胃の中からこんな石が出てくるか？と

いふ説明に二通りの推定がある。

一つの意見としては南極大陸又はバレーニール群島、スコット島など南氷洋の島にある氷河から海中に迂り出た氷塊が、永いこと海上に漂浪して居ると、海水と空氣の温度の差で水面下の方が早く溶けて、水上水下の比重のバランスがとれなくなり顛倒したとき、この氷塊の前身氷河が陸からもつてきた小石が水面上にあるといふのである。南氷洋は三月ごろ段々夜が長くなり、六、七、八の三ヶ月位は常闇の世界である。だから餌を求むるペンギンがこの小石を間違へて呑みこむといふのである。

第二の意見としてはペンギン鳥は何處からか小石を集めてきて、大陸や島や或は大氷塊の上に巢を作り、これに一年必ず二つの卵を生むのであるが、この巢を作る小石がなか／＼手には入らぬので、無性で横着なペンギンは、自分がさがして来る代りにお隣りの巢の小石を失敬に行くのである。ちやうどこの頃流行の「隣組」の逆に行くのである。血の出るやうな苦勞をして集めてきたやつを、さう簡単に盗まれてたまるものかと計り、こゝに造巢用小石

争奪の攻防戦がはじまる。とつたりとり返したりし居るうち、狼狽て、若干の小石は胃の中に這入つて了ふのだといふのである。

何れにせよこれによつてペンギンの習性が分ると同時に、ペンギンの胃の腑を通じて南極及びその周囲の大陸の地質が研究出来るといふ面白い話である。

尙この話については、前出せる調査船、第二デイスカバリー號の乗組員の調査報告は詳細を極めて居る。

ヤング島をみる

南緯六十六度十五分から六十七度二十四分、東經百六十二度二十分から、百六十五度二十分の間はバレンニー群島といふがある。ヤング島はその最北及び最西の一島である。

これ等の群島はヤング、ロー、ボラデイル、バックル、スタージの五島より成り、一八三九年英探險家バレンニー（エリザ・スコット號）によつて発見されたものであり、彼は自分の後援者エンダービー・ブラザース商會の組合員の名をとつて五島に命名したといふ。

この群島は其附近にあるスコット島と並んで、南極探險船及び普通の南氷洋航海船からも容易に望見し得らるゝものである。本船も横附作業の間に於て、船艙掃除中探鯨を兼ねてこ

のヤング島見物に出かけた。

本船は一月三日午後四時半ヤング島北西角を五哩に見る場所まで近づき、約三十分船をストップして島の様子を視察したが、其迄は申し分のない好天気であつたのであるが、この群島に近づくに従ひ中天高く密雲が出てきて頂高三六五八米（休火山）と海圖にかいてある最高峰は勿論の事、東西二十哩南北十二哩（周廻約五十哩）の全島は、密雲と濃霧と深雪に包まれて僅かに前面二三哩ばかり、高さ二三百尺ぐらひの島の岩肌が龜裂や皺壁を示して、雪の間から黒く露出して居ると、海中に沈り入つて居る一つの大きな氷河が見えるだけであつた。従つて全體の感じは何となく凄味を帯びた冷めたさで、近より難い印象を與へるのである。後で母船の乗組員に聞いて見ても、この島の全景は愚か、山頂を見たものはないとの事である。しかしそれでも、氷塊と吹雪と濃霧と青い海だけしか見て居らない我々にとつては、土で出来て居る島を見たといふところに、何かしら大きな見物をしたやうな慰藉を感じたのである。

捕鯨の歴史

鯨の歴史は人類の歴史と俱に始まる。否それよりもつと古く、神代傳説の時代に遡るといつてよろしい。即ち日本書紀によると、伊佐那諾、伊佐那冊の兩尊が大八洲を造られたと傳へらるゝとき、兩尊の御會話のうちにいさな又いさなを（勇魚）の言葉が出てくる。

勇魚とは鯨のことであり、古代萬葉調の和歌には、「海」又は「濱」の枕言葉にいさなとかいさなをといふ言葉が度々出てくる。いさなとりとは即ち捕鯨の事である。大正の末期から昭和の初期にかけて捕鯨に關係あつた會社に、伊佐那商會と命名したものがあつたが、その名稱の起原は茲から出て居る。

神武天皇御東遷の御時も鯨に關する面白い御話が出てくる。即ちいまの大和川尻に御上陸されやうとする時、隨行の何とかいふ二人の尊の間に軍略について爭論が起つた。この時、天皇がよろしい、この議論に勝つたものにはいさな(鯨、即ち大きな魚の意)を食はするが、負けたものにはいさなご(鯛の子、即ち小さな魚の意)を食はするぞと宣はせらるゝ條がある。

我が國に於ける捕鯨の濫觸は鎌倉時代の初期に於て、鯨を「突取法」といふ方法で捕獲したと傳へらるゝのに始まる。

突取法の内容については詳細にこれを叙述した文献に貧しいが、後世の手鋸による捕獲方法と、「鼻通し」と稱する捕獲方法を混用したものらしい。勿論この當時の捕鯨業の對象鯨種は、沿岸近く游泳し、時には灣内又は港内には入りこんで来る、そしてその態度たるや悠々緩々として、速力も遅い背美鯨や坐頭鯨であつた事は事實である。

鯨が浦や灣についたとみると、傳馬船程度の小舟に、各自手鋸を持つた漁夫がうち乗り

うち乗り、エイ／＼聲で游泳中の鯨のそば迄乗りつけ、潮を吹く爲めに鯨が水の上に姿を現はすと、勇敢にも鯨體の上に飛び乗り、手にした鋸を心臓部其他の急所にグサとつき通すのである。これを交る／＼何度もくり返して、鯨が弱つたところを見すまして鯨體を磯近くへひきよせるといふのであつたらしい。

「鼻通し」といふやつは更に勇敢であつて、「投げ網」といふ一種の網を何枚も／＼鯨の頭や尾羽に冠せて身體の自由を失はせた後、鋭利な庖丁とロープを持つた息の強い潜りの上手な漁夫が、素裸で海の中へ飛びこんでいつて鼻の下のところを庖丁でつき通し、出來た穴へロープを通し(これは多分牛の鼻へ網を通すことから着想したのであらう)その網を引つ張つて磯へつれてくるといふのである。こうなるとまるで海中で鯨と鬼子つこをやるやうなもので、勇ましなどいふ計りなしとは此の事である。この「鼻通し」に一番通し、二番通し、三番通しとだん／＼と役目がきまつて居り、一番最初に鼻へロープを通したものは、捕鯨收穫總高の四分の一の歩合を貰つたといふ事である。勿論かういふ荒仕事であるから、鯨の尾

羽で叩かれたり、鯨に抱きこまれたりして、この原始的捕鯨作業の過程に於ては大勢の犠牲者を出したであろうことは想像に餘りがある。

この「投げ網」といふのは、わざと藁や縄などで造つた弱い網で、一つの網の目が五尺から一間ぐらひ、長さ五六間位のを澤山用意して、船の上から游泳中の鯨の頭を目がけて次から次ぎへと冠せたとの事であるが、この「投げ網」を發明した男の著想が面白い。彼は大きな蟬が、あの弱々しい蜘蛛の巣にひつかゝつて捕へらるゝのを見て、これを捕鯨に應用したもので、他の魚類の捕獲に使用する丈夫な強い麻網では却つて鯨に破られるが、繩網の方が、柔よく剛を制するだろうと考へついたといふ事である。この突取法は主として紀州、四國九州各地の沿岸で用ひられた。傳統は争はれないもので、今日の砲殺法の捕鯨時代になつても、母船上で活躍する解剖夫の出身別は、長崎縣を筆頭として、香川縣、和歌山縣、宮城縣、岩手縣、北海道といつた順序である。

この突取法の次ぎに來たものは網取法又は網代式と稱する捕鯨方法である。この方法は徳

川時代の延寶年間に、肥前大村に於て地形を利用し、即ち大村のやうに狭い灣口のあるところで小舟を澤山外灣に出して、舷を木や金でやかましく叩いたり、海中に石を放りこんだり、又はワイ／＼大聲を擧げて鯨を吃驚させて、これを内灣に追ひこみ（これは正に脊子の役をするのである）鯨が灣内には入つたと見ると、灣口に網を張り、灣内に於ては例の手鉈や投げ網を使つて鯨をしとめるといふ方法である。後年には手鉈の代りに肩銃ショウシヤウから小鉈をうち出すものを使つたといふ事である。この小鉈は鯨體に喰ひこんでから、搾裂する特別の仕掛けをしたものもあつたといふ事であるから、ちやうど現今の諾威式の捕鯨砲と同じ趣向である。

この方法は文政、天保、嘉永年間に最盛時に達し、全國に四十ヶ所の捕鯨場が出來たが、其後次第に衰微し、是に代つて今日の諾威式砲殺法が採用さるゝ事となつた。

砲殺法が天下を風靡するやうになつてから、漁場は漸く外洋に面する沿岸、たとへば紀州土佐、房總（九十九里濱）金華山、五島、北海道、大島、朝鮮等に移つてゆき、今日の内地

捕鯨の事業場の前身を爲すに至つた。

この當時即ち天保年間米國の捕鯨船（帆船及汽船）が我が國の近海、殊に小笠原群島方面に出沒するもの漸く多く、一時は三百隻に達した。ペルリの通商條約締結の申し入れも、その本當の目的は是等の捕鯨船に對し、炭水、食糧、其他の消耗品の補給を許せといふにあつたやうである。房州の關澤明清といふ人が、このアメリカ式捕鯨法を金華山沖で試みたが、遂に成功しなかつた。

アメリカの捕鯨船隊と略ぼ時を同じうして日本近海にやつてきたのは、ロシアの捕鯨船隊である。このロシアの捕鯨船隊の活躍に刺激され、是に對抗する爲めに明治三十二年山口縣人岡十郎氏によつて設立されたのが、日本最初の捕鯨會社である日本遠洋漁業株式會社である。

ロシアは明治二十四年以來浦鹽に捕鯨會社を設立し、韓國（今日の朝鮮）政府の特許を得て、朝鮮沿岸に捕鯨事業場を設置し、得たる鯨肉は長崎に輸送し、同所の營業所にてこれを

廣く日本内地に販賣し巨利を博した。當時のロシア捕鯨會社は母船にミハイル號を、捕鯨船に總噸數三百噸内外のニコラス、ギョルニー、オルガ、レツクス等を使用して居つた。是に對し日本遠洋漁業會社の方は、百二十二噸の長周丸外一隻を以て對抗するといふ貧弱ぶりであつたが、明治三十七年日露開戦するや、當時長崎に碇泊して居つたロシア捕鯨船隊は全部拿捕されロシア捕鯨業は全滅して了つた。ミハイル號の末路は、後に宮城縣、牡鹿郡、鮎川の捕鯨事業場で、鯨肉等の庫船に利用され美春丸と稱して居つた。是等のロシア捕鯨船隊の拂ひ下げを許可された日本遠洋漁業會社は、東洋捕鯨株式會社と改名したが、其他に十一の捕鯨會社が生れた。

この東洋捕鯨株式會社が他の同業會社と合併して、日本捕鯨株式會社となり、日本捕鯨株式會社は底曳網漁業を爲す水産會社と合併して共同漁業株式會社となり、共同漁業株式會社が鯨肉、魚類等の販賣を爲す關係會社と合併して今日の日本水産株式會社となつたものであるが、現在圖南丸、第二圖南丸、第三圖南丸の三母船、二十六隻の捕鯨船を所有して居る。

だから日本水産株式會社の捕鯨部の主力は、東洋捕鯨株式會社の多年の體驗と努力と信用とを繼承したものといつてよいのである。

日本の沿岸及近海に於ける捕鯨方法は、諾威式捕鯨砲を裝備せる捕鯨船キヤツチヤイが捕獲せる鯨を、日本内地及朝鮮各地に於ける事業場に曳行して來て、そこで引揚臺に引き揚げ、鯨皮を剥ぎ、鯨肉を取り、蒸釜（今日のオーブン・ポイラーの一種）にて鯨皮及鯨肉を蒸溜して鯨油を採取して居つたのである。

しかし段々南氷洋に於ける英諾二ヶ國の母船式捕鯨の進出振りを聞くに及び、日本に於ける捕鯨業も單に日本沿岸や朝鮮乃至臺灣近海に踞踏して、段々減少してゆく背美鯨や坐頭鯨を追ひ廻して居るべきでなく、英諾二ヶ國の如く捕鯨母船を所有して、遠く南氷洋に進出すべしとなす意見は、既に昭和六年東洋捕鯨株式會社時代に立案され、二十六七萬圓といふ、今から見ればたゞ見たやうな船價にて英船ベルタナ號を買ひ入れ、これを捕鯨母船に改造せんとせるところ、折も折有史以來の大豊漁を見たる（四萬頭、三百六十萬バレル）一九三〇

年一三〇年以後の反動期に當面し、世界第一の捕鯨國たる諾威ですら其翌年は遂にその出漁を中止するといふ大悲況の影響をうけ、鯨油價は世界的に大暴落をなし、日本捕鯨界も又その煽りをうけて、經營頗る困難を極め、昭和六、七、八の三年間は東洋捕鯨株式會社は無配を續行し、社長以下重役、支配人、高給社員等の月給を減俸して漸く數千圓の金を融通し、是を以て二年つゞけて給料据置を斷行し來れる現場作業員の爲めに月五十錢程度の昇給をなすといふ四苦八苦の難況切り抜けを策する窮狀であつたので、ベルタナ號の改造費など思ひもよらず、遂にこれを船體解散業者に三十一萬圓を以て賣却せざるを得なくなり、爲めに南氷洋進出は、昭和九年東洋捕鯨の後身日本捕鯨株式會社が、諾威より工船アンタークチック號（我が國最初の捕鯨母船にして今の圖南丸）を購入するまで遅延するに至つたのである。

圖南丸（總噸數九、八六六噸）の購入は、俄かに我國捕鯨業者の南氷洋進出の機運を促進し、昭和十一年に、從來トローラーに主力を注いで居つた林兼商店をして太平洋捕鯨株式會社なるものを創立せしむるに至り、日新丸（總噸數一六、七六四噸）並びに附屬キヤツチヤイ

史歴の鯨捕

十一隻が建造されたが、翌十二年には日本水産株式会社は第二圖南丸（總噸數一九、二六二噸）及び附屬キャッチャー九隻を、大洋捕鯨株式會社は第二日新丸（總噸數一七、五八三噸）及び附屬キャッチャー十隻を建造し、昭和十三年には、日本水産は第三圖南丸（總噸數一九、二〇九噸）及び附屬キャッチャー十隻を、又この年創立されたる極洋捕鯨株式會社は極洋丸（總噸數一七、五四八噸）及び附屬キャッチャー十隻を建造するに及び、我が國の南氷洋に進出する捕鯨船隊は實に母船六隻、その總噸數九四、八八三噸、捕鯨船總數五十七隻を算するに至つた（圖南丸附屬キャッチャーは七隻）。以上の外日本水産株式會社は鯨油仲積船として嚴島丸（總噸數一〇、〇〇六噸、四年前に建造）と、冷凍船厚生丸をもつて居る。

一方内地捕鯨に對しては、我が國政府（農商務省水産局）は鯨種保護、並びに不當の競争に基づく鯨肉鯨油の市價暴落を防止する爲め、明治四十二年十月三十一日省令を以て、捕鯨取締規則を制定し、捕鯨船數は各會社を通計して總數三十隻以内たるべしと限定し、昭和九年更に之を二十五隻に限定した（たゞしこの制限は日本沿岸の捕鯨に關するものであつて、

南氷洋捕鯨については何等の制限がないが、將來の方針として農林省は捕鯨船については何等の制限をしないつもりであるが、工船については是を約十隻以内に限定する腹らしいと傳へられる。

今左に内地捕鯨及び南氷洋捕鯨に従事して居る各捕鯨會社の資本金及び責任代表者の名前を列擧する。

	公稱資本	拂込額	責任者
日本水産株式會社	九千三百萬圓	六千七百四十八萬圓	田村 啓三
（近海及び南氷洋捕鯨）		（内近海捕鯨部所有捕鯨船十九隻を含む）	
大洋捕鯨株式會社	千五百萬圓	千二百五十萬圓	中部 幾次郎
（南氷洋捕鯨）			
極洋捕鯨株式會社	二千萬圓	五百萬圓	山地主佐太郎
（南氷洋捕鯨）			

株式會社林兼商店

千五百萬圓

千二百五十萬圓

中部 幾次郎

(近海捕鯨) (捕鯨船四隻)

鮎川捕鯨株式會社

三十萬圓

三十萬圓

山地主佐太郎

(近海捕鯨) (捕鯨船一隻)

遠洋捕鯨株式會社

三十萬圓

三十萬圓

後藤 喜三郎

(捕鯨船一隻)

大日本捕鯨株式會社

五千萬圓

千二百五十萬圓

樺山 資英

(南氷洋捕鯨) (設立中)

次に内地捕鯨の根據地(事業場)を列擧する。

日本水産株式會社(二十三ヶ所)

加熊別(千島列島、幌筵島) 紗那(同、擇捉島) 單冠(同上) 斜古丹(同、色丹島) 網走

(北海道網走町) 霧多布(北海道濱中) 鮫(青森縣) 釜石(岩手縣) 鮎川(宮城縣) 小笠

原(父島) 大島(和歌山縣) 外の浦(宮崎縣) 呼子(佐賀縣) 大河内(長崎縣) 壹岐(壹
岐島) 有川(對島) 久根津(鹿兒島縣大島) 札塔(樺太) 蔚山(朝鮮慶尙南道) 濟州島(同
上) 大黒山島(同全羅南道) 大青島(同黃海道) 大板埸(臺灣高雄州)
林兼商店(八ヶ所)

紗那(擇捉島) 網走(北海道) 厚岸(北海道) 釜石(岩手縣) 鮎川第一(宮城縣) 鮎川第

二(同上) 小笠原、太地(和歌山)

鮎川捕鯨株式會社(二ヶ所)

藥取(擇捉島) 鮎川(宮城縣)

遠洋捕鯨株式會社(四ヶ所)

紗那(擇捉島) 厚岸(北海道) 釜石(岩手縣) 鮎川(宮城縣)

次に内地捕鯨船の船名及び噸數並びに速力を示す。

日本水産株式會社(十九隻)

第一捕鯨丸（七九噸、九節）第三捕鯨丸（二〇二噸、九節）レックス丸（二〇九噸、九節、舊ロシア捕鯨船）曙丸（一一〇噸、一〇節）第二東郷丸（二一〇噸、八節）第一東郷丸（二〇七噸、一〇節）第一太平丸（二〇七噸、九節）漣丸（二〇七噸、九節）第二博運丸（二〇九噸、一〇節）第一博運丸（二〇八噸、一〇節）第六捕鯨丸（二二六噸、九節）昭和丸（一八八噸、一〇節）諏訪丸（一一二噸、九節）第一元日丸（二二二噸、一二節）色丹丸（二〇七噸、一〇節）第二昭和丸（一九五噸、一〇節）第五昭和丸（二二〇噸、一〇節）擇捉丸（二〇七噸、九節）第六昭和丸（二一七噸、九節）

林兼商店（四隻）

福志満丸（一一〇噸、九節）丸三丸（一〇三噸、一〇節）第一大東丸（二〇九噸、一〇節）長川丸（二七九噸、一〇節）

鮎川捕鯨株式會社（一隻）

鮎川丸（一八二噸、一一節）

遠洋捕鯨株式會社（一隻）

鯨洋丸（一九七噸、一〇節）

次ぎに鯨種別による沿岸捕鯨に關する最近十年間（昭和十年を以て終る）の統計を擧げて見ると左の如くである。

長鬚鯨、一年平均三二〇頭、平均價格一頭當り三千六百圓

白長鬚鯨、十九頭、平均價格六千圓

坐頭鯨、七十七頭、平均價格三千圓

鰻鯨、三百七十三頭、平均價格千六百五十圓

脊美鯨、五頭、平均價格四千二百圓

抹香鯨、七百六十五頭、平均價格千二百五十圓

總頭數、千五百六十六頭、總價格二百三十一萬二千圓

次ぎに南氷洋に出動する工船附屬捕鯨船の船名及び各船の總噸數を擧げやう。

(昭和十三年度調査)

日本水産株式会社(二十一隻)

第三昭和丸(二二二噸) 第七昭和丸(二六四噸) 第八昭和丸(同上) 第十昭和丸(同上)

第一昭南丸(三五〇噸)

——以上圖南丸附屬——

第一拓南丸(三四三噸) 第二拓南丸(同上) 第三拓南丸(同上) 第五拓南丸(同上) 第六

拓南丸(同上) 第七拓南丸(同上) 第八拓南丸(同上) 第十拓南丸(同上)

——以上第二圖南丸附屬——

第二昭南丸(三五〇噸) 第三昭南丸(同上) 第五昭南丸(同上) 第六昭南丸(三五六噸)

第七昭南丸(同上) 第八昭南丸(同上) 第十昭南丸(三五〇噸) 第十一昭南丸(同上)

——以上第三圖南丸附屬——

大洋捕鯨株式会社(二十隻)

玉丸(二六四噸) 第二玉丸(同上) 第三玉丸(二五七噸) 第五玉丸(同上) 第六玉丸(二七五噸) 第七玉丸(同上) 第八玉丸(二七九噸) 長川丸(同上) 第二利丸(二九九噸) 第三利丸(同上) 第二關丸(三六〇噸)

——以上日新丸附屬——

利丸(二九四噸) 第二利丸(同上) 第五利丸(二九九噸) 第六利丸(二九八噸) 第七利丸

(同上) 第八利丸(同上) 第十一玉丸(同上) 關丸(同上) 文丸(三六〇噸)

——以上第二日新丸附屬——

極洋捕鯨株式会社(九隻)

第一京丸(三四一噸) 第二京丸(同上) 第三京丸(同上) 第五京丸(同上) 第六京丸(同上) 第七京丸(同上) 第八京丸(同上) 第十京丸(同上) 第一京丸(三八一噸)

——以上極洋丸附屬——

最後に昭和九年度より同十二年に亘る三年間の我が日本船隊による南氷洋捕鯨成績を示せ

ば左の如し。

昭和九——十年

出漁船圖南丸(附屬捕鯨船三隻) 漁期約二ヶ月半

白長鬚、百二十五頭、長鬚、八十三頭、坐頭、四頭、計二百十三頭、油量約二千噸、賣價約四十七萬三千六百圓

昭和十——十一年

出漁船、圖南丸(附屬捕鯨船五隻) 漁期約四ヶ月

白長鬚 五百八十九頭、長鬚 百六十六頭、坐頭 九十四頭、計八百四十九頭、油量約一萬八百噸、賣價約三百六十六萬圓

昭和十一——十二年

出漁船、圖南丸(附屬捕鯨船五隻) 第二圖南丸(附屬捕鯨船八隻) 日新丸(附屬捕鯨船九隻) 第二日新丸(附屬捕鯨船九隻) 漁期約四ヶ月

年農林省發行の「捕鯨業」によつたものである)

最後に權頭船(権頭船)の事を紹介する。これは勿論内地捕鯨に従事する捕鯨船の一種で、主として紀州太地方面に於て權頭鯨(抹香鯨)(抹香鯨の一種で體長十五尺より廿五尺まで)やミンク(鯨)(鯨の一種)

この年度及び其後の年度に於ける賣却の發表なし。(尙以上各種の統計數字は、昭和十四

圖南丸、白長鬚 三百九十九頭、長鬚 三百六十頭、坐頭 八十九頭、計八百五十頭、油量約一萬噸

第二圖南丸、白長鬚 六百三十七頭、長鬚 千四十八頭、坐頭 百四十八頭、計千八百三十三頭、油量約二萬噸

日新丸、白長鬚 六百四十頭、長鬚 七百六十九頭、坐頭 百七十七頭、計千五百八十六頭、油量約一萬八千五百噸

第二日新丸、白長鬚 七百十八頭、長鬚 五百十八頭、坐頭 五十九頭、計千二百九十六頭、油量約一萬五千四百噸

一種で、體長二十五尺より三十尺までを捕るのに使用されて居る。この權頭船の變つて居るのは、捕鯨砲から一度に五本の銚をうち出すのであるが、勿論その銚たるや、普通の銚よりもはるかに小さく、しかもその銚網たるや、一つ一つの銚に三四尺位の銅がついて居つてその網が結局は一つの太い綱に釣り合はして居る。つまり一本の銚網から十頭の銚が分れて出て居る仕組みになつて居るのである。是は權頭鯨とか、ミンクとかいふやつは群泳して居るので、こういった特種の銚をうち出す大砲が發明されたものと思はる。一寸外國にはこういった捕鯨砲はないやうである。

歐米方面及び南氷洋方面の捕鯨史

歐米方面及び南氷洋に於ける捕鯨史は、兩極並びに南北兩氷洋の探險と互ひに交錯して、ちやうど糾^{もま}へる繩のごとき關係をもつて居る。

歐洲に於ける捕鯨史もなか／＼古く、紀元前古代バビロニア王朝時代の記録に鯨の事が出て居る。降つて紀元八百年時代北洋殊にフランダーズの沖、英國海峡、ビスケイ灣のバスター

等はよい漁場とされて居つたやうである。是等のところ／＼に今日に於ても鯨の見張塔や處理場の迹を見る事が出来る。

一一九七年英國政府は捕鯨業者に課税したといふ事であるから、相當の收入を擧げたものと思はる。一三七二年即ち十四世紀の末葉には捕鯨業はビスケイ灣からニューファウンドランド沖まで、即ち北大西洋の北部まで進出して居る。

十五世紀コロンブスがアメリカ大陸を發見してより、新大陸探險熱は頗みに旺盛となり、西廻りにて東洋に達せんとせるコロンブスの計畫と反對に、東廻りにて東洋に達せんとする計畫が英人間に興り、喜望峯を経て印度及び東洋に赴く航路は既にバスコ・ダガマ等の葡萄牙人に先鞭をつけられたので、北氷洋を迂回して日本及支那に航せんとする壯圖を懐いた一隊が、十六世紀の末葉になつて英國を出發したのであつた。

しかしこの壯圖は北極圏の氷山や其他の自然力に阻止されて遂に失敗に歸したが、彼等は思ひがけない副産物を得て英國に歸國した。それは北氷洋殊にスピッツベルゲン地方にすば

らしい鯨群が游泳して居るといふ報告であつた。

利に慧い英國民、殊に傳統的に海國男兒の矜持を持つて居る彼等として、この報告に何條手を束ねて居るべき！忽ち捕鯨熱は英國民の間に擡頭し、一六一〇年ムスコビー商會は現場調査の爲め捕鯨船二隻を派遣し、更に多數の捕鯨船を後發せしめた。

スピッツベルゲンに於ける英國捕鯨船の活躍及びその好成績はやがて、和、丁、佛等の諸國の捕鯨業者を刺激したが、殊に當時海上に覇を唱へて居つた和蘭は多數の捕鯨船と、これを護衛する爲めの軍艦を派遣した。

かくて其後暫らくの間、英和兩國間の捕鯨争覇戦がスピッツベルゲンに於て行はれたが、和蘭は漸く英國の壘を摩し、一六二三年にはスピッツベルゲンに家屋、處理場等の建設材料を運搬し、鯨體引上げ作業場並びに従業員の炊事場を設け、同地をスミレンブルグと和蘭流に命名したのであつた。

これにつれて丁抹や佛蘭西の捕鯨業も盛んになり、アムステルダム、ロッテルダム、ホー

ン、ミッドルスブルグ、フラツシング、エンギイゼン、ジルフト等の英、和、丁の諸港は捕鯨船の根據地となり。殷盛を極めた。その當時スミレンブルグに各國から集まる捕鯨船は一年に約一千隻に達したといふ事である。このスミレンブルグが後年北極探險隊の根據地になつたのも、兩者の間に宿縁淺からざるものあるを觀知せしめる。勿論この當時の捕鯨對象は脊美鯨、鯔鯨等の「磯鯨」であつて、捕鯨方法も砲殺法以前の日本の漁法と大體同じやうなものであつたらしい。

しかしこの好漁場スピッツベルゲンも、各國捕鯨船の競争による濫獲の爲め、鯨群のストックもなくなつたので、和蘭人は新漁場としてグリーンランド、アイスランド、ダビス海峡等に進出した。かくの如く十八世紀初葉まで、和蘭は大西洋の捕鯨業をリードして居つた。これに反し英國は和蘭の下風に屈し、年々和蘭より輸入する鯨油及び鯨鬚の爲めに多額の金を支拂つて居つた。これに發奮して英國内に自國捕鯨業の發展を圖るべしとする聲大に起り政府も自國捕鯨業を保護獎勵する意味に於て、一七二〇年には關稅又は課稅を免除し、捕鯨

船の建造には奨励金（一七四九年には噸當り四十志）を交附した。

かくて英和兩國をはじめ各國の捕鯨船は新漁場グリーンランド、アイスランドに蝟集したので、この新漁場も濫獲の爲め又々荒廢に歸し、この方面の捕鯨業は十八世紀に至つて遂に終熄した。

一方アメリカに於ては、捕鯨業は北大西洋岸に於て古くから行はれたが、その大成をなしたのは十八世紀の初期、ナンタケット島の捕鯨業者による抹香鯨の好漁場が発見されたのに始まる。

この方面の捕鯨業は抹香鯨が中心であつて、ナンタケット、ニューベッドフォード等が捕鯨船の根據地であつた。このアメリカの漁場は英、和兩國及び其他の歐洲各國の捕鯨船より見るときは新漁場であつたので、スピッツベルゲンからアイスランド、アイスランドからグリーンランドと次ぎ／＼に漁場を荒廢せしめた各國の捕鯨船はこの新漁場に集まり、又々濫獲が行はれ、北大西洋は遂に何處へ行つても鯨族のストックはなくなつて了つた。

茲に於て歐洲各國の捕鯨船はやむを得ず、その新漁場を南大西洋に求め、一つはケイプホルンを西に廻つて南太平洋に出で、遠く日本近海及びベーリング海峡にその觸手を延ばし、他は喜望峯を廻つて、マダガスガル島からジャバ、スマトラ方面に於て操業する事となり、かくて捕鯨船の帆影は全世界の海面を蔽ふに至つた。一八五〇年は此段階に於ける最盛期であつたが、捕鯨船の遠航の爲め、一漁期は場合によつては二年、三年を要する事すらあるに至つた。

しかしこの時代の捕鯨方法は上述せるごとく、原始的又は原始的のものに多少の改良を加へた程度のもので（捕鯨船は大體二百噸乃至四百噸の帆船であり、鯨群に出會ふと短艇を下して手鋸で突くか、又は肩銃ショウガン銃で小鋸をうち出す程度の方法）であつたので、其捕鯨対象は速力のおそい、しかも捕獲しても鯨體が水中に没しない、脊美鯨とか抹香鯨に限られて居つた。従つて鯨種に制限がある關係上、多數の捕鯨船に對し或る特定の鯨族はすぐ種切れといふ状態になつた。

しかもこの當時の捕獲物は主として燈火用としての鯨油及び細工用としての鯨鬚に限られて居り、今日のやうにマーガリンバター等材料とか、食用だとか、皮革及織物の材料だとか、ゼラチン、潤滑油、肥料、飼料、藥品等有ゆる用法に利用されるのではないのであるから、たとへばその當時発見された石油が、燈火用としても鯨油よりも遙かに良質であり、簡便であり、低廉である事が認識されるゝと、鯨油など一顧の價值がなくなり、その市價は暴落に暴落を見るに至り、捕鯨の収入では捕鯨船の建造費、その維持費、運賃費等をカバーする事が段々と困難になつてきた。

これは正に世界の捕鯨業にとつて全滅的危機であつた。處が窮すれば通ずで、一八六四年ノルウェー人スベンドフォインは、今日の捕鯨船による捕鯨法、即ち諾威式砲殺法を發明した。即ちこれは捕鯨船の船首に捕鯨砲（口径約四吋）を載せ、發射によつて銃を鯨體にうち込み、其銃について居る銃網によつて鯨體を捕鯨船に引きよせ、舷側に吊して根據地に曳行するといふ方法を考案したのであつた。これにより従來の方法によつては捕獲不能とされた白長鬚、

長鬚、坐頭等を捕へうる事となつた。

これにより一時衰滅に歸して居つた捕鯨業は又息を吹き返し、この方法による捕鯨事業は再び盛んになり、一八八六年には諾威だけで、十九の會社と三十五隻の捕鯨船を有するに至り、一時荒廢せる諾威沿岸、スベッツベルゲン、アイスランド、グリーンランド等の漁場は新しき捕鯨法による新漁場として華々しくカムバックしたものであつた。

ところが好事魔多し、この方法による捕鯨船の活躍に對し、諾威沿岸に於ける鯨漁業者は前述せる理由により猛烈に反對し、同國政府又その反對理由を承認したる爲め、諾威捕鯨船は遠くアイスランド、フアロー島沖に出漁した。

しかし北大西洋に於ては鯨族の回游性は小範圍にして捕鯨業の永續性少なき事を觀破せる彼等は、敢然として南半球に進出する事とした。そして彼等は最初の根據地をクイブ・ホルン沖、フオー克蘭島の南、サウス・ジョージア島に置いたのである。これ南氷洋に於ける捕鯨事業の鎬矢である。時に一九〇四年であつた。

尤もこれよりさき多くの南極探險家は南氷洋に鯨群の多い事を報告して居る。たとへば一八四七年ロス海の発見者ジエム・クラーク・ロスは、氷海に沿ふて夥だしい脊美鯨の大群のおる事を報告して居る。ロス海の一灣が「鯨灣」と命名された事に徴するも、當時の實狀が想像される。一八九四年——一八九五年度の探險家エッチ・ジエー・ブルの報告によると、彼の乗船アンタークチック號はロス海で脊美鯨を見なかつたが、白長鬚の大群の存在を確認して居る。又一八三九年バレニー群島を発見した探險家バレニーも、この群島の附近に鯨群の多い事を報告して居る。

一九〇一年から一九〇三年にかけて諾威探險家シー・エー・ラーセンは、アンタークチック號にて、サウス・ジョージア島及びサウス・シエツトランド島附近が捕鯨漁場として有望なる事を確認し、前述せるごとく一九〇四年サウス・ジョージア島グレートヴィケンに捕鯨根據地を作り、南氷洋の捕鯨事業に先鞭をつけた。

次で彼はフホークランド島、サウス・シエツトランド島、サウス・オークニー島等にもつ

ぎくに根據地をおいたが、是等の島々に鯨體の解剖其他の處理に必要な陸上作業場を設くる事は、是等の島々の領有を宣言して居る英國政府の反對に會つて、その計畫を放棄するのやむを得ざるに至つた。

茲に於て彼はロス海に進出し、その海岸に作業場を設けやうとしたが、英國政府は又もや、ロス海を含む南緯六十度以南、東經百六十度、西經百五十度間の土地領有を宣言せる爲め、彼は茲に苦心の結果公海に於て解剖、處理、採油等の操作を爲しうる捕鯨工船を考案するに至つた。是れ實に世界捕鯨界に與へた一大革命であつた。

何となれば捕鯨工船の生るゝ前は、捕鯨せる鯨體の解剖處理は陸上の作業場で爲すか、又は風波少なき入江乃至は内灣に於て、捕鯨船の舷側に於て解剖を爲し、剥ぎとつた鯨皮及び搾りとつた鯨油を捕鯨船に積み入るるの外途がなかつた。然るに前者は英國政府の反對に遇ひ、後者は操作の困難と捕鯨船の小さき爲め、所期の收穫を得られなかつたのである。

茲に於てラーセンは公海にても鯨體を解剖、處理、採油しうる工船をつくる事を決心し、

諾威スルンド・フィヨルドのフラメイス工場に託し、汽船アドミラルメを捕鯨工船に改造し、一九〇四年——一九〇五年に亘リスピッツベルゲン漁場に於てこれを試験せるところ、成績頗る良好であつたので、一九〇五年これを二隻の捕鯨船と共に、フホークランド及びサウス・シエツトランドのアドミラルチー灣に送り、工船による最初の捕獲物を満載して諾威に歸航するといふ意外の好成績を得たのであつた。

かくて此種の工船は逐年建造され、一九二八年——一九二九年度の出漁には、諾威だけでも工船二十四隻、(改造船を含む)捕鯨船八十五隻を南氷洋に送つて居る。

しかも初期の工船に於ける解剖作業は、今日の如く工船の甲板を解剖臺として使用せず、捕鯨船時代の遺風により、工船の舷側に於て大體の解剖處理を爲した。即ち解剖夫は鯨體の上に立つたり、又はボートの上から、最初脂肪層を大きな塊片に切り取り、頭部と尾部とを切り離したる後、始めて胴體を揚貨機にて工船上に捲き上げるといつた、今から比較すると極めて幼稚な方法であつた。従つてこの脂肪皮を剥ぎとる作業は相當困難を極め、多くの時

間を費し、六〇乃至七〇バレル(約十噸、長鬚一頭分)の油量を採取するに四日間を費した(今日は約四十分)茲に於て極力英國政府と交渉し、是以上は今後設置せぬといふ條件の下に、三ヶ所の作業場を陸上に設けたのであつた。

捕鯨工船の作業に第一の革命を齎したものは汙り口(スリツプウエイともスキツドウェイともいふ)を考案した事である。是は一九〇四年クリスチニアのマルヒ氏によつて考案されたものであるが、一九二四年まで實用に供せられず、工船ランシング號によつて始めてとりつけられ、爲めに成績頗る良好で、多大の能率を上げた。しかし始めの間は今日見るが如く船尾にあるのではなく、船首又は舷側に一ヶ所設けられたのである(「シー・エー・ラルセン號はその一例)鯨體はこの汙り口から揚貨機とワイヤロープで引き上げられたが、時々ワイヤロープが切れたり、鯨の尾羽がちぎれたりして工船上にひき上げる事が出来ず、みす／＼一萬圓位に相當する海の寶を放棄する事も珍らしくなかつた。茲に於て發明されたものがクローであつて、鯨の尾羽をしつかりと挟んで、極めて簡單にかつ確實に鯨體をスリツプ

史歴の鯨捕

ウェイを通じて甲板上に引き揚ぐる事となつたのである。

これは一九三二年に諾威に於て發明されたが、母船式捕鯨事業に於ける第二の革命といつてよろしい。

特に捕鯨工船として最初から立案建造された世界最初の捕鯨工船は、諾威のユスモス號であり、一九二九年に竣工した。全長五百七十呎、巾七十七呎、深さ五〇呎に達し、總噸數二萬二千噸、その巨大なるスリップウェイは、白長鬚二疋を同時に甲板上に引き揚げうるものであり、引き上げた鯨體から、剥ぎとつた脂肪皮は長さ四十呎、巾二十呎、厚さ十二吋から二十吋の大きさの板片に截斷し、一日樂に廿五頭を處理し、一五〇〇バレル(二百五十噸)の鯨油を採取しうる能力を持つて居るのである。今日此種の工船の最大收容鯨油は三百五十萬バレルより六百萬バレルの間である。

一九三七年——三八年度に於ける世界捕鯨國の工船數は、英國十隻(今日は十三隻) 諾威十一隻(今日は十四隻) 日本四隻(今日は六隻) 獨逸四隻(今日は五隻) 米國一隻(今日は

史歴の鯨捕

三隻) 巴奈馬一隻、計三十一隻である。其後アルゼンチン一隻、ソ聯一隻を所有するに至り、今日世界の捕鯨工船總數は四十五隻に達して居る。

母船式捕鯨業の最も發達して居るものは、勿論諾威であるが、英國も又是に劣らず、否むしろ、一九三〇年——三一年度の南氷洋に於ける大豊漁の反動期以後は、英國船隊の方が收獲高に於て諾威船隊の其を壓倒し、世界捕鯨界をリードして居る現狀である。今左に過去九年間(一九二八年——二九年度より一九三六年——三七年度までの)に於ける南氷洋、北氷洋、北太平洋、北太平洋及び日本に於ける捕獲頭數並びに全世界、英國、諾威、日本、北米合衆國、丁抹、獨逸、アルゼンチン、露西亞の諸國に於ける捕獲頭數を擧げてみる。

	南氷洋	北氷洋	アフリカ	北太平洋	日本
1928/29	20,341	1,159	3,362	1,241	1,463
1929/30	30,167	1,472	3,498	975	1,312
1930/31	40,201	703	823	—	1,147

史歴の鯨捕

1931/32	9,572	827	1,043	319	4,036			
1932/33	24,327	1,004	1,168	591	1,122			
1933/34	29,087	583	2,392	1,019	1,436			
1934/35	31,808	568	1,004	855	1,787			
1935/36	30,991	705	3,768	857	1,840			
1936/37	34,579	1,843	3,965	730	2,066			
全世界	英國	諾威	日本	北米	丁抹	獨逸	亞國	蘇聯
1928/29	27,896	8,280	14,996	1,463	1,107	178	—	1,592
(100%)	(29.5%)	(58.8%)	(5.2%)	(4.0%)	(0.6%)	(5.7%)	(3.7%)	(0.7%)
1929/30	37,674	12,204	21,609	1,312	655	258	—	1,336
(100%)	(32.4%)	(57.3%)	(3.5%)	(1.7%)	(0.7%)	(3.7%)	(3.7%)	(0.7%)
1930/31	42,874	13,019	25,952	1,147	536	1,046	—	1,174
(100%)	(30.4%)	(60.5%)	(2.7%)	(1.3%)	(2.4%)	(2.7%)	(2.7%)	(2.7%)
1931/32	12,797	9,765	797	1,036	319	30	—	850
(100%)	(76.3%)	(6.2%)	(8.1%)	(2.5%)	(0.2%)	(6.7%)	(6.7%)	(6.7%)

1932/33	28,668	12,940	12,644	1,122	382	128	—	996	203
(100%)	(45.1%)	(44.1%)	(3.9%)	(1.3%)	(0.5%)	(3.5%)	(0.7%)	(0.7%)	(0.7%)
1933/34	32,167	14,564	13,657	1,436	669	123	—	1,139	339
(100%)	(45.3%)	(42.4%)	(4.5%)	(2.1%)	(0.4%)	(3.5%)	(0.7%)	(3.5%)	(0.7%)
1934/35	39,254	17,476	16,939	2,000	583	117	—	809	487
(100%)	(44.5%)	(43.1%)	(5.1%)	(1.5%)	(0.3%)	(2.1%)	(1.2%)	(2.1%)	(1.2%)
1635/36	44,782	19,850	15,670	2,479	1,989	97	—	944	501
(100%)	(44.3%)	(35.0%)	(5.5%)	(4.5%)	(0.2%)	(2.1%)	(1.1%)	(2.1%)	(1.1%)
1936/37	51,256	21,331	15,943	4,025	3,659	1,022	920	1,014	418
(100%)	(41.6%)	(31.1%)	(7.9%)	(7.1%)	(2.0%)	(1.8%)	(2.0%)	(0.8%)	(0.8%)

右によつてみると一九三〇—三二年度の大豊漁とその翌年の反動期（諾威は出漁せず）及び其以後は英國が斷然諾威を抑へて居る事がはつきりと表に現はれて居る。尙日本が年々擡頭してゆくよろこばしい傾向と、アルゼンチンが馬鹿にならない事、アメリカも相當のものである事、獨逸が一九三六年——三七年に始めて南氷洋に出漁した事等が、はつきりと分る

史歴の鯨捕

のである。

次ぎに同年間に於ける世界各國の收穫鯨油量及び比率を示すと左の如くである。(單位バレル)

史歴の鯨捕

	全世界	英國	諸國	日本	北米	アルゼンチン
1928/29	1,886,082 (100%)	512,611 (27.2%)	1,210,235 (64.1%)	7,248 (0.4%)	36,120 (1.9%)	96,667 (5.1%)
1929/30	2,799,042 (100%)	858,797 (30.6%)	1,796,221 (64.2%)	?	29,437 (0.1%)	95,451 (3.4%)
1930/31	3,686,976 (100%)	1,131,231 (30.7%)	2,316,962 (62.8%)	16,274 (0.5%)	49,360 (1.3%)	88,154 (2.4%)
1931/32	915,842 (100%)	803,955 (87.8%)	28,590 (3.1%)	20,230 (2.2%)	14,350 (1.6%)	48,717 (5.3%)
1932/33	2,596,778 (100%)	1,180,526 (45.5%)	1,317,443 (50.7%)	21,698 (0.8%)	12,580 (0.5%)	54,583 (2.1%)
1933/34	2,573,155 (100%)	1,190,924 (46.3%)	1,253,694 (48.7%)	22,766 (0.9%)	24,800 (1.0%)	65,790 (2.5%)

1934/35	2,691,283 (100%)	1,288,544 (47.9%)	1,239,327 (46.0%)	42,133 (1.6%)	24,629 (0.9%)	5,3100 (2.0%)
1935/36	2,871,117 (100%)	1,238,668 (43.2%)	1,162,742 (40.5%)	74,289 (2.6%)	80,991 (2.8%)	75,192 (2.6%)
1936/37	3,210,671 (100%)	1,285,954 (40.0%)	1,191,772 (37.1%)	189,012 (5.9%)	150,433 (4.7%)	47,377 (1.5%)

これによつてみると、日本は頭數に於ては一九三〇年——三二年度より、固より英諾二ヶ國とは比較にならない少數であるが、それでも世界第三位を占めて居るに拘らず、鯨油量に於ては、北米合衆國又はアルゼンチンよりも下風に立ち、漸く一九三六年——三七年度に於て頭數も油量も共に世界第三位となつて居る。これは歐米各國が鯨體より油をとる事に全力を注いで居るに對し、日本は頭數に於て優りながら、油と同時に鯨肉、鯨鬚等の冷凍物、鹽藏物等をも採取せる事を示すものである。

史歴の鯨捕

史歴の鯨捕

次に全世界の捕獲頭数及鯨油量に對し、南氷洋の其がいかなる比率を示すかを見るに

	全 世 界	南氷洋 (頭数)	南氷洋 (油量)
1928/29	100%	72.9%	86.5%
1929/30	100%	80.1%	91.0%
1930/31	100%	93.8%	97.0%
1931/32	100%	74.8%	88.3%
1932/33	100%	84.9%	94.6%
1933/34	100%	81.1%	93.1%
1934/35	100%	80.0%	61.2%
1935/36	100%	69.2%	84.9%
1936/37	100%	67.5%	82.8%

この表によつてみても全世界の捕獲頭数に對する南氷洋に於ける捕獲頭数の比率よりも、

全世界の採取鯨油量に對する南氷洋の採取鯨油量の比率の方が高率を示して居る事は、南氷洋以外の漁場に於ては、鯨體を處理するに當り鯨油以外のものをも收穫するのに對し、南氷洋ではその收穫全力を鯨油第一主義において居る事を觀取する事が出来るのである。

尙白長鬚一頭當りの油量は平均一〇五バレル(十七噸半)である。

次に鯨種別による南氷洋に於ける捕獲頭数を擧げるならば、

	白 長 鬚	長 鬚	坐 頭	鯧	抹 香
1926/30	17,487	11,539	852	216	73
1930/31	29,410	10,017	576	145	51
1931/32	6,488	2,871	184	16	13
1932/33	18,891	5,168	159	2	107
1933/34	17,349	7,200	872	—	666
1934/35	16,500	12,500	1,965	260	577

史歴の鯨捕

史歴の鯨捕

次ぎに一九一八年より一九三七年に至る廿年間の歐洲に於ける鯨油市價を示す事にする。
(單位磅)

	最高	最低	最高	最低
1935/36	17,731	9,697	3,162	2
1936/37	14,304	14,381	4,477	490
1918	60/10/-	53/-/-	31/10/-	28/-/-
1919	77/-/-	77/10/-	29/10/-	25/-/-
1920	80/-/-	82/-/-	26/-/-	17/-/-
1921	47/-/-	27/-/-	15/-/-	10/-/-
1922	33/10/-	31/-/-	14/10/-	10/-/-
1923	34/-/-	32/-/-	15/10/-	10/-/-
1924	40/-/-	33/-/-	12/-/-	8/-/-

史歴の鯨捕

この表によつてみると、例の一九三〇年——三一年の南氷洋の大豊漁の反動として、鯨油のオーバー・ストックの爲め鯨價は一九三一年大暴落を爲し、その頽勢は一九三四年まで影響を及ぼして居る事がよく分るのである。
さて最後に世界各國の所有して居る捕鯨工船の主なるものの噸數及び捕鯨船の隻數を紹介する事にする。(一九三九年調)

英國、デルジエ・ヴィケン號(總噸數二〇、六三八噸) スベンド・フホイン號(一四、五九六噸) タフエルベルグ號(一三、六四〇噸) ニューセビラ號(一三、八〇〇噸) ヘクトリア號(一三、七九七噸) サウザウン・エンプレス號(一二、三九八噸) 其他七隻、
合計十三隻(總噸數一五五、〇〇一噸)

諾威、シー・エー・ラーセン號（一三、二四六噸）コスモス號（一七、八〇一噸）第二コスモス號（一六、九六六噸）サー・ジエイムス・クラーク・ロス號（一四、三六二噸）外十隻

合計十四隻（總噸數一五九、二八二噸）

因みに諾威は最近二十五隻に達したといふ事である。

日本、前出の通り、六隻（總噸數九四、八八三噸）

獨逸、ユニタス號（二一、八四五噸）バイキンゲン號（一四、五二六噸）ウォルター・ロ

ウ號（一五、〇〇〇噸）ジャン・ウエレン號（一一、七七六噸）外一隻計五隻（總噸數七

一、二八〇噸）

米國、ユリセス號（一〇、七八〇噸）外二隻、計三隻（總噸數一八、一三三噸）

巴奈馬、ヴエストフホルド號（一四、五四七噸）一隻

アルゼンチン、エルネスト・トルンギスト號（六、五四七噸）一隻

ソ聯、アリウート號（五、〇五五噸）一隻

諾威は外に一萬噸級の仲積船四隻を有し、船隊全部の乗組員及従業員合計九千人、一年の採取鯨量四十五萬噸、時價一億三千萬圓に達するといふ。

捕鯨船隻數（一九三七年調）

諾威九十八隻（諾威は今旧百五十隻に達して居るといふ）英國八十二隻、日本三〇隻（今日五十七隻）獨逸三一隻、巴奈馬九隻、アルゼンチン六隻

國際捕鯨條約及び捕鯨取締規則

歐米諸國の捕鯨史は極地探險とあひ交錯し、あひ關聯して居る事は既に述べた通りであるが、捕鯨方法の改良進歩並びに捕鯨漁場の盛衰推移は、一に濫獲に基づく鯨鮮のストックの減少又は絶滅とその歩調を共にして居るといふるのである。

茲に於て何等か人爲的に、更に進んで政策的に、濫獲と競争を抑制して、鯨族の急減を阻止すると同時に、鯨油及び其他の生産物の市價暴落（一九三一—三二年度は其好例）を防止すべき事の必要は、夙に各國斯界間の大問題となつて居つた。

この目的を達成する爲めに、關係各國の政府及び斯業の代表者會議を開催すべしとの聲は

可成り以前からあつたのであるが、一九三〇年四月に最初の國際會議が伯林に於て開かれ、一つの國際捕鯨案約が締結されたのであるが、英國諾威二ヶ國の批准手續がおくれた爲め、この條約は一九三五年に初めてその効力が發生したのであつた。

既に述べたるごとく一九三〇年——三一年度に於ける南氷洋の捕鯨成績は稀に見る大豊漁であつて、生産過剰の爲め、鯨油の利用さきである油脂市場に於ける油價は暴落に次ぐ暴落であつた。この鯨油市價を回復する手段の一として、翌年は諾威船隊は一隻も南氷洋に出漁しなかつた位ひであつた。

この異變は一九三〇年締結の國際捕鯨條約の内容を修正すべき必要を促がすに至り、英諾二ヶ國は、この條約を批准する前に、異變對策の爲めに各種の交渉をなすに至つた。

即ち一九三二年——三三年度の出漁に對しては、兩國間に捕鯨頭數の制限、即ち鯨油の生産制限の協定を行つたのである。しかるにこの協定もいよく實施して見ると、種々の不自然と不自由、各種の缺點を發見したので、翌々年即ち一九三四年——三五年は、右記生産協定

の代りに出漁期間の制限を行ふ事となつた。即ち十二月一日より捕獲に着手し、三月三十一日限り捕獲をうち切るといふのであつた。しかるにこれでもまだ生産過剰となる恐れがあつたので、一九三五年——三六年度は、英諾二ヶ國間の協定により、漁期を更に短縮して十二月一日から三月十五日迄としたのであつた。

一九三六年——三七年の漁期協定については、諾威オスロに於て會議を開き、種々の難交渉の結果、更に漁期を短縮して、十二月八日より三月七日迄とした。即ち最初の協定に比するるとき、約一ヶ月を短縮したのである。この外捕鯨船の制限をも協定し、工船一隻につき五隻乃至七隻とした。

しかるに其後新興捕鯨國が陸續と捕鯨船を南氷洋に派遣するものが出てきたので、一九三七年六月ロンドンに於て第二回の國際捕鯨會議を開き、伯林會議の協定事項、並びに其後の情勢の變化により主として英諾二ヶ國間に於て協定せる事項（漁期及捕鯨船制限）を、他の南氷洋出漁の捕鯨國にも適用せしめやうとしたのであつた。當時の關係出席國は英國、諾威

南阿、北米合衆國、アルゼンチン、濠洲、獨逸、アイルランド、新西蘭であつた。しかるにこの會議は、日本、加奈陀、丁抹等の如く、南氷洋にも出漁すると同時に、捕鯨國として古い歴史をもつて居るものが出席しなかつたので、一九三八年六月再びロンドンに於て第三回の國際捕鯨會議を開き、前年度出席國へは勿論、缺席國へも是非出席されべき旨の招待狀を發送した。

日本も折角招待されたのであるが、其迄は英諾二ヶ國が勝手に且つ内緒に、種々の協定をして居りながら、情勢が急に變化すると、今度は手の平を翻すごとく國際會議に出席しろとは餘りに蟲がよすぎるものであり、餘りにも横暴なる英諾二ヶ國の御都合主義勝手主義なるに對し、政府側にも、又業者側にも、最初はこれをはねつけやうとの意見もあつたが、翻つて考ふるに、出席を拒絶する結果、政府としては外交上に於て國際關係に悪影響を及ぼす事を憂い、業者側としては折角採取した鯨油の唯一の買主であり貿易市場である、英諾二ヶ國の購入ボイコットを喰ふ危険もあり、かたぐこの年は先づオプザーバーとして出席すべき

旨を通知したのであつた。

しかしこの時は日本は既に南氷洋向け捕鯨工船として四隻を使用して居り、更に二隻（第三圖南丸、極洋丸）を建造中にて、一九三八年には出漁する準備中なりしを以て、正に世界第三位の捕鯨國であり、日本の缺席乃至はオプザーバー程度の出席では國際會議召集の意義著しく減退すると、いふ事で、英國政府は主として強硬なる態度を持したので、日本も遂に妥協し、代表としてロンドン駐在の武藤外務商務官、顧問として英國大使館二等書記官小瀧氏、同じく農林省技師大村氏、並びに囑託（專問委員）として、日本水産捕鯨部の大西廉作氏を出席せしめたのであつた。

尙この會議に出席した各國代表は、前年度ロンドン會官に出席せる國の外、日本、加奈陀、佛蘭西、ニューファウンドランドであり。葡萄牙はオプザーバーとして出席し、前年度出席せる國で缺席せるは新西蘭一ヶ國であつた。

それで右記せる我が國代表團がこの會議に出席して原案を研究してみると、捕鯨禁止乃至

は制限の各要項は歐洲のみに特種の捕鯨事情にその考慮の基礎を置いたものが多く、又禁止條項にしても英諾二ヶ國にとつては都合がよいが、他國殊に日本にとつては甚だ困るといふ（たとへば脊美鯨、克鯨の禁止なども既にそのストックのない彼等と、略んどこの鯨種の捕獲に依存する日本とは事情を異にし、又は出漁時期乃至終漁時期なども、鯨油取引市場が歐洲にある現状に於て、彼等の場合と、とつた鯨油をわざわざ歐洲に賣りに行く日本の場合とは事情を異にす）ことが明らかになつたので、日本代表は、この國際協定を今直ちに特殊の事情ある日本の沿岸捕鯨に適用さるゝのは困る、又南氷洋捕鯨の協定にせよ、英諾二ヶ國其他の諸國は多年出漁して居り、多くの知識と經驗を有つて居り、又伯林會議以來の空氣を熟知して居るが、日本は本年の國際會議に初めて呼び出されて、從來の經緯も分らず、南氷洋捕鯨に對する今後の方針や目安のない前に、この協定を實施しろといはれても困るから、この協定の履行義務を日本のみは一年延期してくれと主張した。

各國は日本のこの申し出でを聞いて、世界第三位の捕鯨國たる日本がさういふ事をいふの

は怪しからん、日本が飽くまでも除外例を主張するなら、日本船隊の採取した鯨油の不買同盟をするなどと暴言をするやら、一三日會議を中止するやら、すつたもんだの紛糾があつたが、結局日本の主張を容れ、日本は一九三九年——四〇年度よりこの國際協定に加はり、その義務を履行する事となつた。因にかく日本の主張の通過した裏には顧問であつた小瀧氏、囑託として働いた専門家の大西氏の活躍は誠に目覚ましいものがあつた。

國際捕鯨條約（議定書）及び捕鯨取締協定の全文は別項の通りであるが、その要點は左の如きものである。

一、この條約及び協定の精神が履行されて居るか否かを監視する爲め、各捕鯨工船に當該國の監督官吏最低一名を乗船せしむべし。

二、克鯨 (Gray Whale) 及脊美鯨 (Right Whale) の捕獲を禁ず。

三、白長鬚、長鬚、抹香、坐頭等の鯨種については左の體長以下の捕獲を禁ず。

白長鬚七〇呎以下、長鬚五五呎以下、坐頭三五呎以下、抹香三五呎以下。

- 四、稚鯨 (Calves) 及び乳呑鯨 (Suckling Whale) 並びに以上の二つのうち何れか一つ又は双方を随伴する牝鯨 (Female Whale) の捕獲を禁ず。
- 五、南緯四十度以南の水面に於ては、十二月八日以前又は翌年三月七日以後に於て、有鬚鯨を捕獲処理する目的をもつて母船及捕鯨船を使用することを禁ず (これによると抹香鯨は漁期の制限なき事となる)
- 六、南緯四十度以北の大西洋、デービス海峡、バフィンランド海、グリーンランド海、南緯四十度北緯三十五度の間に於て、西經百五十度以東の太平洋、南緯四十度北緯二十度の間に於て西經百五十度以西の太平洋、南緯四十度以北の印度洋に於ては、如何なる時期に於ても捕獲処理の目的を以て母船及捕鯨船を使用する事を禁ず。
- 七、捕獲せる鯨は總て出來うる限り完全にはを利用すべし (鯨油にならないからといって鯨體の各部を海中に投棄する事を禁ずの意)
- 鯨體又はその一部分を食用及飼料 (Fish mill) に供する場合を除き、鯨油は母船又は

- 陸上根據地に曳行されたる鯨體の、總の内臓、鯨鬚、其他一切の鯨皮、鯨肉 (食用に適せぬ抹香の肉を除く) 及び鯨骨より搾取すべし。
- 八、捕獲してより前項の處理が三十六時間以内に完了するといふ見透しがつかざるときは、新に捕獲する事を禁ず (いくつもの捕獲した鯨を母船の船尾につなぎ、解剖處理する中、捕獲後三十六時間を経過せる爲め、鯨體に注入せる壓搾空氣その他の爲めに鯨體内部に瓦斯が発生し、内臓、肉等の腐敗を齎らし、鯨體の一部を抛棄する事がないやうにといふ意味)
- かくの如く嚴重な規定を設けて、その取締りに各國の關係政府の役人が監督官として乗つて居る (日本の母船にも農林省水産局の技師又は技手が一人又は二人乗船し、定尺、解剖等の監視に當つて居る) にも拘らず、違反行爲は絶へ間ないと見え、先年諸威のテレビツケン號事件といふものが起つた。
- これは工船テレビツケン號がこの國際協定の違反行爲の數々をなした許りか、これを注意

した乗船監督官の職務執行權を妨害した行爲を爲し、歸航後監督官から司法府に告訴し、裁判となつたが、判決の結果は何と驚くべし、テレビツケン號の船長は罰金として諾威政府に一志三片を拂へといふのである。何萬圓何十萬圓といふ不正な利得をしたのに對し、一志三片とは開いた口も閉がらないが、國際協定の嚴守と、諾威の國際的立場との間を行くところの名判決であるとの聲が斯界に高いと聞いて居る。

尙國際捕鯨協定の全文、並びに最終議定書^{プロトコール}を掲ぐる事にする。

鯨業取締協定

南阿聯邦、亞米利加合衆國、アルゼンチン共和國、オーストラリア自治植民地、獨逸、大ブリテン北愛蘭聯合王國、アイルランド自由國、ニュージールランド、諾威ノ各國政府ハ捕鯨業ノ隆盛ヲ確立スル事及此ノ趣旨ニ基キ、鯨族ノ保護ヲ目的トシテ左ノ條項ヲ協定セリ。

第一條 締約各國政府ハ本協定ノ諸規定ノ適用及之ニ違反スル行爲ノ處罰ヲ確保スル爲適當

ノ方法ヲ講ズベク、特ニ其ノ管轄ニ屬スル各母船ニ捕鯨監視官ヲ少クトモ一名配處スベシ。

監視官ハ其國政府ニヨツテ任命サレ給料ヲ支給セラルベシ

第二條 本協定ハ第十八條ニ規定セル如ク締約國ノ管轄ニ屬スル母船、捕鯨船、陸上根據地及當該捕鯨船ニヨリ鯨漁ガ行ハルル總テノ水面ニ適用ス

第三條 本協定及之ニ基キテ發セラルル諸規則ノ違反ニ對スル告發ハ政府又ハ當該官廳ニヨツテ規定セラルベシ

第四條 克鯨及脊美鯨ノ捕殺ヲ禁ズ

第五條 左記ニ掲グル體長未滿ノ白長須鯨、長須鯨、座頭鯨、抹香鯨ノ捕殺ヲ禁ズ

- 一 白長須鯨 七〇呎
- 二 長須鯨 五五呎
- 三 座頭鯨 三五呎

四 抹香鯨

三五呎

第六條 稚鯨及乳吞鯨並ニ稚鯨及乳吞鯨ヲ隨伴スル母鯨ハ之ヲ捕殺スルコトヲ得ズ

第七條 南緯四十度以南ノ水面ニ於テ十二月八日ヨリ翌年三月七日迄(兩日ヲ含ム)ノ期間

以外ニ於テ有鬚鯨ノ捕獲又ハ處理ノ目的ニテ母船及附屬捕鯨船ノ使用ヲ禁ズ

但シ一九三七——三八年度漁期ニハ其ノ期間ハ一九三八年三月十五日迄延長セラルベキコ

トトス(當日ヲ含ム)

第八條 十二ヶ月ノ期間中六ヶ月以上ニ亙リテ凡ユル區域及水面ニ於テ鯨ヲ捕獲又ハ處理ノ

目的ニテ陸上根據地及之ニ所屬スル捕鯨船ヲ使用スルコトヲ禁ズ

但シ右六ヶ月ノ期間ハ繼續的ナル事ヲ要ス

第九條 左記ノ如何ナル區域ニ於テモ有鬚鯨族ノ捕獲或ハ處理ノ目的ニテ母船及其ノ附屬捕

鯨船ヲ使用スルコトヲ禁ズ

一 南緯四十度以北ノ大西洋及「テーヴィス海峽」「バフィン灣」「グリーンランド」

海

二 南緯四十度、北緯三十五度ノ緯線間ニ於ケル西經百五十度以東ノ太平洋

三 南緯四十度北緯二十度ノ緯線間ニ於ケル西經百五十度以西ノ太平洋

四 南緯四十度以北ノ印度洋

第十條 本協定ノ規定ニ拘ラズ各締約國政府ハ科學的調査ノ目的ニテ鯨ヲ捕殺、處理スル事

ヲ鯨數ノ制限及締約國政府ガ適當ナリト認ムル其他ノ條件ヲ附シテ、其ノ國民ニ特別ニ許

可スルコトヲ得、本條ノ規定ニヨル鯨ノ捕殺及處理ハ本協定ノ施行ヨリ除外セラルベシ、

各締約國政府ハ何時ニテモ本條ノ規定ニヨル許可ヲ取消スコトヲ得

第十一條 捕獲シタル鯨體ハ總テ出來得ル限り完全ニ之ヲ利用スベシ、鯨體又ハ其ノ一部分

ヲ食用及飼料ニ供スル場合ヲ除キ、鯨油ハ母船又ハ陸上根據地ニ曳行セラレタル總テノ鯨

ノ内臟、鯨鬚及鰭部以外ノ一切ノ皮、肉(抹香鯨ノ肉ヲ除ク)及骨ヨリ煮沸其ノ他ノ方法

ニヨリ搾出スベシ

第十二條 捕殺ノ時ヨリ三十六時間以内ニ、其ノ設備及人員ニ依リ、本協定第十一條ニ從ヒ有效ニ處理セラレ得ル以上ノ鯨ヲ、如何ナル場合ニ於テモ當該母船又ハ陸上根據地ニ引渡スコトヲ得ズ

第十三條 母船、陸上根據地並ニ捕鯨船ノ砲手及船員ハ、其ノ給料ガ捕獲シタル鯨ノ種類、大小及生産量等ニ依テ定メラルベク、單ニ鯨ノ捕獲頭數ニノミ依ルコトナキ條件ヲ以テ雇傭セラレザルベカラズ、且ツ本協定ニヨリテ捕獲ヲ禁止セラレタル鯨ニ付テハ、砲手及船員ニ對シ賞與乃至作業ノ結果ニ關聯シテ計算サルベキ其ノ他ノ報酬ヲ支出セザル可キモノトス

第十四條 前途ノ效力ヲ有セシムル爲各條約國ハ其ノ管轄ニ屬スル捕鯨船ニ關シ、各砲手及船員ノ給料及其ノ給料ガ算出セラレタル仕譯書ヲ提出セシムベシ

第十五條 本協定ノ第五條、第九條、第十三條、第十四條ハ新タニ履行セラルルモノナルヲ以テ、前記各條ノ規定ハ一九三七年十二月一日以前ニ於テハ、現在操業シ或ハ右期日以前

ニ鯨漁ニ關スル實際的行動ヲナセシ母船、陸上根據地及捕鯨船ニ適用セズ、斯ル母船、陸上根據地及捕鯨船ニ關シ本協定ハ如何ナル事情アルモ右期日以降ハ效力ヲ發生スベシ

第十六條 締約國ハ其ノ管轄ニ屬スル總テノ母船又ハ陸上根據地ニ關シ、各工場ニ於テ處理シタル各種鯨ノ頭數、等級別鯨油總生産量、肉粉、肥料及其ノ他ノ生産物ノ數量、並ニ母船又ハ陸上根據地ニ於テ處理セラレタル鯨ノ捕獲ノ日時及場所、種類、性別體長及若シ胎兒ヲ有スル場合ハ、確カメ得ラルルナラバ其ノ體長性別ノ記録ヲ提出セシムベシ

第十七條 締約國ハ其ノ管轄ニ屬スル一切ノ捕鯨作業ニ關シ、本協定ノ第十六條ニ規定シタル統計報告及鯨ノ哺育區域並ニ回游路ニ關シ締約國ニ依リ集得シ得タル報告ヲ在「サンデヨールド」國際捕鯨統計局ニ報告スベシ

右報告ヲ通報スルニアタリ各條約國政府ハ特ニ左ノ事項ニ留意セラルベシ

(A) 各母船ノ名稱及噸數

(B) 捕鯨船ノ數及合計噸數

(C) 該當期間中ニ操業セル陸上根據地表

第十八條 本協定ニ於テハ左記ノ各用語ハ夫々下記ノ如キ意義ヲ有スルモノトス。即チ

「母船」 トハ船内又ハ甲板上ニ於テ鯨體ノ全部又ハ一部ガ處理セラルル船舶ヲ謂フ

「捕鯨船」 トハ鯨ヲ追跡シ捕獲シ牽引シ曳船シ監視又ハ偵察ノ目的ニ使用セラルル船舶

ヲ謂フ

「陸上根據地」 トハ陸上又ハ之ニ近接スル領海内ニ於テ鯨體ノ全部又ハ一部ガ處理セラルル工場ヲ謂フ

「有鬚鯨類」 トハ有齒鯨類以外ノ總テノ鯨種ヲ謂フ

「白長鬚鯨」 トハ下記ノ名稱ノ鯨ヲ謂フ

「シツバルドス・ロルクオール」 「サルハー・ポットム」

「長鬚鯨」 トハ下記ノ名稱ノ鯨ヲ謂フ

「コンモン・フィンバツク」 「コンモン・フィンナー」 「コンモン・ロルクオール」 「フ

イン・バツク」 「フィン・ウエール」 「ベーリング・ウエール」 「レーゾア・バツク」

「ツルー・フィンウエール」

「克鯨」 トハ下記ノ鯨ヲ謂フ

「グレイ・ウエール」 「カリフォルニア・グレイ」 「デビル・フィッシュ」 「ハード・

ヘッド」 「ムセル・デイツガー」 「グレイ・バツク」 「リツプ・サツク」

「座頭鯨」 トハ下記ノ名稱ノ鯨ヲ謂フ

「バンチ」 「ハンブバツク」 「ハンブバツク・ウエール」 「ハンブバツクド・ウエール」

「ハンブ・ウエール」 「ハンチバツクド・ウエール」

「脊美鯨」 トハ下記ノ鯨ヲ謂フ

「アトランチツク・ライト・ウエール」 「アークチツク・ライト・ウエール」 「ビスケ

イアン・ライト・ウエール」 「ボーヘッド」 「グレート・ボラー・ウエール」 「グリ

ーンランド・ライト・ウエール」 「グリーンランド・ウエール」 「ノルドカツバー」 「ノ

「ス・アトランチック・ライトウエール」「ノース・ケーブ・ウエール」「バシフイツク・ライト・ウエール」「ビグミイ・ライト・ウエール」「サウザン・ビグミイ・ライト・ウエール」「サウザン・ライト・ウエール」
 「抹香鯨」トハ下記ノ名稱ノ鯨ヲ謂フ
 「スバーム・ウエール」「スバーマセト・ウエール」「カシヤロ」「ボット・ウエール」
 「體長」トハ如何ナル鯨種ニ於テモ、水平ニ直線ニ測定セシ、吻端ヨリ尾鰭ノ岐點ニ至ル迄ノ長サヲ謂フ

第十九條 本協定批准書ハ出來得ル限り速ニ「大ブリテン」北愛蘭聯合王國政府ニ寄託セラ
 ルベキモノトス、本協定ハ調印國ノ半數以上ガ批准書ヲ提出セル場合ニ效力ヲ發生シ、右
 政府中ニハ大「ブリテン」北愛蘭聯合王國・獨逸・諾威ヲ包含スベシ。
 半數以上ノ右政府ニ包含セラレザル他ノ政府ニ於テハ批准書ノ提出ノ日ヨリ效力ヲ發生ス
 聯合王國政府ハ本協定ガ斯クシテ效力ヲ發生セシ日期日及其後批准書ヲ受理セシ場合ハ其ノ

期日ヲ他ノ政府ニ通告スベシ

第二十條 本協定ハ調印セシ政府ガ夫々本協定ヲ履行シ得ル範圍ニ於テ、一九三七年七月一
 日ニ假ニ效力ヲ發生スベシ、若シ本協定ニ署名セシ日ヨリ二ヶ月以内ニ如何ナル政府ナリ
 トモ本協定ヲ批准スルヲ好マザル旨聯合王國政府ヘ通告セバ該政府ニ對スル本協定ノ假適
 用ハ消滅スベシ

聯合王國政府ハ本協定ヲ批准スルヲ好マザル政府ノ名稱ヲ他國政府ヘ通告スベシ、該通告
 ヲ受理セシ政府ガ批准スルヲ好マザル場合ハ、其通告受理ノ期日ヨリ一ヶ月以内ニ其ノ批
 准及加入調印ヲ廢棄スル事ヲ得ベシ、該政府ニ關スル協定ノ假適用ハ之ニ依リ消滅スベシ
 協定ノ加入取消シ及ソノ報告ハ總テ聯合王國政府ヘ通知セラレベク、右ハ聯合王國ニ依ツ
 テ他ノ政府ニ通告セラレベシ

第二十一條 本協定ハ前條ノ規定ニ依リ一九三八年七月三十日迄效力ヲ有スベク、若シ右期
 日以前ニ聯合王國、獨逸、諾威ヲ包含スル締約國政府ノ半數以上ガ該期間ノ延長ニ同意ス

ル場合ハ其後モ效力ヲ有スベシ、有効期間ガ延長スル場合ニハ締約國政府ガ其ノ修正ニ同意ヲ見ル迄效力ヲ持續ス、但シ各締約國ハ一九三八年六月三十日以後何時ニテモ英國政府ニ對シ毎年一月一日以前ニ豫告シテ本協定ヲ廢棄スル事ヲ得（英國政府ハ該通告ヲ受理セバ直チニ其レヲ他ノ締約國政府ヘ通告スベシ）該政府ニ關シテハ六月三十日以後協定ノ效力ヲ消失シ、亦他ノ各締約國ハ本通告ヲ受理セシ日ヨリ一ヶ月以内ニ同様ノ手續ニ依リ本協定ヨリ脫退シ得ベシ、其ノ場合ハ右期日（六月三十日）以後該政府ニ對シ本協定ハ失効ス

第二十二條 本協定ヲ調印セザリシ如何ナル政府モ、本協定ガ效力ヲ發生セシ以後、期日ノ制限ヲ受ケル事ナク本協定ニ加入スル事ヲ得、加入ハ聯合王國政府宛書面ニテ通告スル方法ニ依リ爲サル可ク、右加入書受理ノ期日ヨリ直チニ其ノ效力ヲ發生ス。聯合王國政府ハ本協定ヲ調印又ハ加入セシ總テノ政府ニ對シ寄託セラレシ加入書及加入書寄託ノ期日ヲ通告スベシ

正式ニ任命セラレシ下記署名者ガ本協定ニ署名セリ、本協定ハ英國政府ノ記録所ニ保存セラル可キ單一ノ正本ニ對シ、一九三七年六月八日ロンドンニ於テ調印セラレタリ、右ニ對シ英國政府ニヨリテ確認セラレタル謄本ガ他ノ締約國政府ニ交付セラル可キモノトス

南阿聯邦政府代表

F. J. Du TOIT.

亞米利加合衆國政府代表

HERSCHEL V. JOHNSON.

REMINGTON KELLOGG.

アルゼンチン共和國政府代表

MANUEL E. MALBRAN.

M. FICANTI.

T. L. MARINI

オーストラリア自治植民地政府代表

S. M. BRUCE

獨逸政府代表

WOHLTHAT.

大ブリテン北愛蘭聯合王國政府代表

HENRY G. MAURICE

GEO. HOGARTH

アイルランド自由國政府代表

SEAN O'FAOLAIN O'DULCHACNTGH

G.MCNAMARA

諾威政府代表

最終議定書

BIRGER BERGERSEN.

一、本日捕鯨取締協定ノ調印ヲ完了セシ本會議ハ、直チニ其ノ效果ヲ收ムベク參加國政府ハ
下記ノ如キ諸觀點ヲモ考慮ニ入レラレムコトヲ希望ス

二、本協定ハ一ケ年間其ノ效力ヲ有シ、且參加國政府若クハ其等ノ中イヅレカノ政府ガ之レ
ニ反對セザル限り右協定期間以後ニ於テモ效力ヲ持續スル様期待サル
尙本會議ノ意見トシテハ捕鯨事業ノ隆盛ガ依テ繋ガルベキ鯨族維持ニ關シテ寄與スルコト
大ナルベキナリ

三、然シ經驗ニ徴セバヨリ良キ保護方法が必要ニシテ且望マシキ事ナリ、故ニ本會議ハ鯨族
ノ保護及濫獲防止ニ對シ、ヨリ以上ノ方法ガ關係政府ニヨリテ遲滞ナク試ミラレ、且政府
ハ法令ニ依ツテ、經驗ガ許ス限リノ鯨漁取締規則ヲ課シ得ルニ必要ナル手段ヲ講ズベキ事

ヲ希望ス

四、本協定ハ母船及陸上根據地ノ鯨漁ニ對スル一般の適用ノ規則ヲ主トシテ制定セリ

此等規則中最重要ナル事項ハ禁漁期間ノ遵守、既ニ絶滅ニ瀕セル鯨種ノ捕獲禁止、稚鯨、乳呑鯨ヲ隨伴スル母鯨ノ捕獲禁止及各種鯨ニ對スル制限體長以下ノ捕獲禁止、捕獲セラレタル鯨體ノ經濟的及徹底的處分利用及捕獲セル時ヨリ母船又ハ陸上根據地ノ如何ヲ不問鯨體ガ處理セラルル迄ノ時間ノ制限等ナリ

此等取締ノ目的ハ鯨ノ捕殺頭數ヲ制限シ以テ鯨體ノ濫費ヲ防止スルニアリ

五、然シ本協定ノ或ル條項、特ニ廣範圍ノ水面ニ於ケル有鬚鯨類ニ對スル母船式鯨漁業ノ絶對的禁止ノ條項ハ母船式鯨漁業ニノミ適用セラルルニ付此處ニ母船式鯨漁業ト沿岸捕鯨業トノ差異ニ付キ一言セザルベカラズ。陸上根據地特ニ赤道附近ノ根據地ニ於テ行ハレシ鯨漁ハ、捕獲セラレシ鯨體ノ生理的狀態ハ鯨油ノ生産ガ低下スル如キ狀態ニアリ、且鯨ノ分挽期ニ捕獲セララルル故ニ濫獲、損傷ノ度甚シト論ゼラレテ居リ、此レニ對シテ本協定ニ於

ケル各種ノ鯨ニツキテノ制限最小體長ヲヨリ大ナラシメタルニ依リ、陸上根據地ヘ引渡サルベキ鯨ノ捕獲頭數ガ減ジ母船ノ如キ移動性ナキ陸上根據地ニ於テハ鯨ノ追求ニ不利ニシテ、且陸上根據地ニ於テ如何ニ捕獲セラルルトモ其頭數ハ全捕獲頭數總計ニ比シテ微々タルモノニ過ギヌトノ説アリ

本會議ハ、陸上根據地ノ鯨漁ガ慎重ニ研究セラレソノ研究ニ基キテ陸上根據地捕鯨業ニ對シ、若シ必要アラバ何等カヨリ以上ノ取締法ガ一般の區域或ハ特殊の區域ニ對シテ制定セラルル様考究スベキ事ヲ慫慂ス。本會議ハ、母船式鯨漁業ニ課セラレタル制限ハ、陸上根據地捕鯨業ノ發展ヲ誘致スル懼レアリ、故ニ各國政府ハ夫々自國ノ立場ニ依リ該發展ヲ阻止及制限シ得ベキモノナリトノ見地ヲ有ス

六、本會議ハ、政府ガ苦シ適當ナリト認ムルナラバ、鯨ノ濫獲ニ對スル更ニ嚴重ナル取締ヲ徹底スル爲メ、母船及陸上根據地ニ附隨シテ雇傭セラレ居ル捕鯨船ノ隻數ヲ制限シ得ベキ事ヲ慫慂ス

七、本會議ハ、各國政府ガ永久的ニ、若ハ一定期間如何ナル水面區域ニ於テモ絶對的ニ鯨漁ヲ禁止スル權能ヲ、現在有セザレバ今後之レヲ有スベキ事ヲ懲慝ス、過去ノ經驗ニ徴シ哺育海區ナリト證明セラレタル海區ハ永久的ニ禁漁シ、或ハ鯨漁ノ危害ヲ避クベキ鯨ノ避難區域ヲ設定スル爲ニ、大西洋若クハ其他ノ海洋ヲ選定シ周年禁漁トナス事ハ望マシキ事ト思ハル

八、本會議ハ各國政府ガ鯨ノ捕殺方法ヲ取締ル事ヲ懲慝ス、現在ノ捕鯨方法ニテハ鯨ハ致命的ニ損傷セラルルモ、推進砲及炸裂砲ヲ包含スル現在使用シ居ル砲及銃ガ不完全ナル爲メ鯨ヲ逸失スル事アリ、此ノ結果鯨ノ濫失ヲ招致ス、故ニ適當ナル砲ノ使用ニ依リ、則チ電氣ヲ應用シテ發射セラルル銃ヲ使用スル事ニ依リ、鯨ガ命中後速カニ失命シ斯克シテ鯨體ノ濫失ヲ避ケ得ル様ニ鯨ノ捕獲方法ヲ規定スル事ハ望マシキ事ノ如ク思考セラル、尙斯ル方法ヲ規定スル事ニ依リ現在ノ捕鯨方法ニ依ル慘酷性ヲ多少共減ジ得ラル可キ事ガ期待セラレ

九、本會議ハ、更ニ協定國ガ自國領土ニ登録セラレタル船舶ヲ非協定國ニ移轉スル事ニ依リ本協定及之ニ基キテ發セラルル諸規則ヲ履行セザル如キ事態ガ惹起セザル様然ル可キ手段ヲ講ズベキ事ヲ懲慝ス、然シテ此ノ目的ノ爲メ一國ヨリ他國ヘノ母船及捕鯨船ノ移轉ハ政府ノ認可ニ依ツテノミ許可セラルベキナリ

十、本會議ハ、協定セラレタル諸規則ガ鯨族ノ保護及捕鯨業ノ發達ニ對シ確實ニ貢獻スル所アラント信ズルモノナリ、本會議ニ參加セシ各國政府代表者ハ悉ク本協定ニ調印セシニ非ラズシテ、彼等代表者中ノアルモノハ本國政府ヨリ調印ノ權限ヲ賦與サレザルモノアリ、然レドモ結局本會議參加國政府ハ悉ク本協定ニ加入スベキモノナリ、本會議ハ、各締約國ガ之ニ參加セザリシ重要捕鯨國ガ本協定ニ加入スル様盡力スベキ事ヲ懲慝ス、本會議ハ、本協定ノ目的ガ非締約國ノ無統制鯨漁ノ發展ニヨツテ妨害セラルル懼レアルコトヲ認ム、其場合ニ於テハ本協定ノ效力ガ持續セラルルヤ、又ハ締約國政府ガ斯克シテ發生セル情勢ニ適合スル様該政府ノ取締規則ヲ變更スルコトニ同意セズ、更ニ各國ガ捕鯨ヲ自國民ニ無

制限ニ許可シ其ノ結果 鯨數ガ減少シ捕鯨業ハ收支相償フコトヲ得ザルガ如キ事態ヲ發生スルニ至ルヤハ測リ知レザル處ナリ、何故ナラバ本會議ハ、鯨漁ガ今ニシテ嚴重ニ制限セラレザレバ斯ル事態ハ恐ラク遠キ將來ニ非ザル事ヲ確信スル故ナリ、最後ニ本會議ハ更ニ改メテ來年度ニ於テ適時會議ガ開催セラレテ、次年度漁期ノ結果ヲ研究シ且ツ本協定ノ修正及擴張ノ問題ヲ考究セラレムコトヲ希望ス。

本協定ハ英國政府ノ記録所ニ保存セラル可キ單一ノ正本ニ對シ、一九三七年六月八日ロンドンニ於テ調印セラレタリ、右ニ對シ英國政府ニヨリテ確認セラレタル謄本ガ他ノ締約國政府ニ交付セラル可キモノトス。

次に捕鯨に關する我が國內の取締規定の該當案項を擧ぐると左の如し。

母船式漁業取締規則

昭和九年七月二十五日 農林省令第十九號

昭和十一年六月二十三日 農林省令第十二號

第四章 母船式鯨漁業

(第一章より第三章まで、即ち第一條より第三十九條までは省略)

昭和十三年六月八日 農林省令等二十二號
昭和十三年十一月十八日 農林省令第四十二號

第四十條 母船式鯨漁業ノ爲メ北緯二十度度以北ノ北太平洋(「ベーリング」海、「オホーツク」海及北氷洋ヲ含ム以下之ニ同ジ)ニ於テ使用スルコトヲ得ル母船ハ一隻ニ限り其ノ使用ヲ承認ス

第四十一條 母船式鯨漁業ハ東經百十八度及東經百五十九度ノ經度線竝ニ北緯二十度及北緯五十二度三十分ノ緯度線ニ依リテ圍マレタル海面ニ於テハ之ヲ營ムコトヲ得ズ

第四十一條ノ二 母船式鯨漁業者ハ北緯二十度以北ノ北太平洋以外ノ海面ニ於テハ克鯨又ハ背美鯨ヲ捕獲スルコトヲ得ズ

第四十一條ノ三 母船式鯨漁業者ハ左ニ掲グル鯨ヲ捕獲スルコトヲ得ズ
一 稚鯨、乳呑鯨又ハ稚鯨若ハ乳呑鯨ヲ隨伴スル母鯨

- 二 體長一九、八一メートル未満ノ白長須鯨
 - 三 體長一六、七六メートル未満ノ長須鯨
 - 四 體長一〇、六六メートル未満ノ座頭鯨
 - 五 體長一〇、六六メートル未満ノ鰹鯨
 - 六 體長一〇、六六メートル未満ノ抹香鯨
- 前項第二號乃至第六號ニ於テ體長トハ鯨ノ吻端ヨリ尾鰭ノ岐點ニ至ル迄ノ直線ノ長サヲ謂フ

第四十一條ノ四 母船式鯨漁業者ハ南緯四十度以南ノ海面ニ於テハ三月十六日ヨリ十月三十一日ニ至ル期間有鬚鯨ヲ捕獲スルコトヲ得ズ

第四十二條 母船式漁業者ハ農林大臣ノ承認ヲ受クルニ非ザレバ母船ノ鯨體處理設備ヲ改設スルコトヲ得ズ

第四十二條ノ二 母船式鯨漁業者ハ捕獲シタル鯨ヲ出來得ル限り完全ニ利用スベシ

鯨油ノ採取ハ皮脂ノ外、肉、骨其ノ他一切ノ部分ヨリ煮沸其ノ他ノ方法ニ依リ之ヲ爲スベシ但シ左ニ掲グルモノヨリハ鯨油ノ採取ヲ爲サザルコトヲ得

- 一 内臓、鬚又ハ鰭
- 二 食用、飼料用其ノ他適當ナル用途ニ供セラルベキ鯨體又ハ其ノ一部
- 三 抹香鯨ノ肉

第四十二條ノ三 管理人其ノ他母船式鯨漁業者ニ代リテ業務ヲ指揮スル者ハ鯨ヲ捕獲シタル時ヨリ三十六時間以内ニ、母船ノ乗組員ガ鯨體處理設備ニ依リ前條ノ規定ニ從ヒ處理シ得ベキ程度ヲ超エテ鯨ヲ捕獲セシメザル爲メ必要ナル措置ヲ講ズベシ

第四十二條ノ四 母船又ハ附屬漁船ノ砲手、船員其ノ他ノ乗組員ニ對スル歩合ニ依ル報酬ハ捕獲シタル鯨ノ數ノ外其ノ大サ、種類及鯨油其ノ他ノ生産物ノ數量ヲ斟酌シテ其ノ額ヲ定ムベシ

本則ノ規定ニ依ル制限又ハ禁止ニ違反シテ捕獲シタル鯨ニ就テハ、之ヲ捕獲シタル附屬漁